

聖陵院武谷は勇者である

ソウブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぼくは北欧の勇者システムを使うただ一人の男の勇者だ。”記憶に付いて離れない過去のあの子”によく似た郡千景さんを助けたいと思った。

みんなを誰一人死なせたくなくて、失いたくなくて、死だけは駄目だとだめだ死はだめだしは絶望ごみやめろふざけ守る守れないそんなことはない死ぬなしししシシシ唇を噛み切る。

それから勇者たちと共に人類を脅かすバーテックスと戦っていった。けれどぼくは力不足の現状に納得していなかったんだ。

そして、諏訪に訪れた時、通信機越しにしか話したことのない諏訪で一人戦っていた

勇者の女の子の最後を実感し、思い知らされた時、転機が訪れる。

そうしてぼくは、なりふり構わず壊れた暴走特急のように前にだけ進んでいた。たとえすべてなくしたとしても、約束は守る。

目次

1 話	千景さん、君は	1
2 話	終末戦争の始まり	18
3 話	君は情けなくなんてない	38
4 話	リーダーと副リーダー	56
5 話	女の子は恋(依存)をすると変わる	76
6 話	北欧の巨人 ヨトウン・バーテックス	97
7 話	で、デート	119
8 話	今日という楽しい一日	133
9 話	このひとときだけ	148
10 話	諏訪で	163

1 1 話	桜という植物に咲いた花が、散る前に	187
1 2 話	スコープオン・バーテックス	202
1 3 話	君との記憶	220
1 4 話	北欧の光輝くもの ヘグルヴェイグ・バーテックス	239
1 5 話	北欧の世界蛇 ヨルムンガン	256
ド・バーテックス		256
1 6 話	感情に導かれて	270
1 7 話	代償の結果	286
1 8 話	目が覚めるとき	300
1 9 話	六つの頭を持つ怪物	316

20話	北欧の大狼	フェンリル・バ	1
テックス	—	—	337
21話	北欧の竜	ニーズヘッグ・バ	1
テックス	—	—	349
22話	北欧の死者王	ヘル・ナグル	
ファル・バーテックス	—	—	372
23話	平成最後の戦い	—	387
24話	勝とうよフレンド	—	407
25話	それぞれの決戦	—	420
26話	ヴィクトリー	—	446
エピソード	—	—	478
エピソード2	—	—	488

1話 千景さん、君は

西暦二〇一八年、八月末近く――。

暑い日差しが存在する天気の良い日。

ぼくの地毛である金髪に眩しいほど照り返してしまふほどだろう。

まるがめじょう
丸亀城の裏。

ぼくたちの学校として一部改装され使われているから、校舎裏といえる。

日陰になった僅かに涼しくマシな空間だ。

僅かに涼しいといっても暑いことに変わりはなく、校舎裏なのでひと気が一切ない。

そんな場所に、クラスメイトであり勇者である郡千景――千景さんをぼくは呼び出していた。

校舎裏の壁に背を預けて待っていると、角からひよつこりと千景さんが姿を見せる。

ぼくは壁から背を離し、しっかりと立ち深呼吸。

これは、決意表明だ。

ぼくは今から千景さんに宣言する。

それはぼくが突き進むための儀式であり、千景さんをぼくの関与できないところで潰させないための保険である。

千景さんは歩いてきて、ぼくの前に立った。

千景「せいりょういん聖陵院くん……急にこんなところに呼び出してなんの用？」

武谷「たけや突然呼び出したのはごめん。千景さんにいいたいことがあったんだ」

千景「……いいたいこと？」

千景さんは警戒したのか身構えた。

武谷「そう、大事なことなんだ」

千景「大事なこと……」

ぼくは深呼吸をしてから、言い放った。

武谷「千景さんは、価値のある存在だ」

千景「……突然、なにをいつてるの……？」

武谷「千景さんがどうあろうと、ぼくはあなたを肯定する。ただそこに存在してくれるだけで、ぼくは価値を認めるよ。ぼくは君に生きていてほしい。何もしなくても、何をしても、千景さんはぼくにとって価値のある存在だ」

千景「なに……なにを……」

武谷「何かあった時は、いつでもぼくを頼ってくれ。ぼくは千景さんの絶対的な味方

だ」

ぼくは、千景さんを安心させるための——安心してほしいがための言葉を言い切った。

ポカン、とした顔をして固まっている千景さん。
やがて、口を開く。

千景「……馬鹿じゃないの？」

一言目が、それだった。

千景さんの頬がみるみる赤くなっていく。彼女のこんな顔は初めて見た。

千景「……ば、馬鹿じゃないの？」

二言目は、震えていた。

千景「……わ、私帰るわ……」

三言目のあとには、ぼくに背を向けていた。

そのままぎこちない動作で歩いて行く。

ぼくは千景さんのことを今まで見てきて、知って、千景さんが抱えているかもしれない問題を、なんとかかしたいという思いが芽生えた。

その結果が今の出来事だ。

本当に千景さんがなにかを抱えているかは、確信はない、さらに本人の口から聞いたわけではないけれど、この予感確信に近い。

似ている人をぼくは知っていた。その人にかなり似ているのだから、ほぼ間違いない。

ぼくがなんとかしてあげようなんて、何様だと自分でも思う。これはそんなおこがましい考えで、自己満足だ。

だけど、正直ぼくの勘違いでもなんでもいい。

ただ、言いたかった。

記憶に根づくあの子に言えなかったこと、既に言ったこと。

似ている千景さんに、押し付けてしまったただけだ。

それでも、押し付けなくても、ぼくは行動がしたかった。

千景さんの心は強くないだろう。きっと折れやすい、

だから、言葉をかけたかった。

そうすれば、今度はぼくでも何かを変えられると信じて。

千景さんは帰ってしまったけれど、ぼくの言葉はちゃんと聞いてくれたから、大丈夫なはずだ。

ぼくに頼ってくれるのかはわからないけれど、意識の片隅にでも置いておいてもらえ

れば、ストッパーにはなるはず。

自暴自棄になったり、一人で抱え込んで潰れてしまうようなことは回避できるだろう。

そうであってほしい。

とにかくぼくは、千景さんのためならなんでもするよ。

それは、千景さんだけでなく、勇者全員にだけれど。

千景さんは、特に気になったんだ。

side viewer

——とところ変わって、今起きた事を陰からこつそりと隠れて見ていた五人の少女。

若葉「今のは、なんだ……?」

腕を組み首を傾げる若葉。

杏「告白に決まってるじゃないですか! 初めて生で見ました!」

頬を上気させ、両手を頬に当ててへで頭かざりめを振りキヤーキヤーと騒ぐ杏。

友奈「すごい熱烈だったね! あんなぐんちゃん初めて見たし、どうするのかな」

球子「逃げてたし、断られたってことじゃないのか?」

ひなた「いえ、そうとは限りませんよ。むしろあの反応は……」

杏「ひなたさんの言う通りです！ 絶対あれは満更でもないけど照れて逃げちゃっただけです！」

球子「あんず、お前は少し落ち着け。いつになく騒がしいぞ」

杏「それをいったらタマっち先輩だつていつになく冷静ですね。——つは、もしかしてさっきの告白見てドキドキしちゃいました!? トキメキましたか!? やつと恋愛小説の良さをわかってくれました!?!」

球子「ぼっ!? 違うし! タマはいつもこんなんだ! そうくるだ!」

杏「顔赤くしちやつてかわいいですなタマっち先輩」

球子「あ、赤くねーよ! 普通だ! むしろ真つ青だ! たとえ赤かったとしても元からだ!」

若葉「ふむ……あれは告白なのか……。私には強い意思を持った決意表明のようなものに感じたが……」

ひなた「ふふっ。若葉ちゃんはそのままいでくださいね」

友奈はニコニコとしながらそんなみんなのやり取りを見ていた。

友奈は思う。

なにはともあれ、ぐんちゃんが幸せになる結果になつたらいいな、と。

main viewer

二〇一五年八月。

ぼくが勇者たちと出会ったばかりの頃のこと。

バーテックスに世界中が蹂躪され、四国に逃げ込んだ後、勇者達だけが——ひとりだけは巫女だが——通っている学校で、始めてみんなと会った時のこと。

教室にみんなが集まった。

若葉「乃木若葉だ。よろしく頼む」

ひなた「上里ひなたです。若葉ちゃんとは幼馴染です。よろしく頼みますね」

球子「タマは土居球子だ！ 仲良くしようなっ」

杏「伊予島杏です。よろしく頼みます」

友奈「高嶋友奈です！ みんなと友達になりたいです！」

武谷「ぼくは聖陵院武谷だ。一人だけ男でなんかアウエーな感じだけど、仲良くしてくれると嬉しいよ」

そして、最後の一人。

千景「……………」

みんなが挨拶していく中、何も言わずに隅の席に座り、話しかけるなオーラを発しだした一人の女の子。

一目見て、似ている、と思った。

ぼくの記憶に根付いた人に。

だから、かなり気になったんだ。

そして、行動に起こした。

その女の子の前まで近づく。

武谷「よろしくね」

気になったはいいけど、何を言ったらいいのか思いつかなくて、結局無難に先に言ったのと同じ、仲良くしたいという意味を伝えるだけになってしまった。

千景「……………」

武谷「えつと……………」

黙られたら、どうしようもなかった。

これは根気強く何度も話しかけないと駄目かな、と思った時。

千景「……………郡千景」

武谷「え？」

千景「私の名前……………」

武谷「……ああ！ よろしくね、千景さん！」

千景「……いきなり、名前呼びとか……」

ボソツと、何かを言ったのが聞こえた。

けれど小さすぎてなんて言っているのかは聞き取れなかった。

ぼくの耳は悪くない方だが、本当に小さすぎて分からなかったんだ。

武谷「ん？」

千景「……なんでもないわ」

ぼくと千景さんのファーストコンタクトは、そんな感じだった。

それから、日々が過ぎて行く。

ぼくは何度も千景さんに話しかけた。

ある時には、教室でゲームをしているのを見かけて接触を図ってみた。

武谷「ゲームが好きなんだね。それどんなゲーム？」

千景「……」

千景さんはヘッドホンを付けて画面ガン見で集中していたので返答はなかった。

友奈さんも、初日からぼくと同じで千景さんに話しかけていた。

友奈「ゲーム好きなんだね！　それどんなゲーム？」

千景「……FPS」

友奈「えふぴーえす……？」

千景「……自分の視点で、敵に銃を撃つて倒したりするゲーム」

友奈「へー！　難しそう」

ときには友奈さんに便乗して挨拶してみたり。

友奈「おはよう、ぐんちゃん！」

武谷「おはよう、千景さん」

千景「……おはよう、高嶋さん……と聖陵院くん」

ついでみたいだけど挨拶を返してくれた。

武谷「千景さん、一緒にご飯食べない？」

千景「……遠慮するわ」

それだけ言って去っていく千景さん。

あれ、ぼく嫌われてないだろうか。

そんな馬鹿な。

そんな思考が過ぎったことも最初の方は何度もあつた。

けれど、何度も話しかけるうち。

武谷「千景さん、おはよう」

千景「……おはよう、聖陵院くん」

挨拶を普通に返してくれるようになったり。

武谷「そのFPSって面白い？」

千景「……面白くなければ、やらない」

武谷「そりやそうだね」

普通に話に応じてくれるようになった。

友奈さんはぼくよりも信頼を勝ち取っていたけれど。

友奈さんは凄い。

あの明るさは天性の才能だ。

それでもとにかく、千景さんは初対面の時よりはぼくに少し打ち解けてくれたんだ。

二〇一八年八月末。

丸亀城の学校にある放送室。

その場所に、ぼくは若葉さんと共にいた。

長野を守っている勇者、白鳥歌野さんと通信するためだ。

最初は若葉さんだけが通信していたんだけど、ぼくも話してみたかったので今日はここにいます。

遠くにいて、今後会えるかもわからない勇者とも交流しておきたかったんだ。

出来ることなら会いたい、この四国以外にいるすべての勇者とも会いたい。

そして力になりたい。

けれど今は無理だ。

そんなことが出来るほどの力が無いから。

若葉「今から繋ぐぞ」

そうぼくに伝えてから、若葉さんが無線機のスイッチを入れて通信を繋いだ。

歌野『……諏訪より、白鳥です。勇者通信を始めます』

若葉「香川より、乃木だ。よろしくお願ひする」

武谷「と、付き添いの聖陵院武谷です。よろしくお願ひします」

歌野『聖陵院さん……？　　つてことは』

若葉「ああ、例の男の勇者だ」

武谷「ぼくって”例の”なんて言われる存在だったんですか？」

若葉「唯一の男の勇者なんて、異常な存在だからな。自然と目立つ」

歌野『男の子の勇者なんて、頼りがいがありそうですしね』

歌野『それでは改めて自己紹介を。長野で勇者をしている、白鳥歌野です。聖陵院さん、よろしく願いますね。乃木さんを助けてあげてください』

武谷「もちろん助けます」

若葉「私は別に助けを求めているのではないのだが」

歌野『なにかあったときに助けになってあげてください、みたいなニュアンスですよ』

若葉「ふむ、そうか……」

若葉「それで、白鳥さん、そちらの状況はどうだ？」

若葉さんが本題へと入った。

ぼくは黙って聞くことにする。

歌野『^{かんば}芳しくはありませんね。もともと、そんなことを言えば三年前のあの日から状況が芳しかったことなど一度もありません』

若葉「………違う」

歌野『今は現状維持ができるだけ……ザー………でしょう』

若葉 「すまない、通信にノイズが入ったようだ」

歌野 『ああ、現状維持ができるだけでも御の字だと言ったのです。通信のノイズ、最近多くなっていますね』

若葉 「そうだな……」

歌野 『この通信もいつまで続けられるか……』

一問空き、一転して若葉さんは口調と話題を変えた。

若葉 「ところで白鳥さん。そろそろ決着をつけようじゃないか……」

歌野 『ええ、私もそう思っていたところです。今日こそは雌雄を決しましょう……』

若葉・歌野 『「うどんと蕎麦、どちらが優れているか、をー!」』

若葉 「もちろん、うどんの方が優れているに決まっている。比べるまでもない」

歌野 『ええ、比べるまでもなく、蕎麦の方が優れているのは明らかです』

そこから始まり、若葉さんと白鳥さんは反論の応酬を繰り返した。

ぼくは見かねて、特に深く考えずに口を挟んだ。

武谷 「うどんと蕎麦はどっちも美味しいと思うんだけどな、どっちが上とかどうでも

いいんじゃないかな?」

若葉・歌野 『「どうでもよくない!」』

怒鳴られた。

それはもう、物凄い形相で。

白鳥さんの方は見えないけれど、きつと若葉さんと同じ顔をしている。

武谷「……う、うん。そうだね。どうでもよくない。大事なことだ」

こつわ。この話題は口挟むのもうやめよう。

校内にチャイムが鳴り響く。

若葉「時間切れか。蕎麦は命拾いをしたようだな」

歌野『それはこちらの台詞です。うどんこそ命拾いをしましたよ。……明日からは新学期が始まりますから、通信は放課後の時間にした方がいいですね』

若葉「うむ、そうしよう。では、また明日も。諏訪の無事と健闘を祈る」

歌野『四国の無事と健闘を祈ります』

武谷「ぼくも、祈ってます」

みんなが幸せに生きていくことを。

深夜。

寮の部屋。

暗い自室。

ベッドの上。

天井見つめ。

苦しい。

——助けたい。

凝った思いは呪いのように心を蝕む。

勇者を助けたい。

千景さんを助けたい。

手を伸ばすその手は塵となつて消える手が無い届かない力無い手の先に在った存在
消される何も無い闇手を伸ばす手は無い世界思考腐り落ちる散る墜ちる墜ちるオチル
血がチガ違う、ちががガ——

頭を壁にぶつけた。

天井見つめる。視界ボヤケ。

タスケタイ。

死は駄目だ死は駄目だ死は駄目だ失は駄目だ失は駄目だ失は駄目だ失は駄目だしぬな。

救いたい。

スクイタイ。

すく いたい

過去の面影が脳裏をちらつく。

武谷 「ぐ……ぐ……ぐ……」

唇を噛んだ。

強く、強く、意識を強く保つように。

唇は噛み切れ、血を滲ませていた。

——
神様……。

2話 終末戦争の始まり

綺麗な音色が、心地よく耳朵を打つ。

彼女はピアノを演奏する。

ぼくはそれを聴く。

この音楽室には、ぼくと彼女だけ。

美しく長い水色の髪を揺らしながら、彼女は整った相貌を真剣に染め、指を、体を動かす。

ぼくはその光景が好きで、彼女の演奏する曲が好きで。

今日も、ここにいる。

西暦二〇一八年、九月新学期。

ぼくはいつもよりかなり早めに登校していた。

あまり寝付けなくて変な時間に起きてしまったから、なんとなく教室に来てみたん

だ。

自分の席に座り、ミュージックプレイヤーを学生鞆から取り出した。プレイヤーに繋がったヘッドホンを被り、曲を流す。このピアノ曲を聴くと、いつも心が落ち着いていく。優しい記憶に直結しているからだろう。

と。

ガラガラ。開けられる教室のドア。

入ってきたのは若葉さんだ。

ぼくを見止めると、少し目を丸くする。

若葉「今日は随分と早いんだな。おはよう」

武谷「おはよう。うまく寝つけなくてね、変な時間に起きたただだよ」

挨拶を交わした後、若葉さんは箒を持って掃除を始めた。

ド真面目だな、と思う。

僕は席から立ち上がった。

武谷「手伝うよ」

若葉「軽く掃除する程度だ。これぐらい私一人で出来る」

武谷「だからって見てるだけというのもなんかいやなんだよ」

若葉「……そうか。お前がしたいのならば問題ない」

ぼくも掃除ロツカーから箒を取り出し、床にある少しのごみを掃き始める。

武谷「若葉さんはよく眠れた？」

若葉「ああ、だが、それは人と話す時ぐらい外したらどうだ」

僕の頭を指さして窘めるように言う。

なんのことだ？ と一瞬考え頭に手を当ててすぐに気づく。

ヘッドホンを被ったままだった。

着けていることが多いと、その感触が自然すぎて気づかないことはよくある。

武谷「ごめんね」

ヘッドホンを外して首にかけた。

若葉「それと、寝癖がついてるぞ」

武谷「本当ですか？」

慌てて手で均きんして整えようとするが、これだけでは直らないだろう。

若葉「君も勇者なら、もう少ししっかりしてくれ」

武谷「ごめんね」

若葉「あと、寝癖はここだ。水道で水を使って直してくるといい」

ぼくの頭の一部分を指さして言った。

球子「おはよー!! ああつ、また若葉が一番乗りかあ。つて、今日は武谷もいる!」
若葉さんと話している内に、タマさんが登校して来た。

タマさんと仲のいい杏さんも後ろから続いて入って来る。

今日も杏さん可愛いな。ぼくのドストライクな容姿をしている。

天使の柔肌みたいな白い肌。慈母の如き優しい表情。守つてあげたくなくなるような
オーラ。これこそが、ザ、女の子だ! といわんばかりに女の子の子しているかわい
い女の子だ。

だからといって恋慕している訳ではないが。

球子「おい武谷! あんずはかわいいがお前には他にいるだろう! それに寝癖つけ

たまま言つてもしまらないぞ!」

武谷「ぼく口に出してたかな?」

球子「そんな顔をしていた!」

武谷「そう? あと他にいるってなに?」

杏「かわいいって……え、えと、あの……」

顔を赤くして戸惑う杏さん。

目の前でこんな話をされたらそれはそうなるか。

かわいいけど。

球子「それにしても、昨日の様子が嘘のようなおどっぷりだなあんとず」

杏「き、昨日のは初めてあんな光景を見れて、少し興奮してはっちゃけてしまっただけですよ」

杏さんは顔を赤くしている。

二人はいつたいたい何の話をしているのだろう。

ひなた「おはようございます、皆さん」

次はひなたさんが登校して来た。

ひなた「——それはともかく武谷さん」

ひなたさんが、ぐぐいつ、と近づいてきて眉を八の字にしながら指を一本立てる。

ひなた「浮気はいけませんよ？ 私は若葉ちゃん一筋です」

なぜかしてもいないことで叱られた。

浮気？

どうということなの。

それにひなたさんが若葉さん一筋なのは関係ない。

千景「……………」

騒がしい朝の中、千景さんが教室に入って来る。

武谷「おはよう、千景さん」

千景「!? ……お、おは、おはよう……聖陵院、くん………」
千景さんの様子がおかしい。

明らかになにかに動揺している。

目の下に薄い隈ができています。

眠れなかったのだろうか。

もしかして、昨日のことが原因なのかな。

急にあんなこと宣言して、悩ませてしまっただろうか。

だとしたら悪いことをしてしまった。

武谷「千景さん、昨日のことだけど」

千景「!?」

武谷「あまり深く考えなくてもいいよ、ただぼくがそう思ってるということを知って
いてもらいたかったただだから」

千景「そ、そう……」

なぜか周囲の三人はニヤニヤとぼくらを眺めていた。

変な勘繰りをされているのでは。

訂正するのも面倒だけれど。

友奈「おはよーございまーす！ 高嶋友奈、到着しました。良かった、遅刻じゃない

！」

最後の一人が登校すると、こちらへと足を進めてきた。

千景「おはよう……高嶋さん」

武谷「おはよう友奈さん」

友奈「おつはよー、ぐんちゃん！ たけくん！」

千景「今日は……遅かったね」

友奈「うん。昨日、格闘技のテレビ番組を見て、見よう見まねで練習してたら興奮しちゃって眠れなくなっちゃって。てい！ 縦拳！ 回し蹴り！」

友奈さんが激しく動いた。

そう、スカートをはいた女の子が足を高く上げたんだ。

武谷「お……」

見え……。

直前、ぼくは、それを見てはいけない思いに駆られた。

視界の隅に、千景さんが右手をピースにするのが見える。

ぐさっ。

武谷「ギャー！」

千景さんに目潰しされた。

球子「あはははははははっ!!」

腹抱えて爆笑された。

今日が痛くて抑えているのでその腹立つ光景は見れない。

千景「高嶋さん……あんまり足、高く上げない方がいい……パンツ、見えそうだから」
友奈「あ! えへへ……」

恥ずかしそうにスカートを抑える友奈さん。

千景「気をつけて……ケダモノもいるんだから」

千景さんはぼくに視線を向けて言う。

そのケダモノつてのは誰のことなのか。

友奈「そうだね。男の子がいる前ではしたなかつたね」

友奈「それよりぐんちゃん、眠そうだけど大丈夫?」

千景「うん……大丈夫」

千景さんは、また視線をぼくに向けたのだった。

午前の授業。

教室の壇上で教師が基本的なことを説明していく。

バーテックスという人知を超えた化け物は、突然現れ、人類のほとんどを死に追い

やった。

通常の兵器は全く効かず意味を成さない。

斃せるのは勇者のみ。

四国や一部の地域は土地神に護られ、人類はあと一步のところまで抗っている。

そう、勇者。

勇者とは本来幼い少女しかなれない。穢れを忌み嫌う神に触れることができるのは、無垢な少女だけだから。それは神の声を聞く巫女も同じ。

勇者適性を持った特別な者、選ばれた一部の無垢な少女が土地神から力を授かり勇者となる。

けれどぼくは男だ。

そして無垢でもない。

しかし勇者である。

理由は、恐らく。

ここでいう勇者とは、また別の法則に則った勇者だからだろう。

千景「どうせだったら……土地神が戦えばいいのに……」

球子「多分、戦ったんだと思いますよ。ほら、バーテックスが攻めてくる前に、地震とか災害とか起こってましたし。あれ、土地神がやりあつてたせいだったんじゃないで

すか」

千景「……………」

ムツとしたように黙り込む千景さん。

武谷「ぼくに任せてくれていいよ」

千景「……………」

一瞬だけ千景さんはこちらを見た。

座学を終え、来たるべき戦いに備えるための戦闘訓練を経て、昼休み。

ぼくたちは七人全員で食堂へ向かった。

セルフサービス形式の食事だが、みんなうどんを取って来る。トッピングはそれぞれ違うが。

ぼくも流れでいつもうどんを取って来てしまう。好きなのを食べればいいのだろうけど、うどんも普通に好きなので。

談笑しながら食事していると、タマさんがボヤクように言った。

球子「……にしてもさー、毎日毎日訓練訓練って。なんでタマたちがこんなことしないといけないんだろーな」

ひなた「バーテックスに対抗できるのは勇者だけですからね……」

球子「そりや分かつてるよ、ひなた。でもさ、普通の女子中学生って言ったたら、友達と遊びに行ったり、それこそ恋……とかしちやったりさ。そういう生活してるもんじゃん」

若葉「今は有事だ、自由が制限されるのは仕方あるまい」

球子「うゝん……」

若葉「我々が努力しなければ、人類はバーテックスに滅ぼされてしまうんだ。私たちが人類の矛とならなければ——」

タマさんが声を荒げそうな顔で口を開きかけたとき。

ぼくは思わず口をはさんだ。

武谷「ぼくがいつかそんな生活ができるようにするよ」

タマさんを見てぼくは言った。

球子「武谷ひとりですんなことできるのかよ……」

勢いをそがれたように力無くタマさんは言葉を返してくる。

若葉「心意気は良いが、それはいささか大言壮語だと思うぞ」

武谷「難しいことはわかつてるよ。それでもそのぐらいの気持ちでぼくはいるってことだよ」

本当は、難しいどころの話ではないだろうけれど。

若葉さんの言ったとおり大言壮語かもしれない。

無駄に希望を持たせて後でタマさんにショックを受けさせないように言ってくれた言葉であろうことも分かる。

それでもぼくは言葉を撤回したりしない。

絶対に。

友奈「ごちそうさま！ 今日も美味しかった！」

場の暗い空気に差し込まれる明るい声音。

友奈「どうしたの、みんな？ 深刻な顔して」

若葉「……友奈……さっきまでの話、聞いていなかったのか？」

友奈「え、えつと……ごめん、若葉ちゃん！ うどんが美味しすぎて、周りのことが意識から飛んでつちやって……」

全員一斉のため息。ぼくは苦笑交じりに。

この明るさは、綺麗で尊いものだと思うから。

——失われてはならない、救われるべきものだと、思うから。

友奈「ええ!!」 なんでみんなため息つくの!？」

友奈さんは心外だと言うように周りを見回して、

友奈「大丈夫だよ。私たちはみんな強いし、みんなで一生懸命頑張ればなんとかなる

よ！」

笑顔で、そう言った。

放課後、ぼくと若葉さんは放送室に来ていた。

白鳥さんからの定期連絡を待っているが、何度も二人で諏訪へ通信で呼びかけても応答がない。

焦りは募った。

心臓の鼓動が早まる。

チリチリと記憶が刺激される。

夜になってようやく、回線が繋がった。

歌野『すみません……ザー……さん、せい……ザー……さん。少々こちら……ザー……ごたついておりました』

ノイズが多い、回線が安定しない。

若葉「いや、構わない。何かあったのか？」

歌野『本日午後、バーテックスとの交戦がありました』

若葉「……被害は？」

歌野『問題ありません……ザー……敵は撃退。人的被害は無しです』

若葉「そうか……」

無事でよかった。

ぼくと若葉さんは安堵の息をつく。

記憶のチラつきは一旦鳴りを潜めた。

歌野『四国の状況はどうですか？』

若葉「変わりない。こちらはバーテックスの侵攻もなく、訓練と学習の一日だった」

歌野『そう……ザー……安心しました』

若葉さんは今日の昼に起こったことを白鳥さんに話した。

みんなの不安とか、相談するように。

若葉「聖陵院も困ったやつでな。もしかしたらこいつが一番協調性がないかもしれない
い」

武谷「本人を前によく言ってくれるね」

歌野『そうですね……私も始め、似たような悩みを抱えていました。しかし、いずれその心配はなくなります……ザー……現実には想像よりも遥かに重く、私たちに決断を迫るのですから』

それは、わかっていた。

日々は変わりなく過ぎる。

いつもと同じ、授業、訓練。

大きな問題は起こらず、ただ過ぎた。

諏訪とのノイズ交じりの通信も毎日行われた。

一日、一日と消費され、続いていく。

変わらない毎日のはずだった。

だが、諏訪からの定期連絡は次第に時間が不安定になり、一日中繋がらない日も増えてきた。繋がってもノイズが大きく、聞き取りづらい。

また焦りが襲い来て、記憶が過ぎった。

息が辛い。

そして数週間が過ぎた頃、諏訪の異常は決定的になった。

歌野『ごめんなさい、通信……ザー……悪くて……ザー……』

疲労がありありと伝わる声。

武谷「何があつたんですか！」

若葉「聖陵院、落ち着け。白鳥さん、どうした？ 何かあつたのか」

歌野『……いえ、ちょっととしつこいバーテックスを退治してやっただけ……ザー

……ツクスの襲来の影響で通信機が壊れて……ザー……しばらく通信はできなくなりそう……ザー……そちらも大変だと思えますが頑張つて……ザー……なんとかなるものです。私も無理な御役目かと思いましたが……ザー……予定より二年も長く続けられて……ザー……』

若葉「白鳥さん!?! 聞こえているか!?!」

武谷「白鳥さん! ぼくはあなたに生きてほしい! 死なないでください。せめてぼくが助けに行くまで!」

今までの溜まった焦りとかをぶちまけた。

長い長いノイズが続いた後――

歌野『……心配してくれてありがとう。優しいんですね、聖陵院さん。その優しさを、近くの人に向けてあげて。……乃木さん、後はよろしくお願いします』

その言葉を最後に、通信は途絶えた。

武谷「……」

白鳥さん、やめてよ。それじゃまるで

死ぬみたいじゃないか。

武谷「……今から助けに行くよ」

若葉「やめろ。無駄に命を散らすだけだ」

武谷「でも！ それだと、白鳥さんが……！」

若葉「絶対に行くな」

若葉さんはぼくの腕を掴んだ。

その顔は、悲痛に染まっていた。

助けに行きたいのはぼくだけではない。

悲しいのはぼくだけではない。

その顔を見ていたら、ぼくは何も言えなくなってしまうた。

……

……

……

夜。ベッドの上。胸が苦しい。息が辛い。汗が気持ち悪い。

助けに行きたい。けれどここから一人で出てもバーテックスに喰われるだけだろう。

それはわかってるんだ。若葉さんに止められた時は冷静でなかったけど、わかってたんだ。

ぼくは無力なんだと。

無力。無力。無力。その文言が何度も叩き付けられる。

勇者のくせに、何もできない。ただのひとりの人でしかない。

……………。

くそつ今すぐにでも助けに行きたいんだそれは不可能だと言われたさつき自分でも考えた焦燥心煮え滾る絶望失望怒り何もかもできないやりたい為したい救いたいいたいイタイ

——いや、まだ大丈夫だ。白鳥さんが死んでしまったとは限らない。確認していない。白鳥さんは生きている。まだ助けられる。いつか救える。

奥歯が軋む。唇を噛み切った。

——神様……………。

あれ以来、諏訪からの連絡は途絶えて、来ていない。

白鳥さんは通信ができない状態。

長野は終わった。

白鳥さんはまだ生きています。

どこかに隠れて生き延びている筈だ。

生きています筈だ。

生きています。

いる。

放課後から時間が経った、誰もいない教室でぼくは夕日を眺める。

今日もヘッドホンを付けて、あの子のピアノ曲を聴いている。

この曲を聴いても、いつもみたいに心が落ち着かなかった。

突如——ぼくのポケットにあるスマホがヘッドホン越しからもよく聞こえる耳障りな警報音を鳴らした。

教室の時計の針が停まった。

窓の外を舞っていた木の葉も静止する。

スマホを取り出すと、画面には『樹海化警報』という文字。

樹海化——ぼくたちが住むこの場所を護るために神樹様が張った結界内に、パーテックスが侵入した際に神樹様が人々を守るため起こす現象。

その樹海化された世界の中で勇者たちはバーテックスと戦って倒さなければなら
ない。

そうしなければ、人類は蹂躪されて終わる。

白鳥さんのいた長野のように。

巨大な植物の蔦や根に覆われていく世界。

まるで世界の終末。

これから始まるのは終末戦争。

長野を潰して次は此処、四国を潰したいのだろう。

人間を殺したくて仕方がないのだろう。

くそつたれ。

武谷「だったら来いよ。ぼくがぶつ潰してやる」

ぼくたちの、最初の防衛戦が始まる。

3話 君は情けなくなんてない

スマホを取り出してマップを表示させる、勇者専用アプリの機能の一つで、このマップから勇者とバーテックスの位置が分かる。

学校の外に出て、みんなと合流しようとマップの光点を追った。勇者たちを見つける。

そこには一人だけですに変身して、和風で神秘的な青い戦装束を着た若葉さんと、大きな鎌を持った千景さんと、手甲を付けた友奈さんがいた。

千景「聖陵院くん……」

若葉「聖陵院、やれるか？」

白鳥さんのことで戦えなくなってるのか、という問いか。

武谷「当然だよ」

ぼくは何かあってもみんなの為に抗い突き進むだけだから。

そのみんなには、白鳥さんも入っている訳だけど。

友奈「たけくと若葉ちゃん、少し仲良くなった？」

そりや共に過ごしていれば少しは仲良くなつていくだろう。ぼくはみんなと仲良くなりたいたいと思つているのだから。

ここ最近は何訪へ通信するために放送室で若葉さんと一緒に過ごす時間が長かつたのがきつかけだろうか。

千景「……………」

千景さんはこちらをジツと見ていた。

友奈「あ、ぐんちゃん、たけくんはそんなことする人じゃないと思うから、大丈夫だよっ！」

そんなことつてなんだ。

千景「そう……………」

千景さんは目を逸らした。

球子「おおういっ！ みんなー！」

走り寄つて来るタマさんと、手を引かれる杏さん。

球子「悪い、遅くなつたっ！」

タマさんは旋刃盤を、杏さんは連射式クロスボウを持つている。

若葉「全員、揃つたな。……これが私たちの初陣だ。我々の手でパーテックス共を討

ち倒す」

千景「それはいいけど……当然、あなたが先頭で戦うのよね……あのバケモノたちと。リーダーなのだから……」

球子「誰が先頭とかじゃなくて全員で戦えばいいでしょ。それがチームワークつてもんですよ」

千景「チームワーク……」

武谷「チームワーク……」

ぼくはできるなら一人で戦いたい、みんなには危険な目には遭って欲しくない。

勇者たちを見回した。

気づく。

杏さんが小刻みに体を震わせている。顔色も悪い。

怯えていた――

千景「伊予島さんは……戦えるのかしら？」

杏「……………」

杏さんは俯き、何も答えない。

千景「土居さんたちがここへ来るのが遅れたのも……伊予島さんが萎縮して動けなくなっていたからでは……？ そんなあなたたちがチームワークなんて……口にするも

のじゃないわ……」

杏さんはぎゅつと目を瞑り、拳を握り締めた。震えは消えないまま、耐えるように。

千景「ましてや……」

武谷「千景さん」

千景「……なに？」

ぼくはデコピンを千景さんの額にした。

千景「あいたつ……」

武谷「なにその反応、かわいい」

千景「……っ?! いきなりこんなことして……なにをいつてるの……」

武谷「まあ、とにかくだ」

武谷「そんなこと言わないでくれよ。千景さん」

それは、千景さんのさっきまでの言に対して。

身近で大切な人に辛い顔をしてほしくないから。

今の状況、杏さんたちは当然として、言ってる千景さん自身だつていい顔はしていません。
か

こういう光景を見ると、胸がかなり苦しくなるんだ。

それは誰でもそうかもしれないけど、ぼくは何が何でもその顔を変えたくなる。

長時間見ていると、息が辛くなりそうになるから。だから、やめてくれといった。

そんな思いが声音に乗ってしまったのか。

千景「……………」

千景さんはそっぽを向いて黙った。

ぼくは杏さんに近寄る。

手を伸ばし掛けて、少し躊躇う。

失礼かな、と思ったからだ。けれど、こんな風に怯えている人には、小さな子供を相手にするように優しく接するのがいいという考えを押し通す事にした。

手を伸ばし杏さんの頭を撫でる。

ふんわりとした髪の毛の感触が気持ちよかった。

杏「あつ……………」

杏さんが驚いたように顔を上げる。

ぼくはできるだけ優しい表情を心がけ、撫でながら言葉をかけた。

武谷「大丈夫だよ杏さん。戦えないなら、戦わなくてもいい。ノブレスオブリージュなんて考えなくていい。ぼくが戦って何とかするから問題ないよ」

杏「聖陵院さん……」

杏さんは頭を撫でられても嫌な顔をしないでくれた。それどころか次第に幼子のように目を細めていつている。

少しでも安心してくれているのなら、それはぼくにとつて本望だ。

球子「あんず、武谷の言う通りだ。タマたちに任せタマえ」

若葉「聖陵院、また君はそんな安請け合いを……」

武谷「安請け合いいじゃないよ。ぼくは本当に実現するつもりだからね」

若葉「はあ……。むしろそちらの方が性質が悪いような気がするのだが……」

若葉さんは呆れたようにぼくを見る。

と、空気を一新するように友奈が声をあげた。

友奈「みんな、仲良しだね！」

武谷「ああ、仲良しき！」

千景・若葉・杏・球子「……」

若葉「まあ、そうだな」

球子「仲良しだな」

杏「そうですね」

千景「……………」

三人は苦笑し、千景さんは微妙な顔をしていた。

友奈「みんなで仲良く勇者になる！」

友奈の声を合図とするかのように、三人がスマホの勇者変身アプリをタップした。

アプリが起動し、姿を変えていく。

友奈さんの戦装束は、山桜を思わせる桃色――

千景さんの戦装束は、彼岸花ひがんばなを思わせる紅――

タマさんの戦装束は、姫百合を思わせる橙――

すでに変身していた若葉さんの戦装束は、桔梗ききょうを思わせる清楚な青と白の混合が特徴

的だ。

杏さんはやはり変身できていない。

杏「ごめんなさい……」

申し訳なさそうな表情。

球子「気にすんなってのっ！ タマたちだけで全部倒してくるから」

杏さんの肩を、タマさんが元気づけるように叩く。

武谷「任せてよ」

ぼくも安心してほしくて、杏さんの頭に手をポンと乗せた。

ぼくはスマホの画面を確認する。

バーテックスの数は、五十体前後。

すべてこちらへ一直線に向かっていた。

バーテックスが神樹様の元まで辿り着き、神樹様が殺されれば人類は終わる。

けれどバーテックスはそれが本能なのか人間を優先的に狙う。

つまり今は、ぼくたちを殺す為に向かってくる訳だ。

バーテックスの群は、視界の遠くに見える。

どんどん距離を詰めてきている。

武谷「みんな、ぼくの能力は知ってるよね。最初に一発かますから巻き込まれないようにしてて」

それで、終わらせる。

ぼくの使う勇者システムは、みんなのものとは異なっていた。

なにせ変身が出来ない。身体能力も上がらない。

あるのはスマホの中心に描かれた、黄金色の幾何学模様（きかがくもよう）——魔方陣。

バーテックスの軍団を視認。目標を定める。

巨大な白い口に、白い楕円形の袋が付いたような形状の怪物。顎に髭のような数本の糸状の物体がぶら下がっているが、目も鼻も耳もない。

それが、今見えるバーテックスの姿だった。

スマホの画面を見る。

中心には、黄金色の魔方陣。上端には、半分だけ見えている歯車のような魔方陣。下部には、黄色い横長のゲージ。

ぼくは中心の魔方陣を上に向かってスワイプし、指を離す。

すると、上端にある歯車のような魔方陣と噛み合った。二つの魔方陣が綺麗な音を発しながら高速で回りだす。

——白鳥さん……。

姿を見た事すらない女の子を、一瞬思った。

スマホの魔方陣が強い光を放つ。

同時、画面に映っていた黄金色の魔方陣が、目の前に展開された。

数十メートルもある、巨大な魔方陣。

その中心から、いかすち雷纏うおうこんせう黄金槍の突先が姿を見せる。

武谷 『『グングニル』』

超常を発現させる為の言霊。

詠唱完了。

”北欧の勇者システム”の力が、今此処こゝに顕現する。

轟音。

雷の黄金槍——グングニルが発射された。

刹那の間にバーテックス共へと到達。

轟雷。

凄まじい雷が、広範囲に奔った。

バーテックスたちは貫かれ、焼け落ちていく。

グングニルが通り過ぎ、消失した後には、五十体前後も存在したバーテックスは一体も残っていないかった。

まっさらな空が広がっている。

友奈「すごい……」

若葉「凄まじいな……」

球子「ほえ……」

杏「……」

千景「……」

皆ポカンと呆けていた。

けれど、これでみんなに戦わせずに済む。

毎回こうやって一発で決めれば、すぐに終わらせられる。

——そう思っていた。

千景「……あ」

千景「あれは……」

千景さんがなにかに気づき、前方、遠方を指さした。

皆一斉に振り向く。

視界の奥には、バーテックスの姿。

スマホをマップ画面に変えると、そこには三十個前後の光点。

今回の襲撃は五十体前後ではなく、八十体前後だったということ。後群が隠れ控えて

いた。

グングニルは連発できない。スマホの画面を再度北歐勇者アプリに変えると、画面下の黄色いゲージが空になっている。

北歐神の力、これが溜まらないと撃てないのだ。

じわじわとゲージは回復していつてはいるが、すぐに撃つことは不可能。

——旨く、いかない。

奥歯が軋んだ。

若葉「どうやら私たちの出番のようだな」

若葉さんが鞘から刀を少し出して前を見据えた。

ぼくは今、無防備状態。

一発で決めてしまえば、みんなを戦わせることなく終われると思ったのに。

はははは。

デカイ口叩いというて、結局これなんだよ。

武谷「情けない……」

若葉「だが聖陵院のおかげで後は掃討戦のようなものだ。誇っていい」

球子「あんずと武谷はここで待ってる。あとはタマたちに任せタマえ」

友奈「たけくん、大丈夫だよ。楽勝でやっつけてくるから」

千景「……………」

みんなが跳び立っていく。ぼくはみんなみたいな数百メートルをひとつ跳びできるような身体能力はない。訓練はしているが、それをしただけの普通の人間と変わらない身体能力だ。

締まらない。勇者とはいえ、あんな攻撃が撃てるとはいえぼくはまだまだ弱い。

後はみんなが頑張ってくれるのを信じるしかないだろう。

距離が離れていく勇者たちの背中を見つめていたら、すぐ横から声。

杏「私は聖陵院さんを情けないだなんて思いません」

杏さんは微笑み、そして苦笑に変わる。

杏「情けないのは、私の方です」

ぎゅつとクロスボウを握ってうつむきながらそう言った。

先陣を切った若葉さんの生太刀いくたちが一闪、何度も奔はしる、バーテックスが次々と斬り捨てられていった。

それを見て、他の面々も続く。

友奈さんの拳がバーテックスを打ち砕いていく。

タマさんの旋刃盤が飛び回り、バーテックスを斬り刻む。

遠くからだけど、千景さんの様子がおかしく見えた。千景さんは立ち止まって動かないままいる。心配だ。

駆けつけようと踏み出したが、そこに友奈さんが近づいた。何かを話している様子。一緒に跳んで行った。

きっと大丈夫だろう。友奈さんが助けてくれたみたいだから。

千景さんが大鎌、おおはがり大葉刈でバーテックスをかくだん判断する。大丈夫、千景さんもちゃんと戦えているみたいだ。

完全に掃討戦の様相だ。安堵の息をついた。

これなら、誰も傷つくことはないだろう。

——そんなことを思って気を緩めてしまったのが悪かったのか。

事態は起きる。

タマさんが旋刃盤を投げて、引き戻すまでの隙にバーテックスがタマさんに迫った。

あのままでは、彼女は喰い殺されてしまう。

そして。

それと同時に。

ぼくと杏さんの直ぐ近く、斜め前辺り。

その中空に、何かが発生した。

動揺と呆気の狭間で一秒視認、理解する。

黒い幾何学模様——魔方陣が何故か展開されていたんだ。

そこから、赤色と水色が顔を出す。

二体のバーテックス。

先程まで見ていた白い個体とは違う。見た目は同じだが、一体は全身赤色な上に火を纏っている。火の粉が周囲を無数に散る。そしてもう一体は全身水色な上に氷を纏い、周囲が吹雪いている。

恐らくあの黒い魔方陣の効果か、一瞬でここまで移動してきたのだろう。

スマホのゲージはまだ溜まっていない。杏さんは戦えない。

今のぼくたちは、ただの一般人と変わらない。

赤と水色が迫る。

このままでは、殺される。

杏さんが殺されてしまう。

考える前に行動していた。躊躇わずに杏さんの前に飛び出す。

恐怖は感じない。いや、恐怖は感じた。杏さんが殺されてしまうという恐怖だ。

北欧勇者アプリのゲージはじわじわと増えるだけでまだ溜まらない。

何度もスワイプやフリックをしても反応してくれない。

それでも逃げようとは欠片ほども思わなかった。このままでは死ぬというのに。大口を開けて襲い来る二体のバーテックス。ぼくは拳を握り締め、対峙する。

対抗できるわけがないとわかっていても、拳を構えた。戦う。ただそれだけ。

ぼくの放った拳とバーテックスが衝突する前。

幾本もの金色の矢が、バーテックスを串刺しにしていた。

ぼくたちの目の前にいた二体と、タマさんを襲っていた一体を。

球子「あんず……その恰好は」

杏さんは変身していた。白いストッキングを思わせる戦装束を纏い、クロスボウを構えている。

いきなり杏さんに襟首を掴まれた。同時、即座に飛び退く杏さん。

視界が目まぐるしく動いて何が何だかわからなくなるが、とりあえず振り返る。

すると火を纏ったバーテックスと氷を纏ったバーテックスがさつきまでぼくたちがいた地面に衝突していた。木の根が燃やされ、氷結される。

杏「まだです！ 気をつけてください」

赤と水色のバーテックスは、矢をその身に受けたにも関わらずまだ生きていた。

見た目だけではなく、他の白い個体とは違うということか。

再度突撃、向かってくる火と氷のバーテックス。

杏さんも再度クロスボウの矢を射出する。

球子「はあっ！」

タマさんも旋刃盤を投擲、援護してくれた。

矢が何本も突き立ち、旋刃盤が斬り刻む。

それでようやく、二体のバーテックスは消滅した。

杏「変身……できちゃった。戦えました……。タマっち先輩と聖陵院さんが危ないと思っただけ、助けないとっと思っただけ、アプリが起動して……」

球子「ありがとな！ タマが前に立つから、あんずは武谷を護りながら援護してくれ

！」

杏「うん！」

杏「聖陵院さん、私の後ろにいてください」

杏さんの表情は、覚悟を決めていた。

ぼくは頷いて杏さんの後ろに下がる。

武谷「杏さん、君は情けなくなってるよ」

杏「……ありがとうございます」

杏さんはクロスボウを前に構え、撃った。

4話 リーダーと副リーダー

バーテックスが減ってきた。もうすぐ戦いが終わる、そんな時。

バーテックスたちの動きに変化が生じた。

奴らは寄り集まって一体のバーテックスと成っていく。

バーテックスの進化。

授業で聞いた、バーテックスは融合して強力な進化体に成ることがあると。

進化体は、通常のバーテックスよりかなり強力な力を持った化け物だと。

球子「なんだ、あいつ……?」

巨大な棒状の一個体へと完成する。

進化体の棒状バーテックス。

その異様は、見る者を不安にさせる。

されどただの敵だ。斃^{たお}せばいいだけの存在。

杏「まずは私が……!」

杏さんがクロスボウの照準を棒状バーテックスへと向け、発射する。

連射された金色の軌跡が進化体バーテックスへと迫った。

次の瞬間、棒状バーテックスの体から赤く透明な板状組織が発生。

杏「!?」

矢は板状組織に命中、しかしその矢が、火に包まれる。

火に包まれた矢は焼失せず、矢を放った杏さんの元へと正確に跳ね返ってきた。何本もの神の力が宿った火矢が襲い来る。

武谷「——っ」

その矢は高速、避けるのも何も、間に合わない。

杏さんの後ろにいるぼくも、何も反応出来なかった。

球子「危ねえっ！」

タマさんが杏さんの前に降り立ち、旋刃盤を楯状に変形させる。

火矢は楯に正面から衝突した。

球子「やばっ——」

弾き返す事は出来なかった。踏ん張る事すら出来なかった。威力を殺せず叩き飛ばされる。かなりの威力だったのか、勢い強く。

その後ろには杏さん、そしてそのまた後ろにはぼくがいた。

杏「きやあっ！」

衝撃。肺から空気が吐き出される。

三人でもみくちやになりながら吹き飛ばされた。

杏「聖陵院さん!」

視界が滅茶苦茶に流転るてんする中、誰かに抱えられる感触。

飛んだり転がったりし、ようやく止まる。特に痛みはなかった。

顔を上げると、至近距離に杏さんの顔。どうやら彼女がぼくを抱えて護ってくれたみたいだ。

球子「あんず、武谷、無事かー……」

杏「私は大丈夫です、それよりタマっち先輩と聖陵院さんは」

球子「私は無事だ」

武谷「ぼくも怪我ないよ」

タマさんが楯で護ってくれたから三人とも直接攻撃を受けたわけではなく、ぼくは杏さんに庇われたので大した怪我はなく済んだ。身体能力が強化されていないぼくが庇われていなければ、あのまま大怪我を負っていただろう。

あの棒状バーテックスの板状組織、攻撃を反射してきたから反射板だろう物。危険な能力だ。

安易に攻撃しても反射され、それを防御するか躲すか出来なければ終わりだ。

少しでも間違えば死ぬ。細心の注意を払わなければ。

矢は効かなかった。なら投擲武器は使わない方がいいだろう。相性が悪い。斬撃も矢が通らなかつた時点であまり効果的とは思えない。

杏「あ、あの、どいてもらえると嬉しいんですけど……」

ぼくは杏さんに抱えられたまま、地面に叩き付けられるのを庇われていたので、杏さんのの上に乗っている体勢だった。

ぼくが離れないと杏さんが立てない。

もちろん今の身体能力差なら杏さんがぼくをどかすことは容易なのだろうけど、優しい彼女は力に任せて無理にどかすという思考に至っていないのだろう。

武谷「あ、ごめんね」

なので速やかに離れた。

球子「おい武谷、そんなことじゃ郡さんに嫌われちゃうぞ」

ジト目なタマさん。

武谷「なんで？」

杏「あ、あはは……」

球子「はあく……」

苦笑とため息、なぜそんな反応。心当たりが一切ない。

武谷「それより、とにかく今はパーテックスを倒さない」と

球子「まあそうだな」

杏「そうですね」

三人で気を引き締めた。

まだ戦いは終わっていないのだから。

友奈さんが拳一つで敵に突っ込む姿が見えた。

友奈「勇者パーンチっ!!」

進化体バーテックスの反射板に友奈さんの拳が叩きつけられる。

しかし、通常のバーテックスなら一撃で粉碎する拳が、この進化体には一切傷つけられない。

そのうえ、棒状バーテックスの周囲が吹雪ふぶいた。

ただの吹雪ではない、勇者でさえも氷結させる神の吹雪だ。

友奈さんの拳が徐々に白く凍っていく。

焦燥感が積もった、スマホのゲージはまだ溜まらない。遅過ぎる。

——ぼくは、気配を感じた。友奈さんが切り札を使う気配を。

咄嗟に叫んだ。

武谷「待って！ 早まらないでくれ！ 切り札は使うな！」

あれは体に負担を掛けると聞いた。ならばそんなものを使わせるわけにはいかない。友奈さんは一旦敵から距離を取り、言葉を変えてくる。

友奈「だけど、そうしないとあいつを倒せない！」

武谷「できる限り使わないようにって、大社からも言われてるだろ！」

友奈「でも……」

武谷「ぼくの力が溜まるまで持ちこたえてくれ。そちらの方がリスクは少ないはずだ」

友奈さんは少し考えるそぶりを見せた後。

友奈「……わかった！」

力強く受諾してくれた。

千景「私も、加勢するわ……」

若葉「たとえ刃が通らなくとも、複数人がかりなら時間稼ぎぐらい出来るだろう」

球子「それじゃあ雑魚はタマたちに任せタマえ！」

杏「通常のバーテックスなら、私たちの攻撃は通りますからね」

それぞれ行動を開始する。

ぼくはスマホの画面を見た。ゲージは七割くらい溜まっている、あと少しだ。

友奈さんの拳が反射板に衝突、傷は付けられないが、動きは止められる。

若葉さんの刀が奔り、剣線の軌跡が幾重も踊る。

千景さんの大葉刈が振り下ろされ、振り切られ、振り回され刃の猛攻。

旋刃盤が白い通常バーテックスを断裂させていく。クロスボウから放たれた矢が敵を針山にし、貫く。

進化体バーテックスから吹雪が発せられた。友奈さんの拳の凍結をさらに加速させ、若葉さんの生太刀、千景さんの大葉刈、腕や足が氷結されかける。

若葉「くっ！ 一旦下がれ」

三人とも進化体バーテックスから跳び下がって距離を取った。

友奈「これは、あれだね。ヒット&ウエイ？ だっけ？ にした方がいいね」

千景「……高嶋さん、それを言うならヒット&アウェイ」

友奈「あ、そうだったね、あははっ」

若葉「ならば、その戦法で行くぞ」

スマホの画面を確認する。

ゲージは八割溜まった。

遅い。早くしろ。

若葉さんたち三人は、一撃浴びせては即座に退いて、発生した吹雪を避ける。

動きが大きく鈍るほどまだ氷結させられてはいない。

まだ持ってくれている。

白い通常バーテックスは、ほとんど残っていない。

残っている僅かなバーテックスに向けて矢や旋刃盤が迫る。

スマホの画面を見た。ゲージは九割。もうすぐ。もうすぐだ。

焦燥感を抑えながら待つ。

その間も剣撃と拳撃の嵐が舞い、バーテックスを足止めする。

——しゅんごく瞬間。

千景さんと友奈さんが同時に跳び肉薄し、鎌の刃を、手甲の拳を放とうとした瞬間。進化体バーテックスが、神の吹雪を現出させた。

千景「しまっ……」

友奈「あわっ——」

二人は今、攻撃する間際。避けられない。

直撃。

吹雪が千景さんと友奈さんの体を氷結させかける。全身の何割かが凍り付いた。

動けない。白い彫像のなり掛け。

——もう一度、吹雪が発生する気配。

千景さんと友奈さんは今動けない。もう一度喰らったら、二人は完全に氷の彫像と化

すだろう。

まずい。だめだ。そんなことは。

ぼくはゲージが溜まっていないにもかかわらず、走り出そうとした。されど。すぐに足を止めることになる。

若葉さんが千景さんと友奈さんの腕を驚掴み、後方に投げ飛ばしたからだ。

二人はそれで、吹雪の範囲から外れて助かった。

しかし、吹雪が発生するまでに、若葉さんの離脱は間に合わない。

若葉さんは反射板を足場に、強く蹴った。後方に飛び下がる。

それでも吹雪は追うように発生。

このままでは氷結を免れ得ない。

若葉さんは跳び下がったと同時に、刀を鞘に納めていた。

瞬速の居合が放たれる。

若葉さんの生太刀は、迫り来る吹雪を”斬った”。

刹那の間に一闪された居合は、剣風を巻き起こし、吹雪を、全部とは言わずとも何割か^お押し散らせた。結果”斬った”ように見えたのだ。

それでも凄まじい技量だ。

僅かに腕が凍り付いたが、若葉さんは氷結させられることなく、離脱した。

球子「ひゅっつ、すげえ」

流石だ若葉さん。ぼくたちのリーダーは普通じゃない。

ぼくはスマホの画面を確認。

黄色いゲージは右の隅まで完全に溜まっている。

コンプリート、オールグリーンってやつだ。

武谷「もういける。みんな離れてくれ」

そう伝えると、さらに後方に退く若葉さん、千景さん、友奈さん。

後はぼくに任せてくれ。

スマホの中心にある黄金色の魔方陣を、上にスワイプ。

上端にある歯車上の魔方陣と噛み合う。噛み合ったまま回転し、徐々にその速度を上げていく。

高速まで達し、綺麗な回転音を発し出す。

画面から、光が瞬いた。

数十メートルの巨大な魔方陣が、黄金色の輝きを舞わせながら目の前の虚空に出現。

黄金槍の突先が魔方陣の中心からせり出してくる。

準備完了。これで終わりだ。

武谷『『グングニル』』

言霊による詠唱。

北歐神の力の銘めいを呼ぶ特別な言の葉は、現象に影響を及ぼした。

北歐の勇者システム、神の御業の一つ、グングニルが起動する。

魔方阵の中心から、黄金槍が解き放たれた。

飛翔、飛来、刹那の間に進化体バーテックスに到達。

反射板に衝突する。

雷纏う極大破壊力の黄金槍の前では、反射板などただの板切れでしかない。

一瞬にして焼き尽くした。

そのまま槍は突き進み、進化体バーテックスを貫き雷を迸らせ、彼方へと跳んで消え

ていく。

黄金槍の軌跡には何も残らない。

棒状の進化体バーテックスは、跡形も無く消滅していた。

バーテックスを殲滅、防衛に成功した、その日の夜。

ぼくは食堂で若葉さんと隣り合って座り、そばを食べている。

食堂にあるテレビではバーテックスの侵攻、撃退のニュースがやっていた。

テレビからキャスターの声が聞こえる。

勇者たちは素晴らしい。

目覚ましい活躍だと。

——どこがだ。

確かにみんなは頑張ってたし、みんなには何の問題もない。

だがぼくは駄目だ。全然駄目だ。

今回の戦いで解ったことがある。

勝利を勝ち取りはした。誰にも切り札を使わず、ほとんど怪我人もいないと言つていい結果。

氷結させられたりはしていたが、その氷もバーテックスを倒したら消えたし、軽い凍傷程度で済んだ。

けれど、ぼくひとりでは何にも出来ないと思つた。みんながいたから勝つたのだから。

ぼくがもし殊勝な心を持っていたら、これからは戦闘はみんなにも頼ろう、で終わることだっただろう。

でも、救えないのは嫌だ。狂おしいほどに嫌だ。力が足りない。今回は勝つて、何も問題は無いはずなのに、満足できない。狂いそう。もつと、強くない。

こんなんじや宣言したこと何一つ達成できないだろうから。

みんなにいつか普通の女の子としても生活をさせてやるのも、夢のまた夢だ。

あの時はそれぐらいの気持ちでいるってこと、なんて言っただけ、本当は実現させるつもりだった。

無理だ。

狂い死にそうだ。

渴望が膨大に増幅していく。

もつと、もつともつと、強い力が欲しい。

手に入るのなら、どうなつてもいいから。

そう、どうなつても。

——神様……。

報道では、同時に諏訪との通信記録も公表された。諏訪との通信が途絶えてしまった事は報道されなかったが。

武谷「……………」

つゆにわさびを大量に入れたざるそばを啜る。

若葉さんも隣で蕎麦を啜っていた。

心地よい辛さが舌を襲う。

武谷「蕎麦美味しいな……」

視界が滲んだ。

若葉「……やはり蕎麦よりもうどんの方が美味しいと思うぞ。私には……蕎麦は少しだけ塩辛い」

それは、誰に向けての言葉か。

今ここにいない誰かか。今ここにいるぼくか。それともどちらにもか。

武谷「そうかい？」

どちらでもいい。ぼくは返答した。

若葉「ああ……」

武谷「ぼくは好きだよ。美味しい。最高だ」

若葉「そうか……」

二人同時に、蕎麦を啜った。

やっぱり、美味かった。

そう思い、言葉に出すことで白鳥さんの存在を確かに感じたかったんだ。

翌日の昼休み。

食堂でみんな一緒に食事を取っている。

球子「なあ、みんなで話したんだけどさ」

球子「今までは大社に言われたから若葉をリーダーだとしてきたけど、やっぱり若葉がリーダーでいいなって今回の戦いでわかったよ」

若葉「……どうしたんだ、急に？」

球子「いやさ、色々とすごかったしき。性格的に、纏めてくれるっていうの？ そんな感じもあるから。実際若葉がいなければ危なかったところあったし」

若葉「そう、か」

杏「私も、若葉さんがリーダーやるのがいいと思います！」

友奈「うんうん。若葉ちゃんって、いかにもリーダーって雰囲気あるしね」

千景「……反論はないわ。あなたの活躍は確かだったし……高嶋さんも、あなたがリーダーに的確っていうから」

武谷「ぼくは最初から異存ないよ。この中で一番リーダーに向いてると思うし」

若葉「……」

若葉「……ありがとう」

ひなた「良かったですね、若葉ちゃん」

友奈「そういえば、たけくんもリーダーっぽかったよね！ ドガンツ！ ってすこ

い技使っていっぱい倒してたし、強いやつも倒したよね！」

武谷「ぼくはリーダーに向いていない」

若葉「私もそれには同意だ。聖陵院は独断専行のきらいがある。今回の戦闘ではそうでもなかったが……普段がな」

千景「……でも一番活躍してた……やったことでいえば、リーダーっぽいとも言えるかもしれない……」

友奈「引つ張っていけるってところは若葉ちゃんと一緒だよ」

千景「それに、一番年上……」

沈黙。この場に少しの間が過ぎった。

友奈「そういえばそうだったね！」

球子「タマも忘れてたよ」

杏「私もです」

若葉「……失礼だが私もだ」

武谷「ええ……」

忘れられてたんだ。ぼくは十六歳。彼女たちは十四歳だ。今まで対等に接してきたとはいえまさか忘れられていたとは。

ひなた「私はちゃんと覚えてましたよ？」

武谷「ありがとう、ひなたさん、千景さん」

全員に忘れられてたわけじゃなかった。覚えていたのは千景さんとひなたさんだけだ。ひなたさんの微笑みは女神かなんかのよう。巫女だけど。千景さんの無表情も女神のよう。無表情だけど。

球子「なら、どっちもリーダーでいいんじゃないの？」

杏「聖陵院さんは、副リーダーとか」

球子「それだ！」

若葉「まあ、妥当だろう。実際聖陵院の活躍は確かだったしな」

友奈「いいね！ 副リーダー」

千景「……高嶋さんが言うのなら……いいのではないかしら」

なんだかなし崩し的に副リーダーにされてしまった。

球子「ところで……そうと決まれば若葉。一つ言いたかったことがあるんだけどよ」

球子「なーんーで、お前はタマのことを名字で呼ぶんだ？ 友奈とかは『友奈』って

言うのに」

武谷「あ、それぼくも少し気になってた。正直聖陵院って呼びにくくない？」

友奈「私は名前で呼んでって、前に言ってたからね！」

球子「むう〜……だったら私も『球子』とか、もっと親しみを込めて『タマっち』でもいいから」

武谷「ならばくも名前で呼んでほしいな」

杏「実はタマっち先輩、若葉さんに名前で呼ばれないこと、実は気にしてるんですよ」
球子「はあ!?! そそそ、そんなことねーしっ! 別に気にしてないしっ!」

武谷「ぼくは気になってたかな。もっと仲良くなりたいたいし」

杏「あと、私のことも名前で呼んでください」

球子「あんず! お前、都合よくタマの言葉に乗ったな! それとさつきから武谷も便乗しすぎだろ!」

千景「……私も……名前で呼んでいいわ……」

武谷・若葉・球子・杏「「!?!」「」」

あの千景さんが、みんなに心を開いてくれた……?」

千景「何よ……その顔……?」

若葉「いや、少し意外だったと言いますか……」

ムツとしたように千景さんはそっぽを向いた。頬が少し桜色に染まっている。可愛い。
い。

ニヤニヤしてたら千景さんに睨まれた。

千景「他のみんなが名前で呼ばれてるのに……私だけ名字なんて……変だから。あと、敬語使つて話すのもやめてほしいわ……むずがゆい」

若葉「分かった、今後はそうさせてもらう。千景、球子、杏、武谷」

杏「私も、武谷さんって呼ばせてもらいますね」

これでみんなの仲が深まったのだろう。良い方に物事が転がってくれている。

それは歓喜できることで、心は弾んだ。

いつも凝^こつて離れない蝕^くみは、この時ばかりは無視した。

ひなた「それじゃあ、みんなで記念撮影をしましょう！」

ひなたさんは満面の笑顔でスマホを取り出す。

ひなた「今日は四国勇者の再出発記念日、そして若葉ちゃんと武谷さんのリーダー副リーダー着任記念日ということで。……ふふふ、私の若葉ちゃん秘蔵画像コレクションが増えます」

若葉「ひなた！ お前はまだそんな収集などしていたのか！ つか絶対消して——」

若葉さんたちがわいのわいのと騒ぎだした。

ぼくは千景さんに近づ^づく。

武谷「千景さん、となりとなり」

千景「……………」

顔を上げるが、答えあぐねている様子。

友奈「じゃあ私とたけくんの真ん中に！」

千景「……………うん」

友奈さんのフォローがあり、答えてくれた。嫌がつてるわけじゃない、よね？

友奈さんと千景さんを挟んで並ぶと、みんなもすでに集まっていた。

ひなたさんの持つスマホから、パシヤリと、シャッター音が鳴った。

5話 女の子は恋（依存）をすると変わる

千景「聖陵院くん」

丸亀城の廊下を歩いていたら、後ろから声をかけられた。

振り返る。

そこにはもの言いたげな千景さんが立っていた。

武谷「なに千景さん？」

千景「……あれからいつも通りだけど、あれはなんだったの？」

武谷「あれ？」

主語が曖昧でわからない。

千景「あれは……あれよ。私の価値をどうか……」

武谷「ああ、あれね」

ぼくが先日した決意表明のことか。

千景「……実際、どうなの？」

武谷「どうとは？」

千景「あれからもいつもと変わらないけど……本当はどう思ってるの」

武谷「どうもなにも、あの時言った通りだよ」

ぼくの決意は変わらない。

千景「なら、なんで……」

腑に落ちないといった顔。

千景「あなたは、私をどうしたいの……?」

武谷「千景さんをどうしたいか? そりゃ——」

煩惱が頭を駆け巡る。それを驚掴みにして遠くへポイッと投げた。

武谷「ぼくは、千景さんに喜んでほしい、笑っていてほしい。と思ってるよ」

それは正直な気持ち。

——過去の少女、その面影が脳裏を過ぎる。

けれどそれとは関係なく、千景さんに対して、ぼくはそう思っている。

しばらく、千景さんはぼくの顔を見つめていた。

やがて。

千景「……そう」

それだけ言って、背を向け立ち去った。

季節は十月。

特別休暇を利用して、私は地元である高知に向かっていた。

専用武器の大鎌が折りたたまれて入った布袋と共にバスに揺られる。

携帯ゲーム機でFPSをしているが、あまり頭に入ってこず、珍しくゲームオーバーになってしまった。

聖陵院くんは、多分、嘘をついていない顔をしていた。

……やっぱり告白なのかしら。

いつも通りだったのは、返事を待っていているということなのか。

どうして私なのだろう。

私は聖陵院くんになにかをした覚えはない。

好意を持たれる理由がわからない。

だから、疑ってしまう。

どうして私なんか。近くには、高嶋さんとか、女の子が私以外に五人もいるのに。

またゲームオーバーになってしまった。携帯ゲーム機の電源を落とし、鞆に仕舞う。

……少し酔った。

バスの中でゲームするんじゃないかった。

地元に着する。

吐くのは必死に我慢した。いまだに気分が悪い。

実家に帰り着いて、両親と色々話したけど、ほとんど頭を素通りしていった。

酔いが治まらないとかそういうのではなくて、聖陵院くんのせいだ。

なんの話をしたのか忘れたけど、私は自分の足で家の外に出て地元の道を歩いていた。ここに来ると、やっぱり思い出してしまふ。

以前の嫌なこと。一杯一杯。

要約していえば、私の家族は色々あって村八分になり、私はいじめられた。

それはもう、酷いじめだった。

思い出したくもない。

思い出すと、心が痛い。

いつの間にか、かつて通っていた学校の前まで来ていた。

適当に歩いていたので、昔の癖で足が向いてしまったのだろう。

この場所に来てしまったからか、以前言われた嫌な言葉が頭を駆け巡る。

イヤホンをした。ゲームを起動する。こうすれば嫌な言葉は聞こえない。

そんなわけはなかった。思い出したくないと思うほど、その記憶は鮮明な鋭い刃で私を傷つける。痛い。

香川にいた頃は思い出しもしなかったのに、その記憶は今激しく苛む。

千景「なんで……」

目の奥が熱くなる。

——ぼくは、千景さんに喜んでほしい、笑っていてほしい。と思っているよ。

——千景さんがどうあろうと、ぼくはあなたを肯定する。ただそこに存在してくれるだけで、ぼくは価値を認めるよ。ぼくは君に生きていてほしい。何もなくても、何をしても、千景さんはぼくにとって価値のある存在だ。

——何かあった時は、いつでもぼくを頼ってくれ。ぼくは千景さんの絶対的な味方だ。

嫌なことを思い出す中、聖陵院くんの言葉をふと思い出す。

恐らくは、告白の文句。

その言葉は、さつきまでの嫌な記憶を光となって祓った。

千景「……………」

帰ろう……。

高嶋さんに……聖陵院くん、会いたい……。

「あなた……郡さん？」

後ろから声をかけられ、振り返ると、そこにはかつての担任教師がいた。

「どうしてこんな所にいるの？ みんなもう、あなたの家に行っているわよ」

千景「……？ 私の家……？」

「そうよ。あなたが地元へ帰ってきたこと、みんなに伝わってるから」

わけがわからないまま、担任に連れられて行くと、実家の前に着いた。

そこには人だかりができている。

私が近づくと、取り囲まれた。

興奮と尊敬の眼差し。浴びせられる賛美の言葉。

けれどそれらは、聖陵院くんの言葉ほど私の心を動かさなかった。

布袋に入れたままの大鎌の柄で、地面を叩いた。

響いた音は、一瞬でわたしを取り囲んだ人たちを黙らせた。

千景「……皆さんに……訊きたいことがあります……」

千景「私は、価値ある存在ですか……？」

まるで聖陵院くんの言葉を確かめるように、訊いてしまった。

聖陵院くんは、ここにいないのに。

「もちろんよ。だつてあなたは勇者だもの」

同じような言葉が、すぐに他の人々からも投げかけられた。誰もが勇者である私を称賛している。

——千景さんがどうあろうと、ぼくはあなたを肯定する。ただそこに存在してくれるだけで、ぼくは価値を認めるよ。ぼくは君に生きていてほしい。何もしなくても、何をしても、千景さんはぼくにとつて価値のある存在だ。

また、聖陵院くんの言葉が脳裏に浮かんだ。

他の人たちは、私が勇者だからこそ価値があると言う。

けれど、聖陵院くんはどんな私でも価値があると言う。

私は、なにもした覚えはないにもかかわらず。

どうして、あんなことをいったのだろう。

告白。好き、だから？

そうなると、初めの思考に戻ってしまう。

どうして私なのだろう。

好きになった理由がわからない。

だつたらあれは、告白じゃない？

いや、でも、告白以外であんな言葉を口にするだろうか。
……しない、と思う。

だったら告白。だったらなんで好意？

どうして——あんなことを言ってくれるのだろう。

結局私は一泊もせず、香川に戻った。

そして間もなく、バーテックスの二度目の侵攻が起こる。

壁を越え、押し寄せてくる人類の天敵。

六人全員揃って、バーテックスと対峙した。

一度目の侵攻よりも、入ってきたバーテックスの数は遥かに多い。

私が一番多く倒して、勇者として活躍する……。

そうすれば、私は勇者だからこそ価値があるから、”みんな”は好きになってくれる。
跳躍し、バーテックスの一群へと切り込んでいく。

何度も大鎌を振るい、バーテックスを両断し消滅させる。

けれど、聖陵院くんは違うみたい。

勇者でない私に価値はないのに……ここにただで価値を認めるなんて言う。

本当に……おかしな人……。

五人で次々と敵を撃破していく。聖陵院くんは後方で伊予島さんに護られながら待機している。

前回のこともあり、能力を使うタイミングを計ると言っていた。

バーテックスが大口を開け迫る。大鎌を振った。すると簡単に敵は割断され消滅する。バーテックスの数を順調に減らしていった。

突如、バーテックスたちの数体が融合を始めた。

進化体を生み出そうとしているのだ。

……あいつを私が殺せば、もっと認められる、愛されるのだろうか。

でも、聖陵院くんは私たちに切り札を使って欲しくないみたい。高嶋さんが使おうとした時、必死に止めていたし。

……今は、切り札を使うほどピンチになっっている訳じゃない。

体に負担を掛ける切り札をわざわざ使う必要もない。

融合して新たな形態となったバーテックスは、元の姿の口部分だけを残して巨大化したような形をしていた。

球子「デカくなっただけ……か？」

杏「どうなんだろ……？」

武谷「——いや、これは、やばい、かも……？」

次の瞬間、進化体の巨大な口から、無数の矢が射出された。その全ての矢が、火や氷を纏っている。流星のように、聖陵院くんたちに降り注いだ。

球子「うわあああああああああ！」

慌てて土居さんが旋刃盤を楯形状にして、自分と伊予島さんと聖陵院くんを護る。

けれど、普通ではない火と氷を纏った大量の矢に押され、吹き飛ばされそうだ。

千景「聖陵院くん……っ！」

早くあいつを何とかしないと、三人が——聖陵院くんが危ない。

大鎌を構え、進化体に向けて跳躍した、数百メートルをひとつ跳びにしながら接近していく。

前触れなく、進化体が矢を射出する方向を変えた。

私の方へ。

私は楯を持っていない。大鎌を少しは楯代わりにはできるけど、この無数の矢を防ぎ切れるほどではない。そして今からこの数を避けることはできない。

やっぱり、切り札を使ってた方が良か——

目前に迫る矢の波。視界が死色に埋め尽くされる。

轟音。

轟雷。

目の前の矢軍は、後方遠くから飛来した雷を纏う黄金槍によって消滅した。

槍から撒き散らされる雷は、私を擦れ擦れで避けていく。

黄金槍はそのまま突き進み、矢を口から放ち続ける進化体バーテックスに命中、槍で貫き雷で焼き尽くしながら、勢い止まらず彼方まで消えていく。

進化体バーテックスは倒された。

あれは聖陵院くんの力、聖陵院くんが助けてくれたんだ。

後ろを振り返ると、必死な形相でスマホを握り締めている聖陵院くんが遠くに見える。
た。

二度目の侵攻は、終わっていく。

結局、一番多く敵を倒したのは乃木さんで、一番強い敵——進化体バーテックスを倒したのは聖陵院くんだった。

私が一番多く倒して、勇者として活躍したいとは思っていた、と思う。多分。

だから、悔しいような気もする。けど、わからない。この結果にいやな気持ちが湧かないから。

………
聖陵院くん……。

main viewer

二度目の侵攻を乗り切った次の日。

ぼくは自室で頭を抱えていた。

今回の戦いも、ぼくの行動があまりにもお粗末過ぎる。

タイミングが遅かった。進化体が完成した直後に撃つべきだった。

迷うべきではなかったんだ。特別個体が二体以上来る可能性を考えて、彼女たちが対処できるようなら温存しておこうなんて考えを持ったのがいけなかった。

様子見なんて下策だ。その結果、タマさんを、杏さんを、特に千景さんを危険な目に遭わせた。少しでも遅ければ、あの時千景さんは矢に貫かれていただろう。

——過去の記憶が浸食してくる。あの時のことがフラッシュバックする。

頭を掻き毟る。唇を噛み切った。血が滲む。ここ最近、治っては唇が噛み切れてい

判断が遅すぎた。ぼくは阿呆だ。昔の、あの時だって判断が遅かったからあんなことになったんだ。良い選択肢を、即断即決で選び取らなければ。

常に良い選択肢を選び取れるわけではなかったとしても、間違えてからでは遅いんだ。

次は間違わない間違えたくない間違わせないでくれ。

間違えても、今回みたいになんとかなってくれ。

次は、次こそは、うまくやる。

……考えは一段落ついた。

それじゃあ、今日はなにをしよう。

鍛錬をして、少しでも強くなっておこうか。

けれど、正直言つてぼくの力は鍛錬の意味が大してない。ぼくの身体能力に依存しないのだから当然だ。

その事実を受け入れるまでは、必死に鍛錬した時期もあつたけれど、それはもう過去の話だ。

今も全くしていない訳ではないけれど、必死というほどではない。

だから、今特にやることはない。精々頭を捻つて次はどうすればいいか考えておくぐらいだ。それも今考えた、これ以上考え過ぎてもどうすればいいか訳が分からなくなる

だけだろう。頭を休めた方がいい。

……本当になにをしようか。まるで久しぶりに休暇を取れた社畜のように、やること
が思いつかない。

とりあえず落ち着くためにあの子のピアノ曲を聴こう。ヘッドホンを装着した。
ミュージックプレイヤーを再生すると、綺麗な音色が耳し朶だを打つ。心が凜しんいでいく。

ピアノ曲を聴きながら、しばらくぼーっとした。

……………。

そういえば、最近千景さんと遊んでいないな。

やることあった。

遊ぼう。

思い立ったが吉日、ぼくは部屋を出た。

勇者たちが住む寮の一番隅にぼくの部屋はある、当然だが女の子たちの部屋とはだ
いぶ離れていた。

上の方の階にある千景さんの部屋を訪ねたけど、誰もいなかった。

なのであちこち千景さんがいそうな場所を歩き回って探す。

そして、そこまで時間も労力も要することなく、ぼくたちの教室で見つける。

千景さんは窓際の席で、一人ゲームをしていた。
丁度いい。

武谷「千景さんこんにちは」

千景「……こんにちは。休みの日なのに、こんなところになんの用？」

武谷「千景さんを探してたんだよ」

千景「私を……？」

武谷「そう、一緒にゲームしない？」

千景「……聖陵院くん、ゲームやってたの？」

以前千景さんに影響されて買っておいしたが、千景さんが上手すぎて気後れしてしまつたため、一緒にやったことはない。

密かに一人でポチポチやってはいたから、少しは上達したと思いたいが。

ぼくは携帯ゲーム機を取り出す。

武谷「一緒に遊んでくれる？」

千景「……ええ。いいわ。一緒にやりましょう」

千景さんは思いのほかすぐに乗ってくれた。

今までならもう少し粘らないと了承してくれなかつたはずだが。

少し意外だ。

武谷「きょうもFPSやってたんだ？」

千景「結構好きなゲームジャンルだから……」

武谷「同じゲーム持ってきたから対戦しよう」

今日千景さんがやっていていたゲームは、人間の兵同士が銃で撃ち合う対戦型FPSだった。前に怪物を撃ち殺していくゲームをしていたのを見たことがあるので、また別のFPSみたいだ。

当然ぼくはどんなゲームでもカバーできるように千景さんがやっているのを見たことがあるゲームは片っ端から持ってきていた。

金はあるんだ。命がけで戦うということで大社から結構貰っている。

まずはネット対戦の同じチームでやってみた。八対八のキル数を競うルールだ。

終わった。圧勝だった。ぼくはほとんど何もしていない。一キル二デスだ。

次は千景さんと敵対するチームでやってみた。

終わった。ボロ負けだった。ぼくはほとんど何もできなかった。二キル十デスだ。

次は千景さんと1on1^対でやってみることにした。

フィールドを走っていたら、角から出てきた千景さんが操作するキャラとばったり出会った。

銃を構えた時には、もう撃ち抜かれていた。ヘッドショットだ。

武谷「……………」

なんか、チーム戦だとそれほどでもなかったのに。かなり、悔しかった。

武谷「……………もう一回やろう」

千景「ええ」

今度は遠くから視認された瞬間スナイパーライフルで撃ち抜かれた。ぼくはただ移動してただけだ。

武谷「……………」

勝てねえ。無理げーだ。相手が悪すぎる。

勝ちたい。

武谷「もう一回」

千景「ええ」

蜂の巣にされた。

武谷「うがー！！ 勝ちたい！ もう一度」

千景「ええ」

ぼくは躍起になった。

しかし何度も撃ち殺される。時にはナイフキルもされた。

一度も勝つことはできなかった。

千景「……私が、教えてあげましょうか」

武谷「いいの？」

勝ちたい相手に教わるというのはなんだか違うような気がしなくはないけれど、これ以上ないくらいの先生と言えるだろう。

実際滅茶苦茶上手い。

プロゲーマーレベルだ。

ネットにプレイ動画をあげたら、かなりの再生数が稼げるのではないかと思う。可愛い女子中学生なので実況動画だとさらに稼げそうだ。

動画を撮ってネットの動画サイトにアップしてみたらどうか、と提案してみようかと考えた。

が、すぐに考え直す。

千景さんの性格的に、コメント一つ一つに一喜一憂して、批判誹謗中傷なんてされようものなら、すぐにネット世界から失踪してしまうだろう。

無駄に傷つけるだけだな。この案はなしだ。

武谷「じゃあ、教えてもらおうかな」

千景「……任せなさい。まず、ここはね——」

ぼくのゲーム画面を見ながら、千景さんが色々教えてくれる。時には画面を指さす。

つまりかなり近い。肩が触れ合う距離だ。

千景「こうなった場合。こう対処するのがいいわ」

肩が触れ合うどころか、ぼくがゲームを操作する手の上に直接自分の手を重ねて操作をし、教えてくれる。

まるでゴルフを若いお姉さんに教えるエロおやじ、違う、スポーツのインストラクターだ。

千景「すぐに身につくものではないかもしれないけど……反射的にできるようになれば今より格段に強くなれると思うわ」

反復練習もした。ここまで来たらなんとか勝ちたいので、躍起になる。

集中して、画面を凝視して、長時間FPSをプレイした。

結果。

酔った。

それはもう、これ以上ないくらいのFPS酔いだった。

気持ち悪い。

武谷「ごめん、千景さん。今日はもう無理だ。ここで無理を通したら確実に吐く」

千景「しようがないわね……」

千景さんは苦笑した。

苦笑でも、笑った顔を見たのは初めてな気がする。

友奈さんには結構微笑みを見せているような気もするけれど。

ぼく相手では、初めてな気がした。

千景「聖陵院くん……こっちききて……」

言葉の意図は良く分からなかったが、とりあえず言われた通りにした。

千景「……ここ、座って」

千景さんが座っている椅子から三十センチも離れていない隣に用意された椅子に座ることを言い渡される。

これも言われた通りにした。

千景「それで、ここに……」

身体を支えられながら動かされるままにした。

そうしたら、なぜか膝枕をされていた。

柔らかいな。なんかいい匂いもするし。

千景「……このまま、酔いがさめるまで寝てていいから……」

千景さんが、笑っていた。

ちゃんとした笑顔だった。

こんなに近くで……初めて見る。

やっぱり、今日の千景さんはいつもと違う。

何でか知らないけど、違っている。それも、悪くない方向に。

何かが、変わったのだ。

酔いで気分は最悪だ。けど。なんか。ふと。

安心してしまった。

6話 北歐の巨人 ヨトウン・バーテックス

彼女のピアノ演奏が終わる。

余韻の広がる空間に浸ったあと、ぼくは口を開いた。

武谷「やつぱり、いい曲だよ」

「……ありがとう」

「本当にいつも来るのね……」

武谷「うん、聴き惚れてしまったからね」

「私、そんなに上手くないのに、気に入ったのって嘘じゃないの……?」

武谷「嘘じゃないよ。でなきやわざわぎ聴きに來ない」

それだけが理由ではないけれど。

「そう……?」

首傾げてまだ懷疑的な彼女。

でも彼女は、来るなどは一度も言わなかった。

千景さんとゲームをして膝枕をされた日から、数日が経ったある日。

三度目のバーテックスの侵攻が起きた。

ぼく以外の五人は勇者装束に変身し、樹海に立つ。

視界の遠くには、バーテックスの群れが見えた。

スマホの地図で確認すると、百体ぐらいの光点。白い雑魚バーテックスの数だ。

その中から、突出した光点があった。

凄まじい速さで地を駆けてくる。

人間の胴から下だけを残したような姿。

火と氷を宿し撒き散らしながら爆走している。

かと思いきや変則的な軌道で樹海の根を飛び越え避けて速度を落とさない。

進化体だ。

ぼくは即座にスマホの画面中央にある黄金色の魔方陣の上にスワイプした。

進化体を見たらすぐに殺せ。前回の戦いで学んだことだ。

友奈「へ……変態さん!?!」

若葉「迷惑なものを撒き散らしながら走る、まるで暴走族のようだ」

杏「それよりどうします?」

千景「倒すだけよ」

球子「それじゃあタマに任せタマえ！」

魔方陣と歯車の魔方陣が噛み合い、回転、綺麗な音色が出る高速回転、画面から光を放つ。

巨大な魔方陣がぼくの前に出現。黄金槍の突先が中央から顔を出す。

武谷「『グングニル』」

言霊。現象顕現^{けんげん}。

轟音。

轟雷。

雷宿す黄金槍が解き放たれ、破壊を為す。

高速で避けようとした進化体をもともせず、黄金槍から雷が広範囲に放たれ、直撃。焼失。

槍は止まらず、雷も幾度放出。有象無象のパーテックスも多く斃していった。

黄金槍が消失した時には、残留パーテックスは数体程度。

若葉「仕事が早いな。できれば一言欲しかったが」

球子「タマの気合を返してほしいが、倒せたならいい。ナイス武谷」

杏「これでは、あれらを倒すだけですな」

友奈「相変わらずすごいねー！」

それは、一言でいえば巨人だった。

数十メートルはある白い巨人型バーテックスが、視界の奥から現れた。歩いてこちらへとやって来る。

融合して進化体になる様子は見ていない。あんな巨大な存在が出来上がる過程、視界内で起こっていたら流石に気づく。だけどそれは先に倒した速い下半身だけのバーテックスも同じ。すでに進化体になってから来たのか。元からその姿なのか。

視覚的にも感覚的にも、特別で強力な個体だと理解する。

——ぼくは、間違えていなかったはずだ。

ぼくは危険な進化体を、前回の教訓から即座にグングニルを放って殺したんだ。

けれど、その即断が今の状況を招いた。

特別個体が二体以上来る可能性。それは前回考えたこと。だからこそあの時は様子見をして、みんなで対処できるならしてもらおうと、力を温存した。その結果危険な目に遭わせてしまった。

それを避けるためにすぐに倒したのに、今回は、二体目の特別個体が現れた。

前回の戦いから学んだことを実行したのに、前回考えた懸念がここで現実になる。

酷い皮肉だ。

グングニルは撃ったばかり、再度撃つには時間がかかる。スマホの画面を見るとゲー

ジはまだ三分の一も溜まっていない。

ままならない。旨くない。

判断は間違えていなかったはずなんだ。何故こんなことになっている。

あの場面で倒してなかったら、誰かが傷ついていた可能性があった。だから倒したというのに。

どうしようもないではないか。

結局どう行動しようとも窮地に立たされる。

間違えていなくとも、少しでも巡り合わせが悪ければ現実はいつだって冷酷に人を追い詰めるにやるんだ。

唇の裏側が噛み切れた。手に爪が食い込んで血が滲む。スマホが軋んだ。

ぼくは平静を装った。

みんなの前では、いつもの自分でいたい。

友奈「たけくん、そんな顔しないで。みんなで力を合わせれば、倒せないわけがないんだから！」

ぼくは完璧に平静を装っていたはずなのだが、どう見えていたのだろう。

千景「聖陵院くん、私たちに任せて……私たちはそんなに弱くない」

若葉「そうだな。私たちが倒してしまおう」

球子「勇者は武谷だけじゃないぞ。タマたちだつて勇者なんだからな！」

杏「武谷さん、私たちは大丈夫ですよ。いざとなつたら武谷さんの力が溜まるのを待つて時間稼ぎをすればいいと思えば、簡単です」

……………。

その五人の表情は、正しく勇者で。

輝いていた。

武谷「みんな……」

ぼくは今、信じて待つしかない。

武谷「……頑張つて」

若葉「ああ！」球子「おう！」友奈「うん！」杏「はい！」

千景さんは、力強く頷いた。

杏さん以外の皆が一斉に飛び立っていく。

死闘が、始まる。

後衛の杏さんはぼくの傍そばにクロスボウを構えて立った。

跳びながら接近する四人の勇者。

先手は、巨人が取った。

巨腕、その先の拳が放たれ襲い来る。

空気を押ししながら落ちてくるその様は正に隕石の如く。

杏「タマつち先輩っ！」

四人は散開して何とか避けた。

地に拳が突き刺さる。

爆散。

莫大なる破壊音と共に多くの土埃が舞い上がり、地鳴りが轟く。

着弾の中心点から衝撃が吹き荒んだ。

巨大な拳は、地面をクレーター上に陥没させた。

球子「ひやああ……あれは楯で受けない方がよさそうだな……」

一撃で地を吹き飛ばすほどの、圧倒的な脅力。

一度でも直撃すれば、死は免れないだろう。

ぼくの頬に汗が伝った。見ているだけというのは、心を削る。

そして思い出す。樹海化の防御は絶対ではないということ。樹海の一部がバーテックスの攻撃で損傷したりすると、その傷は現実世界に自然災害や原因不明の事故という形でフィードバックされる。さらに、樹海化もやはり長時間続ければ神樹の力を消費してしまう。神樹の力が枯渇すれば資源は無くなり人々は生活できなくなる。

若葉「くっ……!」

クレーターを見て若葉さんの顔が歪む。

今の一撃は確実にフィードバックされるレベルの損傷だろう。それにあの巨体を倒すのに長時間はかけられない。

焦りが増した。

巨人の攻撃後の隙に真つ先に肉薄した若葉さん。

若葉「はあっ!」

鞘に納めた刀を鞘走らせ居合一刀。巨人の足に切りつける。

しかし、足が切断されて倒れるような様子はない。大したダメージを与えられたようには見えなかった。

即座に巨人の、反撃の蹴り上げ。すぐ近くにいる若葉さんに迫る。

若葉さんは刀を巧みに使い、全力で蹴撃しゅうげきを斬り逸らす。

が、巨人の力が強過ぎるからか弾き飛ばされた。

巨人に追撃をさせないように、杏さんとタマさんが遠距離攻撃。クロスボウを射出し、旋刃盤を投擲する。

足や腹に直撃するが、これも大した傷を負わせられない。

だが、敵の意識は杏さんとタマさんに向いた。

その隙に千景さんと友奈さんが巨人の足へ肉薄。

斬、と大鎌を振るい、打、と拳を突き出す。けれどこれも大して効かなかつた。

下段蹴りの反撃が来る。

二人は擦れ擦れ危なげに反撃を回避。

武谷「見た目通りの強さか……見掛け倒しだったら良かったんだけど」

あの巨人は、姿通りの凄まじい膂力と、さらに高い防御力を持っている。

やはり、一筋縄ではいってくれない。

今まで距離を取って浮遊していた、僅かに残った通常の雑魚バーテックスが、動いた。

状況が変転する。

雑魚バーテックスが四人に向けて突っ込んで来た。

当然皆は対処する。刀が、大鎌が、拳が、旋刃盤が揮われる。

僅かに残っていた雑魚バーテックスはそれで全滅した。

されど。

対処した隙に、巨人が超膂力の拳を大振りに振り払う。

広範囲に薙がれた山をも砕く巨腕。

それを避ける為には大きく離れる必要がある。

四人は強く一斉に跳んで、巨人から距離を取った。

間一髪、四人の前を拳が通り過ぎていく。

避けることができた。

ぼくは、安堵した。

束の間の。

寸刻後——巨人が走った。

大きく離れた勇者四人を無視して、こちらへ向けて真っ直ぐに。

地鳴りを生み出す足音を響かせながら、巨体が走り迫って来る。

大して速い動きではないが、巨体の歩幅がその欠点を打ち消していた。

数十メートルはある巨人が迫ってくる圧迫感は途轍もない。

球子「あんずー！ たけやー！ 逃げろー！ー！！」

千景「聖陵院くんっ！！」

後衛であるぼくと杏さんを先に殺そうということか。

意思のないように見えるバーテックスも、学習するのだ。

むしろ、何度も北欧勇者の力で多くのバーテックスを屠ってきたぼくを警戒しないわけがない。

再度グングニルを撃つまでの時間を稼がせないように、真っ先に殺したいのだろう。

そしてぼくの身体能力は、鍛錬をした一般人程度でしかない。

このままでは、殺される。

このままでは、杏さんが危ない。

先の様子から、クロスボウでは足止めにはならないだろう。

そして他の四人は今の距離ではすぐには間に合わない。

——まずい。

杏さんが死んでしまう。

ぼくはそのことだけに、心底恐怖した。

武谷「杏さん、逃げてく——」
れ。

杏さんが突然ぼくを抱えた。

体が揺れる。杏さんが跳んで、巨人から距離を離していく。

杏「変なこと、言おうとしないでください」

声が、震えていた。

体も、震えていた。

密着しているから、ダイレクトに伝わってくる。

杏さんは恐怖を押し殺して、ぼくを護ろうとしてくれているのだ。

ぼくは、されるがままにするしかなかった。

何度も何度も跳んで、巨人から遠ざかろうとする。

しかし巨人は追い縋って来る。

巨大な腕が、ぼくらに向かって振るわれた。

杏「ひ……っ」

杏さんの喉から悲鳴が漏れた。

腕は間近を通り過ぎ、風圧が吹き付ける。

杏さんが片手でぼくを抱えながら、右手でクロスボウの矢を放つ。

巨人の脛すねに命中するが、それだけだ。巨人の動きは僅かも鈍らない。

再度振るわれる巨腕。

杏さんは後ろに跳んで間一髪避ける。

幾度も振り薙かれる巨腕。

跳躍、飛び退き、跳ね上がり、紙一重で死線を回避していく。

杏さんは必死だ。持てる力を遮二無二、我武者羅、無我夢中に出して全力でこの状況

下を足掻いてくれている。

けれどぼくを抱えていることで、動きが普段より鈍い。

何度も捉えられそうになる。

その一撃一撃が、即死級の剛撃。

少し離れた位置で杏さんも転がって倒れた。ぼくよりも怪我が深そうだ。またぼくは庇われたのか。

武谷「杏、さん……」

死なせたくない。

スマホの画面を見た。ゲージはまだ溜まっていない。

——巨人の拳が迫る。

球子「あんず—————!!!」

千景「聖陵院くんつつ!!!」

二人の叫び声が聞こえると共に、切り札が使用される感覚を捉えた。

——切り札。

それは、強力なパーテックスと戦うために編み出された勇者の力。

勇者の存在は神樹に繋がっている。

神樹には地上のあらゆるものが概念的記録として蓄積されている。その記録にアクセスし、抽出し、精霊を自らの体に顕現させる。

それが、まだ一度も使われたことのない、体に負担を掛けると予測されている、代償を伴う強力な切り札だ。

千景さんとタマさんは、自分の内側へ意識を集中させて、概念的記録にアクセスした

んだ。

それぞれの切り札が、顕現する。

杏さんに迫る、山をも砕く巨大な拳。

タマさんは杏さんの方に跳びながら姿を変化させる。元の装束を残したまま、首周りに大きく輪つかのようなものが浮き、橙色の線が入った白いローブを羽織っている。

タマさんは旋刃盤を自分の身長は何倍にも巨大化させた。

それをタマさんは、空中で身体を回転させながら投擲する。

旋刃盤に繋がっていたワイヤーは外れ、旋刃盤はそのまま飛翔して行く。今までと違い、それで自由に操作できる。

旋刃盤の外縁部の刃が高速回転。さらに刃は炎に包まれていた。

——精霊、輪わにゅうどう入道の力。

高速回転しながら炎宿す旋刃盤は、振り下ろされてくる巨腕の横から激突した。

機動が逸らされる。

そのうえ、今まで一切傷つかなかった巨人が、ダメージを負った。

腕に切り傷が付き、炎が傷口を焼く。

逸らされた拳はタマさんと杏さんから離れた場所に着弾した。それと同時にタマさんも杏さんの前に着地する。

その様子には、危なげさがない。

しかし、ぼくに向けても片方の拳が落ちてきている。

杏さんに向けた拳がタマさんに逸らされようとも、ぼくへの攻撃の軌道を巨人は外さず保っていた。

ぼくの体が搔つ攫われる。

今度は、千景さんに抱えられていた。

と思つたら、放り投げられた。

後ろを振り返る。千景さんはぼくを放り投げた体制。

目の前で、千景さんが巨大な拳に潰された。

理解がショートする。

視界が弾ける。脳が頭が思考が電気を狂わせて。

過去の記憶。巡る巡る鮮明に感じる。フラッシュバック。

慟哭どうくしかけた。

されどその一瞬前に、誰かに空中で抱えられる感覚。

ついこの間に、膝枕などされて触れたことのある感触、匂い。

武谷「千景、さん……?」

振り仰ぐと、千景さんの顔。

武谷「あれ……いま……？」

完全に、潰されたような。

千景「七人岬……私の切り札の能力は、七人同時に存在する私が同時に殺されない限り死なない」

武谷「そう、か……」

聞くだけで、かなり強力な力だと解る。目の前で見もしたけれど。

千景さんの装束も切り札の影響で変化していた。元の装束の上に、深紅の線が入った白い頭巾と羽織を纏っている。

千景さんは生きている。良かった。心胆が落ち着いていく。無理矢理にでも、落ち着かせる。

でも、千景さんとタマさんに切り札を使わせてしまった。あんなの切り札でも使わなければどうにもならないと、戦いが始まる前からそんな気はしていたが、やはりできれば使わずに終わってほしかった。

思わず入ってしまう奥歯と手への力を抑える。

周りを見るとぼくが助けられている間にタマさんと杏さんは巨人から離れていた。

千景さん六人とタマさんが巨人へと攻撃を仕掛けた。

六線の三日月形斬撃と炎に包まれた回転斬が巨人の足に命中。

巨人の身に、切り傷が、焼け跡がつく。無視できない損傷だ。

敵の意識は六人の千景さんとタマさんに大きく向いた。

その間にぼくを抱えた千景さんが距離を取っていく。

巨人が地団太を踏んだ。

だが子供の怒りとは訳が違う。

地面が激しく揺れる。足裏で踏み抜かれた場所は陥没する。巨人の近くにいた千景さんは踏み潰されないように、地揺れの合間に跳んで後退していく。

巨人が巨腕を地面擦れ擦れで薙ぎ払った。

後退途中の千景さん六人中四人が吹き飛んで絶命した。だが即座に新たな四人は出現する。同時に殺されない限り敵の攻撃は意味を成さない。

巨人は続けて左拳を振り下ろした。

若葉「これ以上樹海を傷つけられて堪るか！」

若葉さんが切り札を使った。

——精霊、源義経みなものよしのね。空中における桁外れの機動力を得る八艘飛はつそうび。

若葉さんの装束が変化、白い羽織と青いマフラーが纏われる。

刹那の間に地面を蹴り、根を蹴り、八艘飛びを繰り返す、若葉さんの速度がどこまでも上がっていく。常人では目で追うことすら不可能な領域へと。

巨人の横から物凄い勢いで飛んできた若葉さんが、速度の威力を全て乗せ腕を斬りつけた。

巨人の腕に切り傷が出来、宙に弾かれ地には到達しない。

友奈「よし、私も！ みんなで一氣にいこう！」

続いて友奈さんも切り札を使う。

暴風を具像化した精霊、一目連いちもくれん。

拳に竜巻の勢いと力を宿す。

装束の変化は、左眼辺りに浮かぶ桜の花弁と風の渦を合わせたような見た目の覆い、そして両腕に纏われる渦を巻く長い布状のもの。

巨人に肉薄した友奈さんの振りかぶった拳が、巨人の足に突き刺さる。

何度も、幾度も、幾重にも。

友奈「うおおおおおおおおっ！」

拳が激突する音が響き続ける。

友奈「千回いいイ……連続勇者パーーーーーンチッ!!」

最後に強く激突した拳が、渦を巻く衝撃を突き抜けさせる。

巨人のふくらはぎ辺りの位置に穴が開き、ゆっくりと、だが確実に巨人は転倒した。地響きが伝わる。

若葉「皆、行くぞ！」

若葉さんの号令と共に、勇者たちは一気に攻勢に出た。

巨人はまだ腕や足を振り回して抗うが、若葉さんが空中機動と速さで翻弄する。

その間に六人の千景さんの斬撃、タマさんの炎宿す旋刃盤の連続斬、友奈さんの竜巻宿す拳が命中。巨人の体を破壊していく。

振り回される巨腕を避けながら、擦れ違いざまに若葉さんも刀を一閃、それを何度も。

巨人の体はいつしか、崩れた。

——勝った。

と思った時、巨人の首が取れた。

誰かが攻撃したわけではなかった。

放り出された首は、地面に落下する軌道を突然変える。

ぼくと千景さんがいるこちらへ、勢いよく飛来してきた。

喰い殺さんと大口を開け、高速で迫る巨人の頭部。

不意を突かれた今では、若葉さんの速さでさえ追いつけないだろう。

スマホの画面を見る。ゲージは、あと少しで完全に溜まるところだった。

しかし、今は使えない。

千景さんはここにいるひとりが殺されたところで死にはしない、ぼくが死ぬだけだ。

……ぼくは、死ぬのか？

死への恐怖はなかった。けど、この先みんながどうなるかの恐怖はあった。
と。

ぼくの体が地面に降ろされる。

千景さんが、前に走っていく。そして跳んだ。

巨人の頭部とすれ違う。その刹那、大鎌が三日月形に大きく、強く振り切られた。
巨人の頭部は割断され、消滅。

今回攻めてきた敵は、それで全滅した。

地面に着地し、振り返った千景さんが大鎌を振り払う。

千景「聖陵院くんは、殺させない……」

7話 で、デート

音楽室は独占できるものではない、入り浸ることはできなかつた。

だからその日は解放されている屋上で共に昼食を取っていた。

ぼくは購買で買ったパンを食^はんでいた。

それにしても、彼女のお弁当、うまそうだな。

そんなことを考えながら思わず見ていたら、彼女はこちらに顔を向ける。

「食べる……？」

と訊かれてしまった。

そんなに物欲しそうだったろうか。

武谷「食べる」

彼女の弁当箱を見る。

武谷「どれ食べていい？」

「なんでも、ひとつなら……」

ぼくは一番うまそうだと思つた卵焼きを掴み食べた。

武谷「おいしい」

「そう……」

そっけなくそれだけ答えて食事に戻る彼女。

でも、不機嫌そうではない。

ぼくと食事をすることも受け入れてくれている。

そんな静かな、穏やかな時間。

ただひとつの結論から言おう。彼女たち、ぼく以外の勇者五人は、ぼくが思っているよりも強い。

特に切り札が強力だ。あの絶望的にさえ見えた巨人に易々とダメージを与え、難なく倒してしまったのだから。

そう、彼女たちは強い。

だけど。

今杏さんは、ぼくの目の前で眠っている。

戦闘の怪我で、意識を失っていた。

ぼくを護ろうとして負った怪我で。

治療は施されて、命に別状はないが。

一歩間違えば、死んでしまっていたかもしれない。

今回は運が良かっただけ。

奇跡は何度も起きない。

起こさなければならぬのは必然。

そう、つまり、だから、強くても死ぬときは死ぬ。

もうひとつの結論。その死ぬ時を防ぐのがぼくの役目だ。

だが、今までのことから解るように、ぼくには力が足りない。

結局のところ、ぼくの力は一回使ったら再使用までに時間がかかるといえるのが、これ以上ないほどに欠点なんだ。

敵の強襲が二回以上連続で来たらそれで終わり。時間稼ぎをしてもらわなければ何もできない。

護ってもらうことが前提の、欠陥だらけの力。

そんなこと、目を背けていただけで最初からわかってたけれど。

ぼくに必要なのは、連続で使える強力な力。

グングニル級の攻撃を何度も使えれば、敵なしだろう。

そう、力が必要だ。

必要なんだ。

絶対に。

力、力、力、力。一人で皆を守れるくらいのの。

———神様……。

病院の一室、杏さんの病室の、杏さんが眠るベッドの横で椅子に座りながら、ぼくは思考に耽っていた。

手の平に爪が食い込んで血が滲んだ。

杏「武谷さん……？」

杏さんが目を開けた。こちらを見ている。

血が滲んだ手の平を見られないように両手を伏せた。

杏「私、どれぐらい寝てました……？」

武谷「少しだけさ。戦いが終わってから数時間くらいだよ」

杏「そうですか……」

杏さんは静かに言って目を伏せた。

そして目を開く。

杏「みんなは、無事ですか……？」

武谷「みんな無事だよ。杏さんの怪我が一番酷いくらいさ」

杏さんはほっとした表情をした。

杏「なら、みんなは今どうしてますか？」

武谷「今回の戦いで杏さん以外の四人は切り札を使つたんだ。だから身体にどんな影響があるのかわからないってことで、この病院で検査入院しているよ」

杏「切り札、使つちやつたんですね」

武谷「うん」

空気を変えたくて話題を変える。

武谷「真つ先にタマさんはこの杏さんのいる病室に行きたがつてたよ。検査しないといけないから止められて渋々引きさがつたけど」

杏「ふふ……タマつち先輩……」

杏さんは笑つてくれた。

武谷「ねえ、杏さん」

杏「なんですか？」

武谷「あの時、護つてくれてありがとう」

必死にぼくを抱えて抗つてくれた。あの姿をぼくはずっと忘れないだろう。

杏「いえ、当然のことをしたまでです……」

微笑みはそのままだに、照れているのか頬が朱に染まっている。

杏「私だつて前に守られましたし、仲間で友達じゃないですか」

今度はぼくが護るから。

その言葉は、口には出さなかった。

もし今、口に出したら、心の中にある過去からの凝り^{こり}を、悟られてしまいそうな気がしたから。

千景 viewer

三度目の襲撃を乗り越え、検査入院をしてからしばらく経った。

私を含めみんなが切り札を使った影響は、検査をしても特に見つからなかった。私も、かなり疲れただけでそれ以外に何かがどうなってしまったような感覚はなかった。

あくる日。

今日の鍛錬も終わり頃。

私は、ついに決心した。

聖陵院くんを、で、で、デートに誘おうと思う。

それというのも、最近、どんどん聖陵院くんの元気がなくなっているように見えたからだけだ。

よく見ていないと、ずっと見ていないとわからないほどの僅かな違いだけだ、私に

は顕著に見えた。

理由は、よくわからないけど……。いつもみたいに、普通に、明るく話しているし。様子は一切変わったところがない。

それでも元気がないように見えるのは不思議な感じがするけれど。

一緒に遊んで、元気づけてあげたい、と思った……。

友奈「ねえ、ぐんちゃん、今度どこかに遊びに行こうよ」

千景「……っ!!」

友奈「わあっ!? ぐんちゃんが跳ねた!?!」

友奈「どうしたの?」

千景「いえ……考えごととして、急に話しかけられたから驚いただけ……」

友奈「そっか、ごめんねぐんちゃん」

千景「高嶋さんは悪くないわ……」

友奈「それでね、ぐんちゃんとお出かけしたいなって思ってるんだけど今度いいかな

?」

高嶋さんとお出かけ……。

すごく魅力的な提案だ。

でも、私は聖陵院くんをデ——遊びに誘おうと思っていた。

どうしましょう……。

どちらかを優先する？　今回は高嶋さんと出掛けて、聖陵院くんは今度？　聖陵院くんをまだ誘ったわけではないのだし。

けど、今誘わなかったらそのままずるずると誘えない気がする……。

——その時、私の脳に電流が奔った。

二人とお出かけ。

ハーレムデート。

両手に花。

いえ、片手に花、片手に……なんだろう……。

とにかく。これはいいかもしれない。

千景「高嶋さん……聖陵院くんも一緒にいいかしら……？」

友奈「たけくんも？　もちろんいいよ！」

笑顔で了解してくれた。

友奈「あ、ぐんちゃん、それならさ」

千景「なに？」

友奈「たけくんを元気づけてあげようよ」

心臓がドクンと鳴った。

私がさつきまで考えていたことだからだ。

まさか考えを悟られたということはないだろうけど……。

千景「……高嶋さんも気づいていたのね」

友奈「ぐんちゃんも気づいてたんだ。たけくんが最近元氣ないの」

千景「ええ……」

友奈「なら話は早いね、ぐんちゃんが元氣づけてあげよう！ 私も協力するけど」

千景「でも……何で私に？」

友奈「ぐんちゃんに励まされた方がたけくんは嬉しいと思うんだ」

千景「……そ、そうかしら」

友奈「うん、絶対そうだよ！」

千景「それじゃあ……今から、聖陵院くんを誘ってくるわね……」

友奈「ぐんちゃん頑張つて！」

千景「わかったわ……」

なにを頑張るかは、わからないけど……。

ただ、遊びに誘うだけよ。

ぼくは今、千景さんと友奈さんと丸亀城前で待ち合わせしていた。壁に背を預けて、まだ来ていない二人を待つ。

それというのも先日。

千景『せ、聖陵院くん……』

武谷『なに？ 千景さん』

千景『明日、が無理だったら別の日でもいいけど……一緒に遊びに行きましょう……』

高嶋さんも一緒だけ』

武谷『うん、いいよ、わかった』

千景『……随分、あっさり決めるのね』

武谷『そんな気分なんだ』

千景『そ、そう……』

なんて会話が あったからだ。

千景さんからの誘い、断るはずがない。

本当は、力の追求に行き詰っている事を忘れたかったからなのかもしれないが。

鍛錬をして、いくら肉体を鍛えても、人の身では神の尖兵であるバーテックスは倒せ

ない。

どれだけ努力しても不可能なのだ。神の力が無ければ倒せない。

そして北欧の勇者システムを改良することは、ぼくにも、他の人間にもできない。詳しく知るものがもう、誰一人としていないから。

だから、襲撃が来た時に全力で戦うしか、ぼくにできることはなかった。

色々考えなきやいけないこと。考えても無駄なこと。悩みは絶えないけれど。

今は千景さんと友奈さんと遊んで、気を休めて、それから考えよう。

待ち合わせ場所、ここに、千景さんが歩いてくるのが見えた。

千景「聖陵院くん……おまたせ。きよ、今日もいい天気ね」

武谷「そうだね。お出かけ日和だ」

太陽は気持ちの良い光と温度を届けてくる。

過ぎしやすい日だ。

千景さんは、いつもと違う格好をしていた。

胸元に白いリボンがあり、白黒の縦じまで、スカートの部分に白いフリルのついたワンピース。そのうえから深紅のなんかオシヤレな上着を羽織っていた。黒ニーソで絶対領域も見える。

武谷「その服、似合うね。可愛いよ」

千景「っ!?! ……そ、そう」

照れているのか、千景さんの頬は赤く染まっている。

友奈「ごめーん！ 遅くなったー！」

友奈さんが、遠くから走ってくるのが見える。

今日は、楽しい一日になりそうだ。

合流したぼくたちは、ショッピングモールへと向かった。

結構巨大な建物に入ると、のんびり歩いて行く。

入って最初の内は、千景さんと友奈さんが何かを話していた。

少しすると話し終わったのか、千景さんがぼくに向いた。

千景「聖陵院くん……どこか行きたい場所はあるかしら？」

武谷「特にはないかな。千景さんか友奈さんの行きたい場所でもいいよ」

千景「……そう」

千景「高嶋さん、どうし——」

友奈「そうだね、えーと——」

何やらまた二人で話している。周りの喧騒があるうえ、声を小さく二人が顔を密着させるように話しているのうまく聞こえない。

こちらへ振り向く千景さん。

千景「……聖陵院くん、なら、ゲームセンターでいいかしら？」

武谷「うん。いいよ」

行き先が決まったので、三人で方向を変えて歩き出す。

千景「聖陵院くん……あのゲームショップの前に貼ってあるポスターのゲーム、もうすぐ発売するんだけど、続き物で、前作が面白くて期待度高いのよ」

武谷「へー、そうなんだ。ぼくも買ってみようかな」

そうすれば千景さんと一緒に楽しめるかもだし。

千景「ぜひ購入をお勧めするわ。続き物だけど物語としては独立しているから、最新作からでも楽しめると思う」

千景「それにネット対戦も充実していて、主流はそっちだけどアドホックでも対戦できるから、もし買うのなら一緒にやりましょう」

なんだか、そのゲームの話をしている時の千景さんの表情は生き生きとしていた。

その横で友奈さんはニコニコと楽しそうに笑っていた。

千景「聖陵院くん——」

話す。

千景「聖陵院くん——」

千景さんと話していく。

千景「聖陵院くん——」

今日は、千景さんによく名前を呼ばれるような気がした。

8話 今日という楽しい一日

ゲームセンターに着いた。

ゲーセン特有の騒がしい音が鳴り響いている。

千景「聖陵院くんは、どれをやりたい……？」

武谷「そうだなあ。千景さんたちがやりたいのあったらそれでいいけど、とりあえず一通りみんなで遊んでいこうか」

千景「それもそうね……」

友奈「さんせうい！」

それから、シューティングゲームや、レースゲーム、ホッケー、色々なゲームをプレイした。

結果は、一言で言えば千景さん無双だった。

ホッケーだけはスポーツのようなものだからか、普通に接戦だったけれど。

シューティングゲームではぼくらより桁が多い高得点を叩き出し、レースゲームではぶつちぎりで一位を取っていた。ぼくと友奈さんはわいわい騒ぎながら銃を乱射し、コースアウトしてただけだ。

何はともあれ、ぼくらは三人とも楽しんでいた。

side viewer

シヨツピングモール。

ゲームセンターの外の物陰。

そこには四人の少女が、武谷たちを視界に収めながら話していた。

杏「キヤー！ キヤーキヤー！」

杏が球子の背中をバシバシと叩く。

球子「痛っ!? 痛えっであんず!! なにするんだよ！」

杏「だってだってだって」

球子「だってじゃねえっ！」

球子「さつきから騒いでるけど、怪我もまだ完全に治ってないんだから無理するなよ
あんず」

杏「わかってますよタマっち先輩。心配してくれてありがとう」

球子「おう」

杏の笑顔に少し照れて、球子は話題を変えるように言う。

球子「そもそも、本当にあれ、デートなのか？」

杏「私たちは武谷たちの待ち合わせを偶然見てしまい、そのただならぬ雰囲気からつい尾行して来てしまったのだ

杏は最初から、あれは絶対デートだと主張してやまない。

球子「普通に三人で遊んでるだけじゃないか？」

杏「いいえ、デートです」

杏は確固たる真実だと断言する口調で言う。

杏「千景さんの様子を見ればわかります。あれはハーレムデートです」

球子「武谷にとってのハーレムデートなら分からなくもないが、千景にとって？」

杏「そうです。千景さんのハーレムデートです」

球子「片方男だけだ」

杏「それでもそうなんです！」

球子「お、おう」

杏「両手に花、いえ、両手に騎士でしょうか、王子さまでしょうか」

杏はぶつぶつと興奮しながら呟き続けている。

球子はその様子に気圧されていた。

若葉「覗き見などして良かったのだろうか……」

ひなた「若葉ちゃん、これは覗き見ではありません。三人のデートがうまくいくかどうか見守っているのです」

若葉「屁理屈じゃないか」

main viewer

友奈「あれかわいい〜！」

友奈さんがUFOキャッチャーにある牛のぬいぐるみを指さし、ふにやりとした笑顔で言った。

千景「私に任せて……」

千景さんが即座に行動した。

UFOキャッチャーの前に立ち、財布からワンコイン取り出す。

一度に六回プレイできてお得な五百円玉ではなく、百円だ。絶対の自信が窺える。

千景さんはチャリンと百円硬貨を投入し、ボタンを押して操作する。

UFOキャッチャー特有の気の抜ける軽い音が鳴る中、ぼくは固唾を飲んで見守った。

千景さんがターンッ！ とボタンを押した。

武谷「あ、あれはっ!？」

タグ引つ掛け!

ぬいぐるみに付いているタグにアームを引つ掛けて持ち上げるというUFOキャッチャーの高等技術!

一発だった。

牛のぬいぐるみはたった一度のプレイで檻から解放されたのだ。

千景さんにとっては百円で十分ということだ。

牛のぬいぐるみを抱えて戻ってくる千景さんの姿は、正に凱旋だった。

千景「高嶋さん……これプレゼントするわ」

友奈「わあー! でも、いいの?」

千景「私は別にいらぬから……」

友奈「なら、遠慮なく受け取るね、ありがとう! 今度私もなにかで返すね!」

千景「たった百円よ。気にしないで」

たった百円よ。気にしないで。

くうう〜! そのセリフ言ってみてえ!

ぼくはUFOキャッチャー下手だからなあ。

千景「聖陵院くん」

いつの間にか目の前に千景さんが立っていた。

武谷「なに？」

千景「聖陵院くんも……UFOキャッチャーでなにか欲しいのあったら取ってあげる」

武谷「え？ 悪いよ」

千景「私なら百円で取れるから大丈夫……」

確かにそうかもしれない。

でも女の子に奢らせるのはいただけない。それに。

武谷「UFOキャッチャーの景品で欲しいものは特になんだよね。だから無理に取らなくてもいいよ」

それが本音だったりする。

千景「そう……？ なら、いいけど……」

千景さんは少し不満そうだった。
なぜだ。

とりあえず、これで一通りのゲームは遊んだだろう。

次は何をしようか、と周囲を何とはなしに見まわしてみた。

と、目に留まるもの。

四角い内部で、複数人で写真を撮るための機械。

プリントシールの機械だ。

千景「聖陵院くん、高嶋さん、あれ一緒に撮りましょう……」

千景さんがプリントシールの機械を指さしながら言った。

友奈「いいね！撮ろう撮ろう！」

武谷「ぼくも構わない」

少し前から思ってたけど、千景さんやっぱり最近何か変わったな。

前だったら、自分からこういうことは言わなかったと思う。

ぼくがあの時丸亀城の裏で告げたことを、少しでも覚えていてくれたからだろうか。

ぼくは、千景さんを良い方向へ変えられたのだろうか。

変えられたと、信じたい。

ぼくは、今度こそ為せたのだと信じたい。

千景さんが一人で壊れてしまうような事態は避けられたのだと。

三人でプリントシールの機械に入っていく。

お金はぼくが出したが、細々とした操作は二人に任せる。

機械音声でもうすぐ写真を撮ることが伝えられると、千景さんを真ん中にして並んだ。

千景「聖陵院くん……もつとこつち……」

千景さんに腕を控えめに引つ張られた。

ぼくは突然の行動に戸惑いながらも流される。

そこでふと思いつく、この状況は、あの時みんな写真撮ったときと立場が逆になっているな、と。

千景さんは、反対側に立つ友奈さんの腕も掴んだ。

千景「高嶋さんも……」

友奈「うん！　ぎゅー！」

友奈さんは千景さんへ積極的に身を寄せる。千景さんの腕に抱き付いていた。

瞬間、写真が撮られる音。

撮り終わって出てきたプリントシールをみんなで見ると。

真ん中にぼくら二人の腕を握って笑顔の千景さん、左右に満面の笑みの友奈さんと、戸惑い一つも嬉しげなぼくが写っていた。

友奈「よく撮れてるね！」

千景「ええ……私、これ大切にするわ」

この写真を見た時、ぼくの中に言いようのない暖かな感情が広がった。

千景さんが、また笑顔だ。

笑ってくれている。

ぼくは、この時のことをずっと忘れないだろう、と思った。

千景さんが、恐らく御手洗いだろう雰囲気です席を外し、ぼくと友奈さんはベンチで座って待っていた。

少しの間、無言のままゲームセンターの喧騒だけが耳に届く。

友奈「ねえ、たけくん」

友奈さんの声が耳に届く。

武谷「なに？」

友奈「私とたけくんって少し似ているところがあると思うんだ」

武谷「は？」

急に何を言い出すんだ。

武谷「あり得ないよ。ケジラミと白鳥はぐちようくらい違う」

友奈「私ケジラミなの!？」

武谷「逆だ」

武谷「友奈さんはぼくなんかとは違う」

友奈「そうかな? でもね」

友奈「私は、怖いから戦ってるんだ。大切な人を失うのが怖いから戦ってる。守りたい気持ちはあるけど、怖い気持ちが強い。たけくんも、そうなんだよね……？」

ドクン、と心音が高鳴った。

守る為に戦っているのはみんな同じだろう。でも、友奈さんは恐怖で戦っている気持ちの方が強い。

大切な人を失うのが怖いから戦っている。

確かにそれは、ぼくも同じだ。

友奈「だから、同じ思いの人が、一緒の人がいるから、私がいるから、気負わずに頑張ろう？」

友奈「もっと私やみんなを頼ってね」

友奈「ぐんちゃんも、きつとそれを望んでると思うんだ」

友奈さんは笑顔で元気づけるようなことを言う。

ああ、けれどぼくは、そんな優しい君たちだから守りたいと思うんだ。
何が何でも、理不尽から助けたいと思うんだ。

何をしてでも、どうなっても。

みんなが頼れるほど強いというのも分かっている。

けれど、ああけれど、人は死ぬときは死んでしまうんだ。

呆気なく、簡単に。

だから、そこから守るのがぼくのやるべきことなんだ。

何度も思ってきたことだ。

みんなが脅かされる限り、それは変わらない。

でも。

武谷「ありがとう」

少しは、楽になったよ。

武谷「それならぼくらは、失うのが怖すぎて命がけで戦えてしまうほどみんなのことが大好きな、みんなのことが大好き同盟だな」

友奈「うん、みんな大好き！」

なんとなく寂しい顔を友奈さんがしているように見えた。

なので、頭を撫でてみた。

友奈「えへへ……」

笑ってくれた。

友奈「嬉しいけど、こういうこと、ぐんちゃん以外にはやらない方がいいと思うな」

武谷「なんで？」

なぜそこで千景さんの名前が出てくるんだ。

友奈「なんであって、他の子勘違いさせたらかわいそうだよ。ぐんちゃんも、勘違いさせちゃった子も」

ぼくと千景さんは、恋人ではないだろうに。

武谷「頭を撫でる行為でそれほどまで重要なことなのか？」

友奈「それなりに重要だよ。少なくとも女の子にとっては」

武谷「……………そうなのか」

前に杏さんにしたときは喜んでもらえたと思う。

友奈さんも、嬉しいと言った。

喜んでもらえたのならいいのではないだろうか。

side viewer

四人の少女は、未だに遠くから武谷たちの様子を見ていた。

杏「武谷さんと友奈さんは、なにを話しているのでしょうか？」

球子「気になるな」

若葉「流石に盗み聞きはまずいだろう」

ひなた「若葉ちゃんの言う通りですね。だから見守っているだけにしましょう」

若葉「そうだな。……あれ？ いつの間にか覗き見が許容されている？」

杏「あ、武谷さんが頭撫でました。友奈さん嬉しそうに笑ってます！」

杏「これは浮気……いえ、武谷さんはハーレム作る気だったんです！」

球子「な、なんだってー!?」

ひなた「驚きです」

若葉「いや頭を撫でただけだろう」

ひなた「これはどうにかしないとイケませんね。みんなで乗り込みましょう」

若葉（ひなた、なんかやけに楽しそうだな）

ひなたは誤解だと解っていた上で、ノリを押し通した。

武谷たちの少し暗い空気を感じ取って、楽しい空気に変えてあげたかったからだ。

この時、千景はトイレからの帰り道に自販機を見つけ、ついでに二人に飲み物を買っていこうと思いきり、聖陵院さんと高嶋さんはどんな飲み物を買っていたら喜んでくれるのだろう、と自販機の前でああでもないこーでもないと迷い悩んでいた。

main viewer

友奈さんと話していると、ドタドタと、複数の慌ただしい足音が聞こえてきた。なんか。こつちまで近づいてきている？

気になって目を向けた。

球子「このおお、スケコマシがあー！」

武谷「ごふう!?!」

タマさんにドロップキックされた。

ベンチから吹っ飛ぶ。

友奈「わー!?! たけくん!?!」

若葉「やりすぎだ!」

杏「タマっち先輩なにしてるの!?! 暴力はいけないよ!」

ひなた「あらあら、焚きつけすぎましたか」

なんでここにみんながいるんだ。そしてなぜぼくに攻撃を加えた。

球子「武谷、浮気つてのはなあ、しちやいけないことなんだよ!」

タマさんがぼくの胸ぐらを掴んでくる。

何を意味不明なことを。

武谷「誤解だ! そんな事実は一切ない!」

そもそも恋人もいないのに浮気も何も無い。

杏「あれ？ ハーレム目指さないんですか……？」

杏さんがさも不思議だと言ったようにキョトンとした顔で訊いてくる。

武谷「ハーレム？ 何を言ってるんだ？」

みんなの言動の方が不思議すぎる。

千景「……いったい、なんの騒ぎ？」

いつの間にか戻ってきた、ジュースを三つ抱えている千景さんが、ジト目で首を傾げて呟いた。

その後は、みんなでうどんを食べに行つて一日を終えた。

ぼくは、この今日という楽しい一日を、ずっと忘れないだろう。

9話 このひとときだけ

彼女は今日もピアノを弾く。

ぼくは音楽室でそれを聴く。

彼女の弾く曲は今日も良かった、はずだった。

最近、ぼくは彼女の様子に違和感を覚える。

彼女の名前を呼んだ。

「……なに？」

武谷「ピアノが好きなら頑張るのはわかるよ、でも」

武谷「なんで、そんな辛そうに、死にそうな顔してまで、そこまで必死になってピアノを弾くんだ？」

「パパに、認めてもらいたいから……」

「それだけよ……」

彼女はそれ以上話したくなさそうだった。

武谷「お父さんが大好きなんだね」

「うん……」

なら、仕方ないか。

そのときは、そう思った。

そのときだけは。

千景さんと友奈さんと遊びに出かけた日から、少しの日々が過ぎた。

今、ぼくたち勇者と巫女一名の計七人は、瀬戸大橋記念公園に立っている。

これからぼくたちは結界の外へ調査遠征に出かけることになっていた。

ひなたさんたち巫女が受け取った神託で、バーテックスの襲撃がしばらく来ないことが分かった結果、今なら可能だと調査することになったのだ。

この前に襲撃で現れた巨人バーテックスは、かなり強力な個体だった。敵側は、恐らくあれで戦力を大幅に使ってしまった事が原因でしばらく襲撃休止をしているのだからと推測された。

ぼくたちは今から、白鳥さんが守っていた諏訪や生存の可能性が見出された北方を目指す。

外にはバーテックスが存在するので、乗り物は使えず徒歩だ。

ぼく以外の少女勇者たちは超人的な身体能力を有しているので、外を徒歩でも問題な

いが、ぼくとひなたさんは身体能力が普通の人間と変わらない。

そのため、他の誰かに背負ってもらい移動することになっていた。

ひなた「すみません、皆さん」

友奈「気にすることないよ、いつもヒナちゃんには、私たちができない巫女のお仕事をやってもらってるんだから！」

ひなた「ありがとうございます、友奈さん」

武谷「ぼくもみんなみたいに動けたらな……」

超人的身体能力が在れば、みんなにかかる迷惑が減るだろう。

無いものねだりかもしれないが。

千景「聖陵院くんは、勇者システムが私たちとは違うから仕方がないわ……」

武谷「ありがとうございます」

気遣ってくれて。

そんな思いをぼくに向けてくれるようになってくれた。

ここ最近、千景さんと着実に仲良くなれている。そのことが確信できて胸が暖かくなり心が踊る。

千景さんは頬に少し朱を落として目を逸らした。

球子「それじゃ、最初は誰が二人を背負ってくか、ジャンケンで決め——」

タマさんが言い終わる前に、若葉さんはひなたさんをお姫様抱っこした。そしてぼくは、スツと歩み寄ってきた千景さんにお姫様抱っこされた。

若葉「では、行くか」

千景「行きましょう……」

武谷・球子・杏・友奈「……」

前回の戦いで抱えられたことを思い出すが、あの時はお姫様抱っこではない。女の子にお姫様抱っこされるのは、かなり抵抗がある。

止めさせようとは思議と思わなかつたけど。

杏「……確かに武谷さんは千景さんが運んでいくべきですよね」

友奈「うんうん」

球子「でも、なんかこう、スカされた感が……」

杏「さも当然かのように二人ともお姫様抱っこですね……」

球子「なんか、見てるこつちが照れるっ！」

若葉「……？ 何かおかしいか？」

千景「おかしく……ないわね」

友奈「お姫様と王子様みたいだね！」

武谷「おい」

ぼくの場合は逆だ。

自分を王子様などとは思わないが。女の子的ポジションだと思われるのは嫌だ。

ひなたさんは照れたような笑みを浮かべ、若葉さんはきよんとしている。千景さんはこの状態が当然だというような無表情、いや、少し口が笑みの形をしている。

友奈「じゃあ、若葉ちゃんとたけくんの荷物は私たちで持つね！」

球子「そうだなっ！」

友奈「よーし！ それじゃあ勇者、しゅっぱーっ！」

勇者たちは跳躍し、瀬戸大橋を通って本州へと向かう。

結界の外は世界の終わりのようだった。

建物はほとんど破壊され、崩れているか罅割れている。

人は当然、ぼくたち以外一人も存在しない。

空気だけが、以前より綺麗だった。

大敗し、退廃した世界。

その光景を、千景さんのぬくもりを感じて運ばれながら、ただ眺めていた。

そうこうしている内に、神戸に着いた。

かろうじて形を残しているビルの屋上に皆降り立つ。

そこから神戸の全景を一望する。

壊れている。先までと変わらずそれだけだった。

時間短縮のために二手に分かれて探索することになった。

「「「「グーとパーで別れましょ！ ほい！「「「「」

ぼく、千景さん、若葉さん、ひなたさん。友奈さん、杏さん、タマさんというグループ分けに決まる。

三時間後に神戸港のフェリー乗り場近くに集合することに決め、それぞれ別方向に向かう。

廃墟と化した街並みを歩きながら、生存者の気配を探す。

崩れた建物の瓦礫や横転した車が各所で道を塞ぎ歩き回るのも困難だった。

どれほど多くの命が、ここで失われたのだろうか。

命。失われた命。

命は、いつか無くなる。

命が、強制的に消される。

そう、バーテックスに。

消された。

頭を振って気を取り直した。

ひなた「生き残ってる人は、いないのでしょうか……」

千景「ここも全滅したのよ……きつと……」

若葉「まだそうと決まったわけじゃない。どこかに避難した人がいる可能性だってある」

千景さんは、視線を落とした。その瞳は悲しげだ。

そうだ。まだ生きている可能性だつてある。若葉さんの言う通りだ。

ぼくは走り出す。じつとしていると胸がむかむかしてきたから。

若葉「おい！　あまり離れるなよ！」

武谷「わかつてる！」

近くの建物内を覗き、倒壊しそうになかったら中に入って生存者がいないか探した。

目を皿にして探索する。

バリケード程度だとバーテックスなら容易に破壊してしまうだろうから、隠し部屋や地下部屋に身を隠していないか確認する。

まずそれがあるのかすら分からないが、少しの違和感でも見つけられるように神経を人を探す事だけに使い研ぎ澄ます。

別にぼくは、誰かのために探しているわけじゃない。

もちろん生きているに越したことはないし、生きていたら嬉しい、けれどそれが本当の理由ではなかった。

生きている人を見つけれられたら、何かを変えられる気がして、いてもたってもいられなかったんだ。

これまで旨くできていないぼくは、それを足掛かりにしたかった。
探す。探す。求める。見つからない。

武谷「あ……」

瓦礫の影に、白い巨体の化け物——バーテックスが数体うごめいているのが見える。
すぐに周囲へ視線を走らせるが、ぼくは若葉さんにわかっていると聞いたにもかかわらず、少し距離が離れて孤立してしまっていた。

離れないように気をつけていたつもりだったが、途中から意識が探索の方に多く回されてしまっていた。

ぼくを捉えると、跳び迫ってくるバーテックス。

——グングニルを使うしかないか。

温存しておきたい。強力なバーテックスにゲージが溜まるまでの間に遭遇する可能性もある。

だから、こんな雑魚数体相手に使いたくないけど。

ぼくはスマホの画面に指を添えた。
迷っている暇はない。

固く、人体など難なく噛み潰してしまう歯が並んだ大口が目の前まで近づいた。
赤閃せきせんが瞬き、大口は上下に別れ、消滅した。

深紅の大鎌を携えた千景さんが、次々とパーテックスを斬り刻んでいく。

すべて殲滅し、千景さんは振り返った。

千景「聖陵院くん、離れすぎ、乃木さんに注意されたでしょう……？」

武谷「ごめん……」

完全にぼくの間抜けな失態だ。

千景「それと、あの雷の槍はこんなところで使わないで。もっと多いか強いやつが来た時に使って」

千景「今みたいに危なかったら私が守るから、冷静になって」

千景「聖陵院くんなら、もっと適切に使えるはず」

武谷「ぼくなら……」

確かに、結果論を抜きにしたら、今まで適切な場面で力を使えてきたのだろう。それでもみんなに任せなければならぬくらい、どうにもならなかっただけで。

武谷「千景さんありがとう。冷静になるよ」

事実、現実、力が足りない限り、みんなに頼らざるを得ないのだ。

若葉「こらっ、離れるなど言っただろう！」

ひなた「めっ、ですよ武谷さん。危ないことはやめてください」

追いついてきた二人が言った。

武谷「ごめん。反省してる」

ぼくは頭を下げた。三人ともぼくを心配してくれたのだから。

若葉「千景が間に合わなかったらどうなったか……」

ひなた「武谷さんの力なら一度は難なく切り抜けられるのでしようけど、それでも危険ですよ」

一番年上なのに、ぼくは年下のように叱られていた。

それからぼくらは待ち合わせ場所で三人と合流するが、収穫が無かったことを伝え合っただけだった。

タマさんの提案で、今日は山の方のキャンプ場でキャンプをすることに決まる。

タマさんのおかげで、テントを張るのも焚火を付けるのも容易だった。

そして現在。

夕食後、ぼくは川で身を清めるみんなが奇襲されないよう、見張りをしていた。

もちろん、みんなの方は見ないようにして。

見たら殺すと三人くらいに言われた。

球子「ううつ、冷たいっ！　これが夏だったら、もつと楽しいのになあ……こう、水のかけ合いとかしてさっ！」

バシャつと、水の音。

友奈「うわっ！　何するの、タマちゃん！」

球子「友奈も水、かけてこい！　せめて気分だけでも、夏のキャンプ気分を味わうんだ！」

友奈「よーし、わかった！　だったら容赦しないよ！」

バシャバシャと水を掬って放つ音が聞こえる。

若葉「冷たい水に浸かる時は、ジツとしているべきだ……動けば、体温を余計に持っていないか」

ひなた「ええ、まったくですね……」

杏「冷水の中で動き回るなんて、銃撃戦の中に自ら飛び込んでいくようなもの——」

球子「うりゃああっ！」

杏「ひゃあああ！」

ひなた「むむっ、不意打ちは卑怯ですよ、球子さん！」

球子「うるさーいっ！ どうせ動いてもジツとしてても冷たいんだっ！ だったら、お前らも遊べーっ！」

友奈「そうそう！ みんなも一緒に楽しもうよ！」

若葉「くっ、ならば私も容赦しないぞ！」

友奈「ぐんちゃん、それー！」

千景「わぷっ……高嶋さんったら」

友奈「ぐんちゃんもほらほらー！」

千景「……えい」

友奈「きやー！」

見張りだからあまり遠くに離れすぎることでもできず、みんなの声が聞こえてくる。

その声を聞いていると劣情が掻き立てられた。

今この会話をしながら、彼女たち六人は全裸なのだ。なにも着るものを纏っていないのだ。あんなところやそんなところが晒け出されているのだ。

覗かないが。絶対に覗かないが。ええ、覗きませんとも。

世界平和についても考えよう。

世界平和を考えながら見張りをして、みんなの声をシャットアウトしていた。

杏「きやー！ バートックスです！」

なに!?

ぼくはすべての思考を吹き飛ばし、焦燥と恐怖に駆られてみんなの元へ走った。誰も殺させるわけにはいかない。

みんなは今なにも身に着けてなくて、武器もスマホも手放しているだろう。

近くに置いていたとしてもすぐそこまで迫るパーテックスに襲われる前に間に合うかどうか。

ぼくが守らなければ。

しかし、川まで来ても、パーテックスのバの字もなかった。

あの奇妙な姿の化け物は、一体も見当たらなかった。

周囲を何度も見まわす。やはり、いない。

どういうことだ。

正面に視線を戻す。

ぼくが立つ正面には、全裸の杏さんが立っていた。

全裸の杏さんが立っていた。

その肢体は、白く美しい。

生命の美。世界の神秘だ。

身体の曲線のラインが、世界に感謝してしまいたくなるほど究極的。

リンチ後の気絶から目が覚めて、時間が経ってから話を聞いたが。

ぼくの聞いた声は「これも訓練の一環だ、バーテックスの攻撃だと思え」と若葉さんが言いながら水をかけ、それを食らった杏さんの反応があ言葉だったというわけだ。紛らわしすぎる。

そこら辺の会話を聞いていなかったぼくも間が悪いが。

あと、なんかバーテックスがその後襲来したけど、みんなの苛立ちがぶつけられてすぐに殲滅されていた。

ぼくは、このひとときだけ、全ての嫌なことを忘れていた。

10話 諏訪で

深夜。

みんなテントで寝静まっている時間帯。

ぼくは交代制で決めた見張りの、自分の番を全うしていた。

月明かりが暗く染まった空を照らす。

ぼくはその夜空を展望していた。

テントから、誰かが出てくる音と気配。

首を少し動かし目線だけで後ろを見ると、千景さんだった。

ぼくを見つけて、こちらへ歩いてくる。

武谷「見張りの交代には早いはずだけど」

千景「寝つけなかつただけだから大丈夫……」

それは大丈夫なのだろうか。

無言での、しばらくの間。月だけが光で有言している。

千景「聖陵院くん——」

武谷「あのさ」

千景さんが何か言いかけて、同時に喋ったせいで遮ってしまった。

千景さんから話してもらおうと黙っていたが、一向に次の言葉がない。

もう言う気を無くしてしまったと判断してぼくは口を開いた。

武谷「前はさ、人が死ぬと天に召されるとかいう話があったけど、今はどう言うんだろうね。大地に召される？ 神樹様の下で眠る？」

千景「……安らかでいれればいいと思うけど、わからないわ……でも、天はないと思う……きつと神樹様の方に行っているのではないかしら」

武谷「そうかな……」

千景「そうであればいいと思うわ」

武谷「そうだね」

千景「……聖陵院くんは、人が沢山死んでしまっているのが悲しいの……？」

武谷「ぼくは、そんな優しいやつじゃないよ」

千景「聖陵院くんは、優しいわ」

武谷「どうして」

千景「私を、救ってくれたから」

武谷「……………」

救ったと言えるほどのことをやっただろうか。

ぼくは少しでも良い方向に行けばと、言いたいことを言ったただけだ。

確かに少しは変えられたのだろう。一緒にプリシーを撮った時、そんなふうに見えるた。

けれど、それを維持するには守り続ける必要がある。そして力が無ければ守れない。

結局、力。

ぼくはいつもそんなことばかり考えている。

千景「ねえ……聖陵院くん」

武谷「なんだい？」

千景「聖陵院くん、みんなの裸、忘れた……？」

その言葉には、威圧感が込められていた。

武谷「忘れたよ」

覚えてるけど。

千景「そう……」

千景「なら……私の裸は……？」

照れているのか、頬が淡く赤く染まり、顔はうつむきがちに上目遣いになっていた。

武谷「忘れたよ」

覚えてるけど。

千景「そう……」

千景さんは、なぜか不機嫌な様子になり、唇を少しとがらせて目を逸らす。ぼくは空を見上げた。

深夜の空はやはり暗く、月と星だけが支配していた。

いよいよ明日には、諏訪に着くだろう。

白鳥さんは、どうしているだろう。どうなっているだろう。

……確かめれば、分かることだ。

次の日は、梅田に向かった。

みんなで話した結果、梅田駅と大阪駅の地下街を探索することに。

駅周辺は無残に破壊されていたが、地下道へ入る階段は残っていた。

階段には、破壊されたバリケードがあった。

つまり、誰か人が立って籠もっていたということ。

そしてバリケードが破壊されているということは、それを破壊した存在がいるということ。

武谷「……………」

皆足を止め表情を曇らせている。

若葉「——いや、確かめてみないと、何もわからない」

若葉さんの言う通りだ。

ぼくたちは、階段へと足を踏み出した。

暗く荒れた地下街を、懐中電灯を点けながら進んでいく。

武谷「お————い!!」

若葉「誰かいらないか————ツ!?」

通路を歩きながら何度も呼び掛けたが、ぼくたちの声と足音以外音は聞こえなかった。

ひなた「人がいた痕跡はあるのですけどね……」

ゴミ箱が倒れ散乱していた。生活ゴミが見える。

さまよい歩き、円形の広場にいつしか辿り着いた。

中央に、水を吹き出していない噴水設備がある。

球子「な……なんだよ、これっ!？」

武谷「……………」

白い塊が、まるで乱雑に捨てられた玩具のように山と積まれていた。

簡単に言えば骨だ。人骨だ。

人の死体だ。

大量の、死体。

杏さんが悲鳴を上げた。

ひなたさんは力が抜けたのかその場に座り込んでしまった。

他のみんなも、呆然と立ち尽くしている。

千景「……ひどい……地上は、ボロボロになって、地下も、こんな……」

「いったい、何人死んでいる？」

数えるのも馬鹿らしいほどの死が、この空間には充満していた。

うつむいていたら、床に落ちている一冊のノートに気がついた。

おもむろにぼくはそれを手に取る。

開いてみると、この地下街に避難していた少女の日記だった。

ぼくと同じ年くらいの、女の子。

読み進めると、壮絶で凄惨な内容だった。

少女の悲痛と絶望が犇々^{ひしひし}と伝わってくる。

手が震えそうになる、息が荒くなりそうになる。歯を全力で食いしばりそうになる。

すべて捻じ伏せた。

ぼくは無言で読み続けた。少女の思いを残すように記憶し刻んだ。

日記が途切れている最後のページまで読み終わった瞬間、ぼくの手からノートは落下した。

千景「聖陵院くん……何を読んでいたの？」

顔を上げると、千景さんが目の前にいた。

武谷「なんでもないさ」

ぼくは背を向け歩き出す。

武谷「少し休むね」

千景「聖陵院くん、どこに行くの……？ 一人だと危ないわ……」

後ろから千景さんがついてくる足音。

ぼくは少し歩いた先、通路の隅の壁に背を預けた。

上を見上げる。

空はなく、無機質な罅割れた天井があった。

息を吐く。

吐いて、吸った。

今は千景さんが近くにいます。表に出すな。歯を食いしばるな。拳を握るな。力を入れるな。胸が苦しい。頭がおかしくなりそうなくらいぐわんぐわんとする。

手に感触。隣にいる千景さんに、手を握られた。

暖かくて、柔らかくて、女の子の小さな手。

千景「聖陵院くん……私たちで、バーテックスを倒しましょう……」

武谷「うん……」

千景「悩みがあつたら、いつでも言つてね……」

ぼくは、黙って天井を見つめていた。

その後バーテックスの襲撃がありながらも、雑魚ばかりだったためみんなで蹴散らしながら進んだ。

大阪の街を一通り探索し、さらに先へ。

跳んで、皆無言で移動。

皆、あの人骨の山を見てしまった事の精神的影響を引き摺っていた。ぼくは日記の内容が頭から離れなかった。

名古屋へと着く。

名古屋駅の前に立つ大型ビルの屋上に降り立った。

周辺を一望できる高さ。

今まで見てきた崩壊した町の光景。

しかし、今まで見なかったものがあつた。

球子「おいおい……なんだ、あれ？」

異様な光景。

無数の巨大な卵のようなものが大地に根付いている。

卵型の火の塊と氷の塊も点在していた。火の塊はどこにも燃え移っておらず、氷の塊は一切溶けていない。

生理的嫌悪感を催す。吐き気がする。反吐が出る。死ね。

恐らく、バーテックスが生み出される卵なだろう。

化け物が、我が物顔で人が住んでいた町に居座っている。

占領。侵略。化け物共が何もかもを奪っていく。

世界が浸食されている。それを体現する光景。こんな悍ましいおぞものに、人類は脅かされている。

あの子たちは、こんなものに殺されたのか。

杏「……う、う……」

シヨックからか杏さんが膝を突いた。

球子「大丈夫かつ、あんず!？」

即座にタマさんが杏さんの体を支える。

ぼくは支えようと動かしかけていた体を元の位置に戻した。

杏「だ……大丈夫……。ちよつと、びっくりしちゃつて……」

杏さんの声は震え、深緑の瞳には涙が滲んでいた。

杏「……私たちの四国も……いつかこんなふう……」

球子「そんなこと、タマが絶対にさせないっ！」

球子「そのためにタマたち勇者がいるんだっ！　こんなふう……に、させてたまるかっ！」

人間が……わけのわからない化け物なんか……に、負けてたまるかっ！」

その言葉は、ぼくの思いを外部から叩き付けられているようだった。

けれど、どこか違った。

当然だ、それはタマさんの言葉なのだから。

けれどそういう意味ではなく、ぼくの思いとは違って、タマさんの思いは輝きを持つ

ものだと思えた。

ぼくには、眩しく思えたんだ。

杏「そう、ですよね……私たちが頑張らないと……」

その証拠に、タマさんの輝きを持つ言葉は杏さんに影響を及ぼした。

杏さんは涙を拭い、自分の力で立つ。

ひなた「皆さん！　まずい状況です、囲まれています……！」

ひなたさんの言葉に周囲を見渡すと、バーテックスが浮かんでいた。さらにどこからともなく次々に現れ、凄まじい勢いで数を増やしていく。

よく見る白いやつその他に、火を宿したバーテックス、氷を宿したバーテックスも点状にする。

その中で、一際目立つ、一目でこの中で一番の脅威だと解る敵。

全身が溶岩で出来ているように見える、無機物と生物の中間の如き姿をしているバーテックス。

全身が氷で出来ているように見える、内部が蠢き尖ったフォルムをしたバーテックス。

あの子たちは、こんな奴らに殺された。

こんな奴らに。

球子「……タマは今、腹が立ってんだ……」

化け物共が。

球子「この世界は、お前たちなんかには奪わせないっ！ そのためなら、どんなことだってやってやるっ！」

殺してやる。

スマホの画面、その中心に存在する魔方陣を上にはスワイプ。

若葉「球子、待て——」

画面上の歯車型魔方陣と噛み合い、高速回転、綺麗な音色と光を放つ。

旋刃盤が巨大化する。

巨大な魔方陣が前方に出現。

全身を使い身体を捻り、旋刃盤を投擲。

武谷「『グングニル』」

力の意思。言霊、詠唱。

巨大魔方陣の中心からせり出していた槍の切っ先が、放たれる。

球子「行っけえええええええっ!!」

巨大旋刃盤は周囲の刃をチェーンソーのように回転させながら 炎を纏い宿す。

轟音。

轟雷。

周辺のバーテックスや卵を巻き込みながら、溶岩のバーテックスを黄金槍が貫いた。

炎纏う巨大旋刃盤が氷のバーテックスを削り溶かし、粉碎した。そのまま旋刃盤は止

まらず、他のバーテックスや卵群をも薙ぎ払っていく。

若葉「球子、軽々しく切り札を使うな！」

球子「悪い、若葉。ついカッとなった……まあ、後悔はしてないけど」

ぼくは若葉さんの言葉にハツとなった。

タマさんが切り札を使うのを止められなかった。

周りが見えてなかった。

守ることじゃなくて、殺すことを考えていた。

——駄目だ。こんなんじや。

目的を見失うな。

バーテックスを殲滅した後、タマさんの巨大旋刃盤にみんなで乗って名古屋の街を見て回った。

けれど探索空しく、何も見つけることは叶わなかった。

そうして先に進んで、もうすぐ諏訪に着く。

白鳥さんが守っていた諏訪に。

……白鳥さんを、見つける。

ぼくは絶対に、白鳥さんを見つける。

ひなた「目を背けたら駄目です」

ひなた「きつと白鳥さんも若葉ちゃんと武谷さんに、諏訪の結末を知ってほしいはず

です。たとえその結末が、どんなものだったとしても……。彼女も、若葉ちゃんと武谷さんのことを友達だと思っていたはずですから」

ひなたさんは、ぼくが白鳥さんのことを気にしてたのを察してでもいたのだろうか。それより——結末がどんなものってなんだ。

どんなものって、なんだよ。

諏訪へ着いた。

視界は、何も無かった。

まともな建物が、無かった。

白鳥さんが守っていた町は跡形も無かった。

瓦礫、瓦礫、野原とほとんど変わらない。

食い荒らされた街。

化け物共の、蹂躪のあと。

白鳥さんは、視界内にはいない。

若葉「く……っ！」

若葉さんが悔しげな声を漏らした。

彼女も白鳥さんの思いが踏みにじられた光景を見て心に傷を負っているのだろうか。

だって、ぼくたちの中で若葉さんが一番白鳥さんと仲が良かったのだから。

話したことがあるのがぼくと若葉さんだけというのもあるけれど。

若葉「探そう……生き残りがいないかを」

そうだ。まだ白鳥さんが生きている可能性はある。

どこかに、いるはずだ。

——いてくれ。

ぼくたちは探し回った。

ぼくは走り回った。

血眼になって、目を皿のようにして、白鳥さんの、みんなと同じ年代の少女を探し続けた。

姿は知らないけど、少女を見つけたらまず白鳥さんだろう。

こんな状況で生き残れるのは、勇者だけだろうから。

千景さんは、走り回るぼくをずっと追いかけて来ていた。

見つからない。

見つかれ。

武谷「はあっ……はあっ……」

息が上がる。それでも足は止めない。棒のようになった足を、無理矢理動かす。

日が暮れ、空が赤くなってきた頃――。

ぼくは未だに、夏でもないのに汗だくになりながら捜していた。

友奈「あれ？」

急に友奈さんが畑の脇の方に駆けていき、地面を手で掘り始める。

みんなで近づいていくと、友奈さんが人の身長ほどの大きさがある木製の箱を掘り出した。

若葉「誰かが残したのか……？」

若葉さんが蓋を開けると、中には一本の鋏くわと、折りたたまれた一枚の紙が入っていた。

若葉さんが開いた紙に書いてあった文面を、みんなで覗き込んだ。

――初めまして。

いえ、もしかしたらこれを読んでいるのは乃木さんか聖陵院さんかもしれませんから、初めましてというのは変ですね。

いえいえ、実際に乃木さんと聖陵院さんに会ったことはありませんから、やっぱり初めましてでしょうか――

ぼくは、その書き出しから続く内容を読んだ。文字の意味を理解していった。

白鳥さんの手紙を、最後まで読んだ。

瞬間。ぼくは走り出していった。

みんなに今のぼくを見られたくなかったから。

やはり白鳥さんは他の人とは違った。顔も見ただけなのに、失いたくない大切な一人だった。

もしかしたら、六人と同じくらい失いたくない人だったかもしれない。

だからぼくは、みんなの前で取り繕うことができそうになかった。

平気な顔なんて、到底無理だった。

ぼくは走る。走る。

知ってたよ。生きてないってことくらい。

心の底ではわかっていた。

わかっていたんだ。

ぼくは、また守れなかったということ。

認めたくなかっただけだ。

白鳥さんは生きています、自分へ無様に言い聞かせていただけだ。

武谷「神様……神様……神様あ……」

——ふと。

視界の隅に、少女の姿が映った気がした。

武谷「白鳥、さん……?」

もしかして、生きていたのか……?」

手紙だけ一応残して戦いに行つたが、勝つてしまえて、実際は生き残っている。なんてことが、起きたのか……?」

——それとも幻覚か。

ぼくは、その少女を追いかけた。

肩まである黒髪の少女の背を、導かれるようについていく。

そうして、現れた時と同じように、ふとした瞬間に少女は消えた。

周囲を見ると、そこは諏訪大社上社本宮だった。

いや、上社本宮跡だ。

バーテックスに破壊し尽くされているから。

少女はいない。

つまり、幻覚だったのか。

ぼくの頭が、おかしくなっただけか。

膝を突いた。

跪いた。

這い蹲った。

すると目下、目の前に、黄緑色の五枚の大きな花卉がある髪飾りのようなものが落ちていた。

それを無視できなくて、思わず手に取った。

そして覚る。これは、普通の髪飾りじゃない。みんなの勇者装束と同じ、超常の、神の力を感じる。

つまり、これは、白鳥さんの勇者装束の一部。

しかし、白鳥さんはここにいない。

ここで、死んだ。

死体も残さず、失われた。

武谷「

!!!!
」

慟哭。

自然と、全身から溢れた。喉が今までにないほどあり得ないくらい震えた。

頭を掻き巻る。のたうち回る。

ぼくは守れなかったまたなにもできなかった無様に無残に奪われて力のない木偶壊れてしまえばいい助けに行くことすらできなかった遠かったから近くにいなかつたから力が足りなかつたからできるのは周りのために足掻くだけ終わつた終わつた終わつたやつてられるかも無理だ動けない動け白鳥さんを助けるもういない遅かつた惨状

慘劇悲劇クソくらえ喜劇無い悲哀ばかり絶望この世界は喜楽無い終末世界白鳥さんいない無い亡い内ないナイナイイ白鳥さんはここで死んだ残酷に陰惨に理不尽に蹂躪された肉体を潰され喰われたかもしれない引き裂かれたかもしれないぐちゃぐちゃに磨り潰されたかもしれないバラバラになってしまったかもしれない最大の苦痛を感じたかもしれない苦痛を感じる余裕すらなかったかもしれない悲しみの中で散ったのか苦しみの中で散ったのか憎悪の中で散ったのか安らかに散ったのか諦観の中で散ったのかけれど彼女は勇敢に最後まで戦って正しく勇者で輝いている尊く強い人間でされどその白鳥さんは不条理に潰されて呆気なく簡単に輝きが失われて亡くなって無くされてサレテサレ s

『聖陵院さん』

『もういいの』

『いいんだよ』

『私のために、苦しまないで』

聞いたことがある声が、聞こえた気がした。

通信機越しでしか聞いたことのない声だ。

幻聴か、そうでないのか、もう何もわからない。

それより、もういいってなんだよ。

よくないよ。

全然、何も、よくなんてない。

噛み締め過ぎて歯が欠けた。

何かが、ぼくを包んだ。後ろからだ。

暖かい。

千景「聖陵院くん……」

千景さんが、ぼくを後ろから抱きしめていた。

千景「私、味方だから……聖陵院くんが言ってくれたように、私も聖陵院くんの味方だから……」

千景「だから、そんなに苦しまないで……」

大切な人の言葉には耳を傾けるべきだ。

それは、わかっていた。

友奈さんにも白鳥さんにも千景さんにも、色々言われてきた。

それに耳を傾けて、その通りにして、みんなと立ち向かっていく。

それが正しいのだろう。

でも無理だ。

そうして力が無いのを認めて甘んじてみんなに甘えて進んでいった先で、誰か一人で

も死んでしまったら。

そう考えただけでみんなの言葉を聞き入れることはできなかった。

そもそも協力して戦うことなら既にしている。それでも足りないんだ。

楽になった瞬間、どこかが弛ゆるんでほころびが生じる。

そして誰かが死ぬ可能性が高くなる。

ぼくが楽になることは許されない。

人は簡単に死んでしまう。

人は案外頑丈にできているなんて言葉もあるけど、ぼくはそんなの信じない。

だって、本当に簡単に死んでしまうんだ。ぼくは見てきた、知ってきた。

千景さんたちも、いつ死んでしまってもおかしくない。死と隣り合わせの戦場に身を

置いているのだから。

幾ら強くても、みんなの力を合わせても、少し間違えただけで、呆気なく命は潰える。

ぼくはそれが怖くて。怖くて恐くて堪らない。

千景さんを見る。

記憶に残り続けているあの子と白鳥さんが、千景さんの姿に幻視、重なった。

絶対にこの子は死んではならない。

だから必ず守らなければならないんだ。

そのためには力がある。

——ああ、わかった。

わかったよ。

どん底まで落ちて、理解した。

ぼくには、きつと、まだ覚悟が足りていなかったんだ。

なんでも、差し出す覚悟が。

——神様……。

ぼくは落ちていた白鳥さんの髪飾りをポケットに仕舞った。

友奈「ぐんちゃん……たけくん……」

友奈さんが、^{かたわ}傍らで悲しそうな顔をしながら立っていた。

それからぼくたちは、白鳥さんの手紙と一緒に入っていた鍬を使って、本宮境内を探
索中に社殿後から見つけたソバや他多数の種を畑に植えることにした。

白鳥さんの証を、この地に刻むんだ。

畑を鋤で耕しながら、ぼくは祈っていた。神様に。

どうか力を下さいと、祈っていた。

作業が終わり、皆で少し休息を取った後、ひなたさんが神託を受けた。

四国が再び危機に晒されていると。

調査遠征は中断となった。

ぼくたちは、四国へと帰る。

白鳥さんが守護していた地を背にして。

11話 桜という植物に咲いた花が、散る前に

彼女の悩みを何とか詳しく聞き出すことには成功した。

それでも今日も、彼女は酷く辛そうで、周りが見えないくらいピアノに集中している。それを止めたくなかった。

やっぱり、このままでは駄目だと強く思う。

彼女の名前を呼んだ。

彼女は気づかずにピアノを演奏している。

ぼくはもう一度話しかけた。

気づかない。

ぼくは椅子から立って彼女の至近距離まで近づいた。

そこで名前を呼んでも、気づかない。

色々別のことを言って話しかけても、気づいてくれない。

つい、これなら無視できないだろうと、口走った言葉。

武谷「君のスカートの中が見たいんだ」

そんな言葉でさえ、無視された。

ぼくは痺れを切らした。

彼女の名前を大声で呼んだ。

それでも彼女はピアノを弾く。

ぼくは最終手段に出た。

名前を大声で叫ぶように呼びながら、肩に触れて無理矢理演奏を止めた。

「やめて」

彼女は冷たくその一言を発した。

「私は、上手くならないといけないの……」

だけど、続く言葉ですぐに冷たさは悲痛さに塗りつぶされる。

ぼくは、それを見ていられない。

武谷「でも、——さん辛そうで」

「うるさい……」

彼女は音楽室を出て帰ってしまった。

拒絶の意思が見える背中を、ぼくは追いかけられなかった。

夢。

そう、これは夢だ。

ぼくは、夢を見ている。

夢で、そしてこれは、神託だ。

人型が見える。

その人型の中に光があつた。

その人型は武器を手にした。強力な武器だ。

だが武器を手にすると、人型の中にあつた光が消えた。

永遠に、失われた。

その光景が消えると、その次にまた別の光景が映つた。

空のような空間に、大きな存在が複数いる、それは二色に分かれていた。

それとは別で、地上の方に花を宿した少女たちの傍にいる大きな存在もあった。

そして空の方の大きな存在の集合から、他よりも一際大きな二つの存在が、離れた。

地上にいる、少年の様に見える人型の方へと行き、落ち着いた。守るようにその場にいる。

それで神託は終わった。

ぼくは神託を受け取った次の日の朝、教室でヘッドホンをつけてあの子のピアノ曲を

聴きながら思考していた。

以前ひなたさんから聞いたように、神託というのは抽象的だった。

神託の内容を何とか理解し、要約して考えてみる。

まず、神託で見た光景の後者から。

これは恐らく、強い北歐神様がぼくの味方に付いている、ということだろう。

北歐神の大半は日本の天の神と徒党を組んだが、二柱の北歐神様だけは人類側に味方しているということか。

だからこそ北歐の勇者システムなんてものを使えている。

そして北歐神様に感応できるのがぼくだけだからか、巫女ではないけれど神託もぼくに送ってくる、ということか。

そして、前者。

力が欲しいのなら、代償を払えということだろう。

ぼくの祈りがようやく届いたのだ。

代償が必要、つまりぼくはただでは済まない。

だがそんなことはどうでもいい。

いつだって、力はそう簡単には手に入らないのだから。

薄々、こうなることは心の奥底では気づいていた。

けれど覚悟が足りなかった。そうでないと北歐神様はぼくに代償を伴う力を貸してはくれない。今や北歐神様と感応できるのはぼくだけだから、ぼくをそう簡単に失いたくないのだろう。

だからこそ100%の覚悟が必要だった、それが溜まったのがあの時。それでようやく力をもう一段階貸してくれる気になったのだろう。

ぼくが、仲間と協力して全力を尽くすしかない案件になぜあれほど苦悩していたのかはそれが理由だったのだ。

代償を払えば、力が手に入る。だがそれは冥府への片道切符。一度乗ったら戻れない。

ぼくは、どんな手を使ってもみんなを守りたかったが、それでも今までは100%には足りなかった。無意識下で抵抗があったんだ。

終わりの階段に足をかけることになるのだから、でも、もうそんな迷いなんて終わりだ。

力は簡単には手に入らない。いやというほど知った。

諏訪に行つて、覚悟はとうに決まっている。

ぼくは、みんなを守る。

ピアノ曲の優しい音色だけが、ぼくの耳朶を打っていた。

千景「聖陵院くん……」

声に振り向くと、千景さんが教室にいた。思考に没頭しすぎて気づいていなかった。

武谷「おはよう、千景さん」

千景「おはよう……」

千景「それ、何の曲聴いてるの？」

武谷「ん……？ うん、まあ、ピアノ曲だよ」

千景「ピアノの、何の曲？ 題名とかは……」

武谷「題名……」

武谷「良く知らないかな」

ぼくは言葉を濁して誤魔化した。

これはあの子のオリジナル曲。

題名は確か、無かった。

あの子が決めることをしなかったからだ。

千景「そう……」

千景さんはまだ何か言いたげだったが、何も言わなかった。

学校が終わると、放課後にぼくはホームセンターに向かった。

買い物を終え、寮の自室に帰宅するときっそく作業に取り掛かる。

ぼくは今朝、ネットで神様を祀る祭壇の作り方を調べた。

願いを叶えてもらうのだ。今までよりもさらに敬い、祀ろうと思った。

それで思い付いたのが祭壇建設だ。

北欧神様を信仰しているのは、今残っている人類ではぼくしかいない。

理由はいろいろと複雑だが、最たる大きな理由は二つだ。

宗教が二つもあると、後々宗教戦争に発展する可能性があることがひとつ目。

二つ目は、ぼくたちに味方してくれている北欧神様は、敵側の北欧神と存在としては同じものがあるのだ。つまり、味方の二柱を信仰すれば敵の北欧神にも信仰が行ってしまい、その分敵の力が強くなる。

だから大社が北欧神信仰が広まらないように手を尽くした。

それでも、信仰するのがぼくだけだったとしても、二柱の北欧神様は味方をしてくれたんだ。

だからぼくだけは、もっと信仰しよう。

ぼくは味方の北欧神様の力を授かった勇者だ。ぼくの信仰なら、味方の北欧神様の元

にだけ届くのだから。

祀るための台とか、御神体にする十字架とか、和風だけれど注連縄しめなわとか紙垂しでも買って来た。

そして、グングニルに見立てた槍型の飾りもネットで購入した。明日この祭壇に並ぶことになるだろう。

色々荒いけれど、祀る対象としての重要性、神様との関連性があればいい。大切なのは敬う心、感謝の心だ。

そうして、祭壇がほぼ完成する。

木の台の中心に十字架を立て、その周りに祈りと感謝を込めて作った注連縄と紙垂を等間隔に並べた。あとはグングニルを模した槍が十字架の隣に並べば完成だ。

ぼくは祭壇の前に正座し、両手を合わせ握り込み、瞑目した。

武谷「北歐神様、どうか、ぼくの祈りを、願いを、汲み取り賜え」

武谷「北歐神様のお力でぼくはみんなをここまで守ることができました。そのことに心よりの感謝を。惜しみない感謝を示します」

武谷「でも、今のままでは守り切れない状況になってきています。だからどうか、ぼくにみんなを守るための力を賜り下さい」

武谷「ぼくはいつまでも感謝し続けます。信仰を奉納し続けます。だから、お願いし

ます……っ」

ぼくはそれから毎日、この祭壇に拝み、祈り、感謝し続けた。

今までにない事態とひなたさんが受け取った神託は、未だに現実になっていない。バーテックスの襲撃は、しばらく来なかった。

気づいたらいつの間にか春になっていたようで、ただ一人中学三年生だった千景さんに卒業証書を送ろうという話になった。

勇者たちの通う教室は変わることはなく、今までと同じで変化はあまり感じられないが、千景さんの大切な節目だからみんなで祝おうということになったのだ。

千景さん以外のみんなで一枚の卒業証書を作って、朝早く教室に集まって千景さんを待ち伏せした。

ガラガラガラ。教室のスライドドアが開けられる。

千景「……なに……みんなしてニヤニヤと……気持ち悪いわよ」

みんなで思わず笑みを零しながら並んでドアの周りを囲んでいたら、開口一番千景さんはそう言った。

友奈「せーのっ」

「「「卒業おめでとう」」」」

ぼくたちは一枚の卒業証書を六人で持ち千景さんに向けて差し出す。

千景「……そつ、ぎよう」

友奈「うん、卒業！」

千景さんはぎこちない手つきで受け取る。

千景「卒業なんて、すっかり忘れてたわ……」

杏「今までと変わらないですもんね」

球子「そうだよな」。盛大に超宇宙勇者とかになれば絶対覚えるんだが」

若葉「どんな勇者だ」

ひなた「ふふ」

武谷「千景さん、一応高校生の先達としてよろしく」

千景「偉そうね……先輩」

千景さんはほんの少し、笑ってくれた。

更に日は過ぎ、教室に全員登校してくると、杏さんとタマさんがお花見をしようという話をした。

友奈「楽しそう！ やろう、やろう！」

ひなた「ええ、いいですね。丸亀城にいて、お花見をしないという選択肢はありえません」

若葉「いい息抜きになるだろうし、悪くないな」

千景「そうね……いいかもしれないわ……」

武谷「ぼくも賛成かな」

呑気にしていられる状況ではないのかもしれない。

今までにないほどの何かがある、パーテックスの襲撃が神託されているのだ。

けれど、こんなときだからこそ、みんなに心穏やかにいてほしいと思った。お花見をしてほしいと思った。

それに障害が立ちほだかるなら、ぼくが全霊を以て潰そう。

ぼくはみんなが思うように生きてほしい。

球子「よし、じゃあ次のパーテックスとの戦いが終わったら、祝勝会を兼ねたお花見だーっ！ 俄然、やる気が出てきたぞっ！」

杏「約束、ですからね？」

武谷「？ うん」

なぜか杏さんがぼくを見ながら言ってきたので、とりあえず頷いた。

杏「早くお花見、できたらいいなあ……」

その杏さんの言葉が妙に耳に残った。

このお花見の約束は、必ず達成させなければならぬ、強くそう思う。

花の命は短いから。

散ってしまう前に――

そんな言葉が頭に浮かんだ。

それは不穏な暗喩のようなものに思えて。

妙な焦燥感に駆られて、すぐに考え直す。

桜という植物に咲いた花が、散る前に。

だから頭の中で改変した。

ただ桜というバラ科モモ亜科スモモ属の落葉広葉樹の花は、開花してからすぐに散ってしまうから、お花見をしたのなら早くしないといけない。

ただそれだけで、他の意味など微塵もないのだと。

暗喩などさせない。

桜が散るようにみんなを散らせはしない。

人は、少女は、みんなは、簡単に散ってはいけない。

ぼくが守る。

その日の夕方、世界は樹海化した。

とうとうバーテックスの襲撃が起きたのだ。

ぼくたち六人は根ばかりの世界で並び立ち、視界の向こうを見据える。

若葉「多いな……」

杏「多いですね……」

そこには、何千体もいるだろう、正に無数のバーテックスが迫っていた。

今すぐにもあの真ん中にグングニルをぶち込んでやりたいが、それは早計、軽拳だろ。

進化体でもない雑魚なら、みんなでも余裕で倒せる。

しかし、あの物量は度し難い。どうするか。

杏「あの……聞いてもらえますか？」

杏さんが自分の立てた作戦をみんなに説明する。

丸亀城に攻め込んでくる敵を、それぞれの位置で交代で迎え撃つて守るというものだ。

これなら物量を相手取った体力の消耗も軽減される。

若葉「よし、それで行こう」

みんなも異論はない。

今まであまり表出していなかったが、杏さんの頭がいいのは前から知っていた。策を考えた指示をするなら杏さんは適任だろう。

友奈「そうだ、みんなでアレやろうよ！」

球子「アレ？」

友奈「みんなで肩を組んで丸くなって、『行くぞー！』ってやる奴！」

杏「円陣ですね。そういうえば、勇者になる前の学校では球技大会なんかでやってるチームがありました」

若葉「……いいかもしれないな」

罪悪感が疼いた。

そんなもの、みんなを守るためならと捨て去っていた筈だ。

ぼくは、頼ってほしいと言ってくれたみんなを裏切る。

どの面下げて一緒に円陣なんて組めるんだ。

ぼくはみんなと協力して戦いはするが、みんなを頼らずに一人で戦おうとしている。みんなを守るためだ。万が一にも死なせてしまうなんてことにさせないためだ。そう言い聞かせても、裏切ることに変わらない。

千景「……………」

千景さんは、ぼくを見ていた。

まさかぼくの考えが気づかれていないだろうな。

表情はいつも変えないように気をつけている。気づかれていないはずだ。

友奈「ほら、ぐんちゃんとたけくんも！」

千景「……うん。聖陵院くん、いくわよ……」

武谷「あ……」

友奈さんが千景さんの手を取り、千景さんがぼくの手を握った。

円陣の中に入れられる。

もう抜けられる雰囲気ではない。

時計回りに、ぼく、杏さん、タマさん、若葉さん、友奈さん、千景さんの順に並んだ。

ぼくの左右に杏さんと千景さん、正面に若葉さんがいる形だ。

若葉「諏訪の人たち、白鳥さんの思いを無駄にしない為にも私たちは負けるわけには

いかない。この戦いも、必ず四国を守り抜くぞ！ ファイト、」

「「「オーツ!!」」」

勇者たち六人の声が合わさる。

何か感づかれないように、声だけは合わせた。

12話 スコーピオン・バーテックス

円陣のあと、ぼくたちはバーテックスを迎え撃つための行動を開始した。

それぞれ丸亀城の正面、東、西に散開していく若葉さん、友奈さん、タマさん。

杏さんは後ろから指示と援護、千景さんは交代まで待機だ。

杏「武谷さんはグングルを温存しててください」

ということで、ぼくも待機だ。

千景さんがぼくを見て、近づいてきた。

千景「聖陵院くん……悩んでるなら、言って。頼って」

やはり、千景さんに不自然に思われてたか。

武谷「ぼくにできることは、みんなと協力してバーテックスを倒すことだけだよ。そ

してそれはちゃんとするから問題ない。そうだろう？」

千景「違うわ……」

武谷「どうして？」

千景「聖陵院くんにできるのは……バーテックスを倒すことだけじゃない」

千景「私を、救ってくれたじゃない……」

千景「それに、生きていてるだけで価値を認めてくれると言ってくれた……だったら、私も聖陵院くんが生きているだけで価値を認めるわ」

……………。

武谷「ありがとう。でも、悩みなんてもう無いんだ。これは本当だよ」
ぼくは笑った。

これ以上追求されなくなかったし、嬉しかったのも本当だから。
ぼくはみんなを守るよ。

そんなことを言ってくれる千景さんたちを守りたいんだ

千景さんは、少し腑に落ちなさそうにしながらも、それ以上は何も言ってこなかった。

それから、交代で防衛していくみんな。

順調にパーテックスを倒していく。

切り裂き、殴り、貫き、みんなは戦う。

その姿は、勇ましく、強く、気高く格好いい。

ぼくなんて本当は必要ではないのではないかと思ってしまう。

それでも、死ぬときは死ぬんだ。

パーテックスの数がそれなりに減ってきた頃。

状況に変化が訪れる。

数十から百以上ものバーテックスが融合していく。

巨大な蛇のような姿へと完成した。

蛇型のバーテックスが、その顎を若葉さんに向け、襲いかかる。

進化体だ。みんなに任せて様子見をするか、グングニルを撃つて倒した方がいいか。

杏「様子を見ましょう、武谷さん」

武谷「わかった」

若葉さんが生太刀を一閃。蛇型のバーテックスは真つ二つになる。

斃せた……か？

真つ二つになった蛇は、消滅せずに分裂した。

雑魚バーテックスを取り込んで、元の大きさを保ったまま二体が増える。

こいつは、脅威だ。

若葉さんたちに任せるか、どうするか。

撃つた方がいいかもしれない。

杏「分裂はまずいです。武谷さん、使ってください」

杏さんがそう判断したなら、使った方がいいほどの敵だろう。

ぼくはスマホの画面中心にある黄金色の魔方陣を上をスワイプ、指を離す。

上の歯車上の魔方陣と噛み合った魔方陣が高速で回転、綺麗な音色、発光。

杏「若葉さん、離れてください！」

杏さんの声に、若葉さんがその場から跳んで離脱した。

巨大な魔方陣がぼくの前に出現する。

大槍の切っ先が魔方陣の中心からせり出してくる。

武谷「『グングニル』」

ぼくの言霊、詠唱により、北欧の勇者システムが発動する。

黄金の巨大槍が射出。

轟音。

轟雷。

雷の大槍は、蛇型のパーテックスを貫き、全て雷で焼き尽くし、周囲にいた雑魚パーテックスも巻き込みながら彼方へと消えていった。

槍が通り過ぎると、若葉さんは元の位置に戻り、またパーテックスを切り斃していく。

杏「ふう……なんとかかりましたね」

杏さんが安堵の息を吐く。このままパーテックスを順調に倒していけば、難なく終われるだろう。

けれど、そう簡単には終わってくれない。

壁の向こうから走ってくる影。

それは徐々に輪郭を現す。

巨大な馬のような姿のバーテックスが、走って来ていた。

明らかに通常のバーテックスとは姿形が違う。進化体だろう。

当然グングニルは撃つたばかりなのでゲージが溜まっておらず、使えない。

杏「みなさん、切り札は使わなくてください！ まだ使っていない私が、使います」

杏さんにも、切り札は使わせたくない。

けれどグングニルは撃てない。

ならば、なんでもいいから力を下さい。

——まだ、足りない。

そんな文言が頭に流れた。

何が足りないんですか。

覚悟は決まってる。

足りないことなんてない。

早く、早くして下さい。

力を、下さい。

北歐神様……。

けれど、未だに新しい力が宿ることはなかった。

杏さん以外も切り札を使ったことがあるが、今まで何事も起きていない。だったら今は杏さんに任せるしかないのか。

杏さんが馬型のパーテックスが走ってくる方角へ跳ぶ。その方角はタマさんが防衛している場所だ。

彼女は神樹へとアクセスし、精霊をその身に宿す。

ゆきじょうろ
雪女郎、雪の化身だ。

杏さんの勇者装束が変化する。羽織のようなものを身に纏っていた。

杏さんは馬型のパーテックスへクロスボウの照準を合わせ、放つ。

クロスボウから放たれたのは矢ではなく、無数の雪だった。

一点集中させた、遠くからはレーザー状にも見える雪の大群は、馬型のパーテックスへ直撃する。

その猛吹雪は、馬型のパーテックスの体を凍らせていった。

すぐにその全身は凍りつき、砕け散って消えた。

やはり切り札は強力だ。

馬型のパーテックスを倒したのも束の間。

百体以上ものパーテックスが、融合を始めた。

杏「させません！」

杏さんがクロスボウを上空に掲げた。

クロスボウから発射された猛吹雪は、今度は一点集中ではなく広範囲に広がった。

ぼくの位置を避けて、吹雪が周囲一帯を覆い尽くす。

杏さんがぼくに配慮してくれなければ、勇者装束も身に着けていないぼくは一瞬で氷

結されて死に至っているだろう。

吹雪に身を晒した四人も、寒い、と言う程度で済んでいる。杏さんがぼく以外に雪を

避けさせていないのは制御が難しいのか。

目に見えるバーテックスは全て凍り、地に落ちて砕けた。

球子「おお、すごいな……あんず」

友奈「やったね、アンちゃーん！ もう敵、少ししか残ってないよ！」

これで、本当には殲滅戦だけだ。

一瞬そう思った。

されど、特大の嫌な予感が駆け抜ける。

まだ、まだ終わっていないのだ。

視界の奥、壁の向こうから、さらなるバーテックスの増援。

その中心に、一際巨大な、目を引く進化体。

一言で言えばサソリのような姿形。

数十メートルはある全長、不気味な液体を貯蔵した腹部、サソリの尾を思わせる器官、鋭利な尾の先、巨大な針。

一目見て、やばいと思った。

あれは、他とは、今までのとは違う。

勇者を殺す存在だ。

タマさんと杏さんのいる方角からサソリ型のパーテックスは迫ってくる。

球子「……まずいぞ、あれ……」

友奈「なんていうか……大きなエビ……？」

千景「むしろ、サソリに近いと思うわ……高嶋さん……」

杏「私が行きます！ 攻撃力は私が一番高いはずです！」

杏さんがサソリ型に向かって跳んで近づいていった。

杏「凍れ!!」

クロスボウから放たれる猛吹雪、一点集中させた強威力の切り札。

狙い変わらず命中する。

冷気の余波だけでサソリ型の周囲にいた雑魚は凍りつけ砕け散った。

当然本体はそれより遥かに強烈な冷気と吹雪を身に受けている、無事な筈がない。

しかし――

サソリ型バーテックスには、まったく効いていない。

体表に霜が付く程度で、凍りつかせることができない。

武谷「なに……!?!」

杏「そんな……っ!」

切り札、精霊を宿した力の効かない敵、そんなものが存在しているのか。

サソリ型の巨大な針が杏さんに襲い掛かった。

杏「わっ!?!」

間一髪で避ける杏さん。

背筋が凍った。

心臓が止まりそうになった。

けれど今、本当に心臓が止まりそうになったのは、杏さんだ。

少し間違えば、彼女は貫かれていたのだから。

まずい。

あいつは、まずい。

サソリ型バーテックスの姿が、ぼくには邪悪な死を司る尖兵に見えた。

醜悪な存在だ。

他の通常個体たちも、次々に融合していった。

千景さん、友奈さん、若葉さんの元へ殺到する、サソリほどではないが巨大な進化体たち。

千景「使うわ……切り札……！」

今の状況で、止められなかった。

むしろ止めた方が危険だ。

切り札を使って千景さんたち三人は進化体と渡り合う。

けれどその対処で手一杯だ。

サソリ型とは、杏さんとタマさんが戦っている。

千景「聖陵院くんは、私が守る……」

七人岬、切り札で分身した内の千景さんの四人が、ぼくへ向かって来るパーテックスの対処をした。

武谷「ああっ!？」

思わず声をあげてしまった。

サソリ型の巨大針が掠っただけで、杏さんの綺麗な白い肌が赤く爛れたからだ。毒を持っているんだ。

杏さんの切り札も、タマさんの切り札も、通じていなかった。

焦燥感が募る、湧き上がってくる、大量に溢れる。

杏さんとタマさんが、死んでしまう。

このままだと、二人が、死んでしまう。

確信ともいえる感覚があつた。

このまま何も変わらなければ、すべてが終わる、と。

サソリ型の尾に強く叩き飛ばされて、地に落ちる杏さんとタマさん。

切り札が解除された通常時の大きさの旋刃盤を楯形状にして、

杏さんが倒れている。意識を失っているのだろう。

自然と、少し遠くにいるタマさんの声が聞こえた。

球子「あんずっ！ 起きろっ！」

杏さんは、目を覚まさない。

球子「くそっ……！」

尾の先、巨大な針が振るわれる。

球子「くそそおおおおおっ！」

切り札が解除された通常時の大きさの旋刃盤を楯形状にして、尾針を防ぐタマさん。

球子「ぐっ、うう……！」

尾が揮ふるわれる。

球子「うううううっ……!!」
突き出される。

球子「ううああああ……!!」

勇者を殺す為に、何度も。

杏「……う……た、タマっち……先輩……?」

球子「目、覚ましたか……!」

杏「タマっち先輩……?」

球子「早く逃げろ……あんず……!」

楯には、罅が入ってきていた。

もう長くはもたないだろう。

杏「何言ってるの!?! タマっち先輩こそ逃げないと!」

球子「タマは、無理だ……」

何度も幾度も突かれ、二人の死は近づいてくる。

杏「どうして……!?!」

球子「こいつの攻撃で……足が、痺れてる……! とうか……骨、砕けてるかも……

動けない、んだ……!」

杏「……!」

ぼくは、すでに動いていた。

球子「お前だけでも……逃げろ、あんず……!!」

杏「ダメだよ！　できるわけないよ！」

球子「このままだと……二人とも死ぬ……！」

杏「嫌！　絶対に嫌だ！　そんな、こんなことつて……！」

ぼくは、絶対に――

球子「あんずの……わからず屋あ……っ！」

杏「わからず屋でいいもん！　絶対に逃げない！」

絶対に、この子たちを殺させはしない。

ぼくは全速力で走っていた。

スマホを握り締めて、走っていた。

千景「聖陵院くん……!!」

後ろで千景さんが叫んだ。

危険だと言いたいんだろう。

でも、ごめん。

今、ぼくが動かなければならないんだ。

ぼくと千景さんたちの周囲にいたバーテックスは千景さんが相手をしてくれた。そ

の隙間を縫ってぼくはひた走る。

切り札は効かない。

唯一効果がありそうなグングニルは、ゲージが溜まるまでの時間が残されていない。なら、あとは。

手は、ひとつしかない。

今だ。今こそだろ。

足りないなんて言わせない。

今ちからを使わないで、いつ使うんだ。

ぼくはどうなってもいい、だから、なんでもいいから、ちからをぼくに与えて下さい。

タマさんの旋刃盤が、今にも壊れそうだ。

時間がない。

もうすぐ、少女が死ぬ。

絶望の淵。今までだったら。

武谷「早く、しろおおおおおお!!」

武谷「絶対に、護るんだ!!」

その時、奇跡^{必然}が起こった。

轟音を響かせながら、落雷が迸り、ぼくに落ちる。

それは攻撃性のものでなく、ようやく北歐神様が、ぼくの願いと祈りに応えてくれた証だった。

友奈「わあ!?! なになに!?!」

千景「聖陵院くん!」

握り締めたスマホの画面に、変化が生じる。

画面の右隅に矢印マークが増えた。

ぼくは即断して指を画面に添え、左に払う。

フリックされた画面は右に移動し、グングニルの画面と似た、けれど似て非なる画面へと変わる。

画面中央には純白の魔方陣、グングニルの画面とは違って下端に歯車型の魔方陣が存在していた。

使い方は、力が宿った瞬間に理解している。

走り続けていたぼくは、杏さんとタマさんの近く、サソリ型バーテックスの間近まで接近した。

この能力は、接近しなければ当たらない。

そして今いる位置は、射程範囲だ。範囲内なら、確実に命中する。

画面中央の魔方陣を下にスワイプ。

魔方陣と歯車が噛み合う。

魔方陣が高速回転を始める。

それは、綺麗な音色と神秘的な発光を生み出す。

巨大な純白の魔方陣が、サソリ型パーテックスの直上に発生。

準備は整った。

さあ、護ろう。

武谷『『ミヨルニール』』

言霊、詠唱。神の力の其その銘めいを。

それは事象の発現を齋もたらす。

白雷びやくらい。魔方陣から迸ほととじた。

巨大な魔方陣の中心から、ハンマーの頭部だけを象った円筒状の白雷纏う巨大な物体

が顕現、落下する。

白雷がすべてを白に染めた。

轟音。

轟雷。

一を必殺する雷槌らいづち。

北欧の神トールの御業みわざ。

それは命中した瞬間、切り札ですら効果がなかったサソリ型パーテックスを粉碎した。

強靱な体も、凶悪な巨大針も、存在すべてを。

跡形も無く破壊し尽くす。

雷が晴れた頃、そこには何も存在しない。

球子「すげえ……」

杏「武谷さん……また、守ってくれた……」

危険過ぎる敵は倒した。

残った敵はみんなが殲滅してくれるだろう。

今回も、ぼくたちの勝ちだ。

……守れた。

今のぼくには力がある。これからも、守っていける。

ぼくは幸福感に包まれていた。

武谷「北歐神様……感謝を……」

こんなぼくに。ただ無力で卑小な人間に。身に余る、みんなを守るための力を与えて下さって。

武谷「ありがとうございます……」

——意識が突然、落ちていく。

ぼくの体が倒れていく。何かが失われていく。

それをぼくはどこか他人事のように感じていた。

千景「聖陵院くん……！」

そんな中ぼくは思う。

やっぱり最近、千景さんに名前をよく呼ばれるなあ、と。

13話 君との記憶

——ぼくには、好きな女の子がいた。

実際にそんなことがあるなんて信じていなかったけれど、一目惚れだったのだと思う。

中学生の時、偶然通りかかった音楽室から聞こえてきたピアノの音色に惹かれて、音楽室を覗き込んだのが始まりだった。

そこには、ピアノを弾いている水色の髪の少女がいた。

彼女は楽しそうにピアノを弾いていて、ぼくはその姿に見惚れた。

今思えばこの時すでに、ぼくは惚れていたんだ。

やがて曲を弾き終わり、彼女がぼくに気づく。

「……誰？」

武谷「覗いちやつてごめん。でも、今のピアノすごく良かったよ」

「え……ありがとう……」

それが彼女、いぬぼうぎすい犬吠埼水とした初めての会話だった。

それからぼくは、犬吠埼さんと仲良くなるために全力を注いだ。努力の結果、友達、にはなれたのだと思う。

ぼくは犬吠埼さんの弾くピアノが好きで、それを録音してぼくにしてくれないかと頼んだところ、「いいよ……」と彼女は言ってくれた。

いつも暇さえあれば、ぼくは犬吠埼さんの弾いたピアノ曲をスマホで聴いていた。

そうやって、しばらくは穏やかな時間が過ぎていたんだ。

けれど、そんな中、犬吠埼さんに悩みがあることを知った。

彼女は表情を陰らせることが多かったからだ。

なんとか、踏み込んで理由を聞くと、彼女は話してくれた。

犬吠埼さんはピアノのプロを目指していて、同じくピアノのプロの父親に認められたいそうだった。

でも、どれだけ練習しても、上手くなっても、父親は認めてくれないらしい。

犬吠埼さんにとってピアノは生き甲斐で、目標は父親に認められること。

とにかく父親に認められなくて彼女は必死だった。

そのことばかりに必死で、ぼくが犬吠埼さんを認めても救われてくれなくて、必死に暗い中を進んでいた。

ぼくは何とかしてあげたくて、けれど友達にはなれても見ていることしかできなく

て。

ぼくがいくら元気づけても、ピアノの腕を褒めても、「ぼくは犬吠埼さんのピアノ好きだよ」と言っても、彼女が認めてほしかったのは父親なんだ。

だからぼくには応援することしかできなかった。それでも犬吠埼さんが上手くなるわけじゃない。ぼくからしたらプロとどう違うかなんてわからないのに、なにが駄目なんだろうと何度も思った。

どうして彼女の父親は認めてあげないんだろう、と。

それでもなんとかしたくて、ぼくは頑張った。考えた。奔走した。

そして、正面切って犬吠埼さんの父親と話してみた。

そうすると、意外と簡単なことが分かった。

彼女の父親は、犬吠埼さんのことを真に思っていたのだ。

不安定な音楽の道ではなく、安定したもっと良い道に行つてほしいと考えていたのだ。

だから犬吠埼さんのピアノが幾ら上手くなるかと認めなかった、どれだけ上手くなるうとも、プロとして一生やっていける保証はどこにもないからだ。それを彼は身をもつて知っていた。

娘には幸せになってほしいと、彼女の父親は心の底から言っていた。

なんだよそれ、と思った。

父親なら子供の夢くらい応援してやれよと思った。

あなたは今プロやってんだろ、だったら犬吠埼さんがプロとしてやっていける可能性なんて幾らでもあるだろ、と。

でも、これを伝えれば犬吠埼さんは救われる。彼女の父親はとくに君のピアノの腕を認めてたんだって。

——そんな時だ、バーテックスの襲撃が起きたのは。

ぼくはその時、自宅にいた。

ぼくの家は富豪と言えるほど金持ちだったから、無駄に広い大豪邸だ。

外が騒がしいような気がすると考えていた時、父さんが突然ノックもせずにはぼくの部屋に入ってきた。

そのことに抗議しようとする、お構いなしに父さんは言う。

父「武谷、これをお前に託す。お前がみんなを守るんだ」

急にそんなことを告げて、父さんはぼくに一台のスマホ——スマホによく似たPDAを渡した。

、どういふことか分からず混乱していると、父さんは説明してくれた。

曰く、日本とは別で、外国では北歐神話の神の研究、信仰があつた。父親は日本人でありながら北歐神話に並々ならぬ興味を持ち、北歐の人と共に、北歐の勇者システムを研究していた。かなりの金銭も支援しているみたいだつた。

これはぼくも知っている。昔から父さんには神様を敬う気持ちを、特に北歐神様を敬う心を教えられてきたから。

その研究の成果が、先程ぼくに渡したスマホによく似たPDA——スマホでいいや——なのだという。

そして、ぼくには北歐の勇者適性があるらしい。

今、バーテックスという神の尖兵が人類を攻撃して来ているから、戦つて欲しいみたいだ。

ぼくは呆けていた。いきなりそんなこと言われても、どうすればいいか分からなかつたからだ。

武谷「母さんは……?」

口から漏れたのは、今ここにいない家族の心配だつた。

父「母さんは……もう」

もう。

もうって、なんだよ。

と。

ぼくの後ろの窓の方を見て、父さんが叫んだ。

父「武谷！」

ぼくは父さんに突き飛ばされた。

建物が壊れる大きな音と共に、ガラスが割れる音が聞こえた。

体を起こし、周囲を確認すると、窓や壁は破壊されていて、血だまりがあるのを見ける。

肉塊が転がっていた。

今さっきまでぼくの近くにいた人は、父さんしかいない。

つまりその血だまりと肉塊は、そういうことだ。

ぼくを庇って父さんは死んだ。

あとで知ったけど——北欧の勇者システムについて知っている人間はこの時点でもう存在しない。日本以外に人類はもういなくて、日本の父さん以外の研究者も全て殺されたらしいから。

だから唯一の北欧勇者関係の人というだけで、大社は丁重にぼくを扱っていた。ぼくも大社も北欧関係のことはほとんど何も知らないけれど。

突然の事態と肉親の死に、悲しみさえうまく受け止め切れずに、ぼくは固まっていた。白い化粧物、バーテックスが血で汚れた口をぼくへ向けて現れた。

ぼくは、ここで始めてグングニルを使った。北欧の主神オーディン様の力の一部、グングニル。一部だけでも主神ゆえその力は絶大。

こんな状況で、最初に思い浮かんだのは犬吠埼さんの顔だ。

今あの子はどうしている。

彼女だけは、助けたい。

誰かの為に命を掛けるなんて言われてもどうしていいか分からないけど、大切な人は守りたい。

ぼくはひた走った。

走って走って、我武者羅に進んだ先。

犬吠埼さんがいる場所を風潰しらみしにしようと思つて、最初に選んだ場所。

ぼくたちが通う学校の正門前に、犬吠埼さんはいた。

学校に逃げ込む途中のように見えた。

武谷「犬吠埼さん！」

ぼくは呼んで走り寄った。

水「武谷くん……！」

犬吠埼さんが振り返ってぼくを見た。

綺麗な水色の髪がふわりと翻って——
ぼくん。

——君のスカートの中が見たいんだ。

辛そうにピアノを弾く彼女を止めたくて言った言葉。無視され意味のなかった言葉。そのことを思い出す。

犬吠埼さんは、ぼくの目の前で喰われた。

喰われて、真つ二つに引き千切られた。

ぼくの眼前に、彼女の下半身が落ちてきたんだ。

その時の拍子にスカートがめくられて終ぞ見ること叶わなかった彼女のスカートの中が見えてぼくはおかしくって笑えて笑えて笑えてまったく笑ってなくて狂った

彼女は何も知ることなく、救われることなく死んでしまった。

犬吠埼さんは最後まで、笑ってはくれなかった。

それからは、よく覚えていない。

命からがら北欧勇者の力で生き残った。大切な人を誰も護れずに。見知らぬ人だけは助けられて。途中、若葉さんたちと合流したと思う。ぼくひとりだけではゲージが溜

まる待ち時間の内に殺されていただろう。

ぼくは何も守れなかった。護れなかった。目の前で死んだ。

だから。

だから、最初は、犬吠埼さんに似ている千景さんを助けたいと思った。何かしたいと思った。

今は、あの子の代わりなんかではないけれど。

——そして。

それらの記憶は、すべて消えた。

ミヨルニール。新しい力を得た代償の一つ。

辛いことも、大切だったあの子との思い出も。

消滅して、永遠に戻らない。

意識が覚醒する。ぼくは目を開けた。

最初に視界に入ったのは、千景さん。

杏さん、タマさん、友奈さん、若葉さん、ひなたさん、みんないる。杏さんとタマさんは体に包帯を巻いていた。タマさんの方が包帯の量が多い。

白い天井に壁、今いるここは病室だった。ぼくはベッドに寝ている。

千景「あ……！ 聖陵院くん、起きた……」

友奈「よかつた〜」

皆安堵の表情を見せた。

武谷「……ここは？」

ひなた「病院です。武谷さんが倒れた戦いから丸一日経ってますよ」

次の日になっていた。

確かに昨日樹海化したのが夕方だったのに今窓の外が明るい。

千景「それで、身体のどこかに異常はないの……？」

千景さんは心配そうな顔をしている。

武谷「ないよ」

ぼくは嘘を吐いた。

ぼくは、何かを忘れたのだから。

ひなた「確かに大社が調べた結果身体に異常はないようでしたが」

ひなたさんは懸念がありそうな様子だった。

武谷「どこも痛くないし、身体も普通に動かせるし、大丈夫だよ」

ぼくはさも平気と言ったように笑った。

杏「でも、倒れるほどの代償だったんですよね……？」

武谷「あの時は緊張が振り切れてたからね。実際動けるんだし問題ないよ」

武谷「それよりまた切り札を使ったみんなは異常とかないの？ 杏さんとタマさんは包帯してるけど」

球子「骨は折れたけどタマはピンピンしてるぞっ！」

杏「左腕を毒針が掠りましたけど、毒の浸食も止まっていますし、ちゃんと治療が施されましたので大丈夫です」

球子「少なくともタマたちは武谷みたいに気絶はしてないしな」

若葉「私と千景と友奈は、検査は昨日したが、かなり疲れていたこと以外は特に何もなかった」

武谷「そうか、良かった……」

千景「本当に、問題はないのね……？」

武谷「うん」

断言するように問投詞のみで頷いた。

千景「……そう」

球子「なら、今回の戦いはみんな無事で乗り切れたってわけだなっ！」

しめるように元気よく、タマさん。

杏「これで、みんなでお花見ができますね」

満面の笑顔で、杏さんはそう言った。

後日。

ぼくが自室に作った祭壇には、グングニルに見立てた槍の飾りと、ミヨルニールに見立てたハンマーの飾りが並んでいた。

武谷「北欧神様、感謝を」

ぼくは奇跡を賜ってくださったオーデイン様とトール様に感謝していた。

北欧神様が力を貸してくれたからこそ、ぼくはみんなを守れたのだから。

ぼくは、いつまでも祈り、感謝する。信仰を奉納し続ける。

数日後。

視界一面に、桜舞う。

ぼくたちは丸亀城付近に咲く桜群の只中にいた。

球子「花見だー！」

友奈「綺麗だねー！」

ひなた「お花見日和ですね」

若葉「ああ、いい天気だ」

杏「……………」

千景「……………」

杏さんは感極まったように、千景さんはただ無言で桜を見上げていた。

シートを敷いて、弁当を皆広げた。

若葉「ひなたの料理は、やっぱりうまいな」

ひなた「うふふ」

球子「あんずの卵焼きうまいな」

杏「ふふ」

千景「聖陵院くん、高嶋さん、食べてみて……」

千景さんが弁当をぼくと友奈さんに差し出す。

千景さんの手には絆創膏がいくつか貼られていた。

ぼくは千景さんの料理の腕を知らない。けど、その絆創膏を見るからに、元々上手くないのに頑張って作ってくれたということだろうか。

友奈「わー！ ぐんちゃん料理なんて初めて食べるよー」

ぼくと友奈さんはその弁当に箸を向かわせた。

武谷「うまい」

友奈「おいしー！」

千景「よかったわ……」

千景さんは安堵したように微笑んだ。

談笑しながら、桜を眺め、食事をする。

花見の醍醐味だ。

ぼくは桜の木を、舞い散る花びらを目を細めながら眺めた。

白鳥さんとも、お花見したかったな。

でも、ぼくにはみんなと一緒に戦い守るのが精一杯だった。

それでも足りなかった。何もかも足りなかったから、大事なものを差し出すしかなかった。けれど、護れる力を得たことで心は充実していた。

ぼくは幸福だ。普通の人なら、どれだけ望んでも、犠牲を払っても、特別な力を手に入れることはない。

けれどぼくは代償を負うだけで手に入っているのだから、幸運だ。みんなを守ることができのだから。

それで。

ぼくがみんなを守りたいと思っっている最初の理由は何だっけ……？

思い出せない。

代償で消えた記憶にあるのだろう。

でも、なぜか、守りたいと思うその考えだけは、感情だけは以前と変わらない。

記憶が消えても、感情までは消えないようだ。

実際、ぼくは千景さんたちのことは忘れていないし、好きだ。

変わるわけではない。

この先、もっと記憶が消えたとしても。

ならば、問題ない。問題ないと、思うことにした。

誰か、大切だった人を忘れたような気がするのは気のせいだろうか。

ぼくの心は充実し、今までの厭世的な心からは解放された。

でも、それだけはしこりのように残っていた。

ぼくは、誰を忘れたのだろう。

感情が残っているから記憶がなくてもそう思えるのだろうか、ぼくにそれほど大切だと思える人が千景さんたち以外に、本当にいたのだろうか。

千景「聖陵院くん……？」

千景さんが氣遣わしげにぼくを見ていた。

武谷「なに？」

千景「何で……泣いてるの？」

武谷「え……」

目元に手を当てた、指先が濡れた。

何も、悲しいことなど無いはずなのに。

ぼくは守る力を手に入れて、幸福だ。

本当は、矮小な一人間であるぼくでは叶わなかったことを叶えてくれたんだ。絶望で終わる普通を、普通じゃない結果にしてくれた。身に余る奇跡を与えて下さった北歐神様に感謝しなければ罰が当たってしまう。

涙を腕で乱暴に拭った。

武谷「……なんでもないよ。ただ嬉しかっただけさ」

千景「……そんなにお花見がしたかったの？」

武谷「うん、したかった」

千景「そう……」

千景「何か、あつたわけじゃないのね……？」

武谷「うん、ないよ」

ぼくは完璧に朗らかに笑った。

花見も終わりかけの頃。

若葉さんがぼくの所へ来た。

若葉「武谷、礼を言わせてもらおう」

武谷「え？　なんで礼？」

若葉「お前の必死な姿を見ていて、わかったよ。バーテックス共に報いを受けさせるのではなく、守るために戦うべきだな」

しみじみとそう口に出すと、若葉さんは去っていった。

武谷「……なんだったんだ？」

球子「武谷」

武谷「うわ、タマさん」

球子「うわとはなんだうわとは、タマだつて傷つくんだぞ」

武谷「ごめん、いきなり視界外から話しかけられたものだから」

若葉さんが離れて一瞬静かになった隙に突然声をかけられたんだ。少し驚く。

球子「それより、ありがとな」

武谷「……なんでタマさんまで礼を」

球子「タマまで？」

武谷「いや、こっちの話」

球子「タマはあの時、武谷がいなかったら杏を守れなかった……。だから、ありがとう」

その笑顔にぼくの心音が高鳴った。

武谷「なに弱気なこと言ってるんだよ。守りたいなら、守ってやってよ」

球子「うん、そうだな……。当然守る。タマはあんずを守りたい」

そして、ぼくはそんなみんなを守る。

桜を間近で見上げていると、杏さんが静々と隣に並んだ。

杏「武谷さん……」

服の袖が、杏さんになぜか掴まれた。

杏「正直、あの時、もうお花見はできないんじゃないかって思いました。このまま死んじゃうんだって、諦めかけました……。でも、今、お花見できています」

杏「みんな頑張つて、タマっち先輩が守ってくれて、武谷さんが助けてくれたからです」

杏「助けてくれて、ありがとうございます」
杏さんは華やかな笑顔をぼくに向けた。

14話 北欧の光輝くもの ヘグルヴェイグ・パーテッ クス

ぼくは自室のあるものを見つめた。

ミュージックプレイヤーだ。

衝動に駆られて、おもむろに手に取る。

入っている曲は、一曲だけだった。

何故一曲だけ入っているのか。

再生してみた。

ピアノ曲だ。

知らない曲だ。

有名な曲ですら少ししか知らないから断定はできないけど、この曲は多分、いくらネットでも検索しても出てこないのだろう。

だって、トラック名が”犬吠埼さんの曲”なのだから。

ご丁寧に書かれているのだから。誰だよ、それ。

何故か頬が濡れた。

ひなた「武谷さん」

ある日。

ひなたさんに呼び止められた。

武谷「なに？」

ひなた「お聞きしたいことがあります」

ひなたさんは神妙な顔つきだ。

ひなた「武谷さん、やっぱり前回の戦いから何かありましたか……？」

武谷「……何って、何？ 前に問題ないと言ったはずだけど」

ひなた「巫女として感じるものと言いますか、何かが変わってしまったような。他のみんなが切り札を使った時は何も感じ取れなかったのに、武谷さんのときは違ったんです」

武谷「……そんなの、わかるの？」

ひなた「ただの、感覚ですが、はい、武谷さんのは、神託のときに近いほど大きく感

じます」

ひなた「だから、何かあったのなら話していただけませんか」

ひなたさんは心配そうな顔をしている。

武谷「少し強い力を使って気を失ったけど、それだけだよ」

ひなたさんはしばらく何も言わずにぼくの顔を見た。

ひなた「そう、ですか……」

今度は寂しそうな、悲しそうな表情と声音だった。

胸が針で刺されたかのように痛んだ。

ひなた「頑ななんですね……」

武谷「何を言っているのか分からない」

君たちは、生きなければならぬ。

ひなた viewer

私は自分の部屋にみんなを呼びました。

武谷さんを除いた五人をです。

球子「どうしてわざわざここに呼んだんだ？」

ひなた「武谷さんには聞かれたくない話だからです。ここなら、教室よりも、校舎裏よりも、聞かれる確率は低いでしょう」

球子「むしろ聞いてたら覗きレベルだな」

千景「それで、どんな話なの……？」

私は居住まいを正します。

ひなた「武谷さんが前回の戦いから、何かが変わったんです。それも恐らく、よくない方に。巫女で感覚でわかったんですけど、武谷さんに訊いてみて、彼の様子を見た限りだと何かがあると思うんです」

若葉「武谷は何も言わなかったのか？」

ひなた「はい、暖簾のれんに腕押しで絶対に話してくれなさそうな様子だったので、みんなに話したというわけです」

若葉「また、あいっは……意図的ではないにしろ教えてもらったばかりなのだがな、これでは格好がつかないぞ」

球子「世話が焼けるな武谷は。でも、助けられたからな」

杏「武谷さんを、何とかしてあげたいです」

若葉ちゃんと球子さんと杏さんは、優しく強い光を瞳に湛えていました。

杏「何かが変わったというのは、もっと具体的にはわからないんですか……？」

ひなた「それは、わかりません。巫女としての感覚とはいえ、曖昧ですから」

友奈「外見上は、普通に元気そうだよね」

ひなた「そうですね、だからすぐにはわからなかったんですが」

千景「聖陵院くん……」

友奈「ぐんちゃんそんな顔しないで。みんながいるんだって、たけくんにいっぱいわかってもらえれば大丈夫！ みんなで頑張ればどうにかなるよ」

ひなた「そうですね、気にかけてあげて下さい。すでに気にかけているかもしれないですが、もつとです。なんだか、嫌な予感がするんです」

嫌な予感。自分で言っておいて、凶兆を助長させてしまったような気がして不安が一つ心に落とされました。

m a i n v i e w e r

杏さんやタマさんの怪我も落ち着き、タマさんの旋刃盤も修理された頃。

大社から、結界の外の瀬戸内海上で形成されつつある進化体パーテックスを討て、という任務が言い渡された。

五人は変身して、ぼくたちは結界の間近、瀬戸大橋の上に立つ。パーテックスの姿は

見えない。

友奈「こういう任務って珍しいね。今までは四国に入ってきた敵を倒せただけだったのに」

若葉「そうだな。大社の方針が変わったのか……」

杏「妙ですね……」

球子「立ち止まってもしょうがない。それじゃあ行くか」

千景「……………」

武谷「とつとと倒して帰ろう」

結界、日常と非日常の境界線を、ぼくたちは跨いだ。

眩しい。それが結界外に出て最初に思ったことだった。

若葉「なんだ……………」

眩い光が辺りを照らしている。

その光に照らされて、サソリ型バーテックスのよりも巨大な、超巨大なバーテックスが形成されていた。

大量のバーテックスが寄り集まり、融合し、少しずつ、完成に近づいている。

太陽のような円環に牙のようなものが生えた巨大な無機物、そんな姿形。

感じる、あれは強大だ。

球子「でつかいのが……」

杏「二体……」

二体。

ぼくは視線を強い光の方に向けた。

牙のようなものが生えた巨大パーテックスを照らす光。

その光自身も、同程度の体躯の巨大な化け物だった。

巨大な、洗練された女神像のような無機物、そんな印象。

段々と、少しずつ、パーテックスが融合して、完成に近づいている。

当然あれも、強大だ。

若葉「みんな、行くぞ」

殺さなければ。

スマホの画面に指を添え、中心の黄金色の魔方陣を上にはスワイプ。上に存在する歯車型の魔方陣と噛み合い、高速回転、綺麗な音色、数十メートルはある巨大な魔方陣が目の前に展開される。その中心から槍の穂先が迫り出す。

武谷「『グングニル』」

紡いだ詠唱は現象を起こす力と成る。

北欧の主神オーディンの力、黄金の聖槍が顕現。

放たれる。

轟音。

轟雷。

疾く雷を撒き散らしながら、黄金の聖槍は光り輝くバーテックスへと。

光輝、一閃。

発されている光が、歪曲、変質、したように見えた刹那の事だ。

光の斬撃が、黄金の槍に命中した。

訳が分からなくなるほどの光の明滅と耳を劈く音。

収まった時。

グングニルは、撃ち落とされていた。

強力無比の槍が、消滅したんだ。

武谷「——は？」

今までこの槍は、全てのバーテックスを破壊してきた。

この力は敵を消す手段なんだ。斃せなければおかしい。

斃せなければ、ただの意味のない現象に過ぎない。

だからこんな結果は認めない。

認められるか。

杏「そんな……」

球子「マジかよ」

千景「黄金の槍が効かない敵なんて……」

友奈「みんなで戦えば、なんとかなる！」

若葉「そうだ！ 行くぞ！」

切り札が発動された。それぞれ源義経、一目連、輸入道、七人岬、雪女郎の力を身に宿す。

生太刀を携えた若葉さんは、通常個体パーテックスを足場にして八艘飛びを繰り返して、目で追うことすらできない速さと成りて、光り輝くパーテックスを何度も斬り付け、斬り降ろし、斬り上げ、斬り払う。何百という斬撃。

しかし、掠り傷程度の傷しか負わせられなかった。

パーテックスは微動だにしない。まるで脅威に感じていないように。

一目連の力、竜巻の暴風をその腕に纏わせた友奈さんも、光り輝くパーテックスに何度も拳を打ちつける。

しかしこれも、ほとんど傷を与えられない。

七人の千景さんが七つの大鎌で七の斬撃を回転を加え放つ。

パーテックスに傷はない。

タマさんが巨大に成った旋刃盤を投擲、刃が回転し炎を身に纏わせて旋刃盤が光輝くバーテックスに襲い掛かる。

ほとんど傷はない。

クロスボウから放たれた吹雪が凍結を為さんと命中。

ダメージ軽微。

若葉「それなら、こいつの方はどうだ！」

若葉さんが標的を太陽のような円環に牙のようなものが生えたバーテックスへと変更した。

皆攻撃を加えるが、こちらのバーテックスもほとんど傷を負わない。

若葉「くっ……!!」

球子「硬すぎだろっ！」

さつき、グングルは光るバーテックスの攻撃に相殺された。つまり、当たれば危険だから防いだということ。

なら、詰みではない。

杏「ここは撤退した方が……」

武谷「いや」

武谷「まだだよ」

グングニルの再発動はゲージがまだ溜まっていないから無理だ。けれど新しい力であるミヨルニールの力とグングニルの力は別、ゲージも別になっている。だからミヨルニールなら今すぐにでも撃てる。

これをどうにか防がせないで命中させることができれば、あの化け物を倒せるはずだ。

武谷「サソリ型を倒したやつを使う。接近しないと当たらないからぼくをあいつの近くまで運んでほしい」

より危険そうに見える光っている奴をぼくは指差した。攻撃を見たのがまだあいつだけだからそう思っているだけかもしれないが、少なくともあの光輝くパーテックスはグングニルを落とせるほどの力を持っているのは確定だ。倒せるのなら優先的に倒すべきだと思う。

奴が攻撃してきたらぼくの身体能力では避けられない。だからみんなに運んでもらうのが安全だろう。

杏「確かに、今できる中では一番可能性が高い手かもしれないですね」

若葉「よし、ではすぐに行動に移すぞ」

千景「聖陵院くんは、私が運ぶわ……」

七人いる内、一人の千景さんが前みたいにぼくを抱える。

そして、跳んだ。

風を感じながら、どんだん光へと近づいていく。

若葉さんたちが牙を持つ巨大バーテックスを攻撃して注意を引き付けてくれている。

通常バーテックスも襲いかかって来るが、これも対処してくれる。

だが光り輝くバーテックスも、牙を持つバーテックスも、攻撃してこない。不気味に

佇むだけだった。

薄ら寒いものを感じながらも、接近する。

射程範囲内だ。

ごちゃごちゃ考えてても仕方がない、斃してしまえばそれまでだ。

スマホの画面を左にフリックしてグングニルの画面からミヨルニールの画面にする。

中央の白い魔方陣を下にスワイプして画面下の歯車型魔方陣と噛み合わせる。

魔方陣が高速回転、綺麗な音色を発した。

純白の巨大魔方陣が光り輝くバーテックスの頭上に展開される。

武谷『『ミヨルニール』』

詠唱。事象の発現。北欧神トールの力が此処こゝに顕現。

轟音。

轟雷。

白雷纏う純白のハンマーが振り下ろされる。

必中必殺の雷槌は、狙い違わず光り輝くパーテックスに命中。劈く破砕音と共に、一撃で粉々と化す光り輝くパーテックス。

眩しく光っていた光は、それで消失した。

一瞬、光が消失した。

だが。

瞬きの後には、一瞬で無傷の状態の光り輝くものが其処そこにいた。

確かに、斃したはずだというのに。

ミヨルニールは、一を必ず殺す力だ。

だから、殺したのは確実だ。

されど、眩い、全てを照らし尽くしてしまいそうな光が健在なことも、現実だった。

何が、起きた。

確実に斃したのに、存在する。

——復活。そんな二文字が頭を過ぎる。

光が、強く瞬いた。

輝いている光が、変質する。

光輝一閃。

光の刃が、迫る。間近。
死ぬ。

千景さんがぼくを投げた。

ぼくの体は急速度で飛び、風とGに襲われる。

ぼくを投げた千景さんは、光の刃に晒され、瞬時に消滅。そのまま光の刃は地面を断裂させた。大きく地割れのように亀裂が大地に走る。

地響き。光の拡散。裂断、切断はどこまでも。

視界に収められる範囲を超えて、地は別たれていた。

背筋が氷柱を何本も次々と入れられたように凍った。

怖気が奔る。

奴らの攻撃は、ここまで強力になれるのか。

別の千景さんが、ぼくを受け止めた。

千景「聖陵院くん、怪我はない……?」

武谷「う、うん」

千景さんは心配の声をかけながらも光り輝くパーテックスから持てる速度の最速で
急ぎ距離を取っていく。

ゲージは両方とも溜まっていない。溜まるまで待つ時間はない。代償を払いさえす

ればぼくには力が。

もつと、力を――

失つてもいいから、敵を、大切な人たちを脅かす敵を殺す力を。

千景「駄目!!」

突然、千景さんが声を張り上げた。

千景「……駄目よ、聖陵院くん」

千景「駄目、だから……」

沈痛な表情。

何が、駄目だというのだろう。

――と。

円環に牙を生やす巨大パーテックスが、動いた。

攻撃を仕掛けていた、一番近くにいた杏さん、友奈さん、球子さんの方向へ、ゆっくりと体を動かす。

円環の中心辺りから、凄まじく巨大な火炎球が発射された。

杏「避けて!」

友奈「わわっ!?!」

球子「やばっ!」

三人がなんとか跳んで避ける。

そして炎の塊は瀬戸内海を越え、本州の陸地に着弾。激しい轟音と衝撃波がぼくたちのある場所まで伝わってきた。

全てを焼き尽くす業炎により、大地が根こそぎ焦土と化す。

マグマが沸き立ち、着弾した一帯を地獄に変貌させた。

光の刃や火炎球が、もし神樹に向けて放たれたら、防ぐ術はぼくの方力ぐらいしかないだろう。

この二体は、まだ完成していない。

完成していないのに、既にこれほどの力を持っている。

完成したら、斃せるのか甚だ疑わしい。はなは

いや、斃すんだ。なにをしても。

若葉「逃げるぞ。退却だ！」

若葉さんが、なぜかぼくを見てそう伝えた。

みんな返事して、結界内へと遁走する。とんぞう

千景「聖陵院くん……駄目だから……」

ぼくは、斃すまで戦うべきだと思った。反対したかった。でも。

千景さんの表情が誰かに似ているような気がして、ぼくの体を縋るように強く抱え込

んだ千景さんの様子があまりにも弱々しくて、何も言えなかった。

放心したまま、ぼくは千景さんに運ばれて行った。

今の段階では、結界の外の大型バーテックスを倒す方法がない。大型バーテックスは体の形成を優先していて、四国へ攻めてくる気配はないため、敵が完成体に成る前にか対策を立てようという結論を大社は出した。

行き詰った現状を打破する方法は、全く見つからなかった。

——というのがぼく以外の者の認識だ。

ぼくが代償を払いさえすれば、たとえあれらが完成しても斃せると思うのだけど。

まあ、奴らが来た時に斃せばいい。

15話 北欧の世界蛇 ヨルムンガンド・バーテックス

千景「聖陵院くん……きて……」

ある日、そう言った千景さんに袖を引っ張られて着いた場所、訓練場。

千景「聖陵院くん、そこで見てて……」

千景さんは鍛錬をしだした。

ぼくは傍らに腰を下ろす。

断る理由もなかったし、ぼくは千景さんに幾らでも頼っていいと以前言ったから。

千景さんは大鎌——大葉刈を振るう。

振り薙ぎ、振り下ろし、振り上げ、また振り下ろし、袈裟掛け、斬り返し、逆袈裟、また斬り返し。

なぜぼくに見てもらおうと考えたのか。

誰かに見ててもらった方が鍛錬がはかどるからだろうか。

千景さんは、一生懸命に強くなろうとしていた。

強さを、表していた。

まるで、それを見てもらいたかったかのように。

そうして。

あくる日。

その日も千景さんの鍛錬を近くで見ていた時。

樹海化警報が、鳴った。

世界は押し寄せる光に包まれ、神樹の創り出す結界、樹海と化す。

傍らにいた千景さんはすぐに変身して深紅の装束へと成った。

変身した他のみんなも合流してくる。

若葉「敵もかなり強くなってきた。気を引き締めろ。だが、無理はするな」

球子「最近色々危なかったからな」

杏「慎重に、冷静にいきましょう」

友奈「そうしてみんなで協力すれば絶対に勝てる！」

千景「聖陵院くん、私だって、強いから、ちゃんと見てて……」

千景さんが、ぼくを見て言った。

見てと言うのなら。見よう。

ちゃんと見てる。そして危なくなったら守る。

視界の向こうから、バーテックスの大群が押し寄せてくるのが見えた。通常バーテックスに、火や氷を宿したバーテックスもいる。

杏「グングニルともう一つの力はまだ温存しておいた方がいいでしょう」
ぼくは頷いた。

皆が飛び立って、バーテックスの大群へと往く。

いつもどおり、若葉さん、千景さん、友奈さんは前衛、タマさんは中衛、杏さんは後衛だ。

二つの群がかち合い、斬撃と大口を開けた飛び掛かりと拳と矢が飛び交いバーテックスを倒していく。

——あれ。

なんか。

多分。

恐らく。

絶対。

確実。

全てのバーテックスが、ぼくを狙っていた。

一斉に、大量のバーテックスがぼくへ向けて一直線に向かってくる。

警戒、されているのか。

今までも優先的に狙われたことはあった。

けれどここまで露骨に、絶対的に殺す意思を以って全力で来られたのは初めてだった。

つまり、そこまで警戒されている。

千景「聖陵院くんは、私が守る……！」

千景さんが吼え、ぼくに迫るバーテックスを真つ二つにした。

皆の奮闘により、バーテックスが減つてくると、バーテックスが幾つもの箇所グループを作るように寄り集まり出した。

点在する星のように散らばったグループは、融合を始める。直ぐに進化体バーテックスが完成する。

攻撃して形成を止める間もなかった。

以前にも見たことのある進化体、巨大な蛇のような姿のもの。大量の、蛇。それらが、火や氷を宿している。

確か、前のときは体が切断されても分裂していた奴だ。

杏「まだ、これくらいなら、私たちでも倒せます」

千景「私たちは、強いわ……！」

彼女たちの言う通り、みんなはこいつら程度なら倒せる強さを持っている。

より強い敵がまだ出てくるかもしれないから、力を温存しておいた方がいいというのは分かる。

だから今は使わない。

けれどもしもということもある。いつでも使えるように準備はしておく。スマホの画面に指は添えたままだ。

進化体を倒す為に、みんなは切り札を使い精霊の力を身に宿した。

みんなが切り札を使うのが、もう普通になってしまっている。

いつ、何の影響が出てくるのか不安だ。

でも、使うなどとも言えない。使わなければ死ぬ可能性がある。ぼくが倒せばいいのかもしれないが、この先の敵の出方次第で今使うのが下策になる可能性もある。

とにかく、今はごちゃごちゃと考えても仕方ない、みんなが戦うのを見守ろう。

ぼくはみんなが死なないようにしてやればいい。

燃える旋刃盤が蛇を分裂させることなく跡形も無く焼き尽くす。吹雪が凍りつかせる。竜巻を宿した拳が分裂体を巻き込んで消し飛ばす。刀による凄まじい速さの斬撃が分裂できないほど細切れにする。七つの大鎌が同時攻撃で分裂させる間もなく命を割断した。

火が舞い、氷が吹き荒れ、凶悪な咬み付きが勇者を襲う。

危なげなく避け、危なげに避け、反撃の攻撃を放つ。

物量の咬み付き、避ける、防ぐ、怪我は、無い。

もどかしい。本当に危ないように見えたら撃とう。

けれど一度もぼくは力を使うことなく、蛇型のパーテックスは数を減らしていった。そして。

蛇のような姿をした進化体は、すべて倒され、いなくなつた。

ここには、ぼくたち勇者しかない。はずだ。

球子「終わった、か？」

杏「敵は、いません、ね……」

若葉「いや、警戒は怠るな」

友奈「まだ、戦えるよ」

千景「……………」

されど、樹海化は、未だ解けなかつた。

——地の底から響くような音。

それは、すぐには何か分からなかつた。

ただ、何かがうねっているということしか、理解できなかった。
千景「……………え？」

気がつけばそこにあつた巨大。

見上げる、首が痛くなるほど見上げて、ようやく全容を掴む。

蛇。それは巨大な蛇だった。

結界外にいた太陽のような円環に牙のようなものが生えたバーテックスよりも、光り輝く女神像のようなバーテックスよりも、以前倒した巨人バーテックスよりも、それこそ先程まで跋扈はっこしていた蛇型バーテックスとの差など天と地ほどもある、超巨大な、大ききさというものを考えることすら無駄に思えるほど途方もなく巨大な、世界樹のような蛇。

それが、今そこにいるバーテックスだった。

遠方から来るバーテックス、それはもう怪獣とすらいえた。

奴は迫る。うねる。

杏「……………ひ」

球子「や、やばくないか」

若葉「倒せないわけじゃないはずだ……………」

友奈「デカいだけだよきつと……………」

千景さんは、ぼくを見ていた。

心配そうに、不安そうに。

けれどそれは、この状況を何とかしてほしい、助けてほしい、みたいな視線ではなかつた。

ビル一つを丸呑みできそうな大口が、開かれた。大きく大きく、開口される。

脳内。感覚。

警鐘。

警笛。

ガンガンガンガンガン!!!

鳴らされる。

叩き鳴らされ荒れ狂う。

やばい。

今からやばいことが起きる。

冷や汗が体から排出された。冷たい。

千景「あ……………」

世界樹のような蛇の口から、大量の液体が流れ出てきた。

それは滝の如く、瀑布ばくふのような量。

濃い紫色だ。

正に滝の音を響かせながら、津波、洪水と化する。

蛇の形をしたものが吐き出す紫色の液体。毒、そんな一文字が頭に強く浮かんだ。あれは絶対に危険だと判断する。

飲み込むどころか、触れただけで死に至りそうな雰囲気露わにしている。いや、確実に死ぬだろう。

——ああ、考えるまでもなかった。現在進行形で毒液に浸された樹海の根が一瞬で腐り落ちた。

広範囲に渡って、樹海が腐敗していく。

かつてないほどのダメージを樹海は受けていた。

杏「そんな……」

目の前で迫り来る毒液の津波。

どう考えても避けられない。

後ろにも横にも前にも下にも退路はない。上に逃げる時間は既に逸いされている。

ほか以外にこの津波を防げる手段を持ち得る者がいない。そして防ぐことができなければ、一瞬にして死ぬ。

ならば方法は、ひとつしかない。

即座にスマホの画面中心に存在する魔方陣をスワイプ、詠唱を口にした。

武谷 『『グングニル』』

雷纏う黄金槍が射出される。

轟音。

轟雷。

黄金の槍は真つ直ぐ毒液の津波へと突き進み、穿つ。

毒を全て超常の雷で焼き尽くした。

されど世界樹のような蛇は健在だ。膨大な量の毒液を消滅させるのにグングニルのリソースを全て割かれた結果、奴に傷を負わせる事すら出来なかった。

危険すぎる。こいつは確実に直ぐに殺さなければ。

このパーテックスは、超が付くほどの巨体だ。

巨体だということは、面積が広い。

面積が広いということは、この樹海内で奴とぼくたちの距離はそう離れていない。

だから、ほんの少しぼくが前に足を踏み出すだけで、この力の射程範囲内に入る。

それが、巨大すぎるが故の奴の弱点だ。

フリックして変更したスマホの画面中央に存在する白い魔方陣を下にスワイプ。高速回転、綺麗な音色、巨大な魔方陣が、世界樹のような蛇パーテックスの頭上に展開さ

れる。詠唱した。

武谷 『『ミヨルニール』』

轟音。

轟雷。

一を必殺する純白の雷槌が、パーテックスの頭上から振り下ろされる。

命中すると、世界樹のような蛇パーテックスの体はいともたやすく破壊された。

陶器が割れるように、粉々に崩れていく。

殺した。

確信する。

——なのに。

どうしてだ。

目を疑う光景。

奴の体は割れた、けれど、液体の入った壺が割れたように、その内側から、奴の超巨体と同じ質量なのではないかと思えるほどの、毒液が溢れた。

潰れた体から、先の倍。巨体全てに毒液が詰まっていたのではないかと思える量の毒液が弾け溢れた。

押し寄せる毒の洪水。

また樹海が腐り落ち、甚大な被害を受けている。

グングニルの再使用時間もミョルニールのゲージも溜まっていない。

死ぬ。

いや死なない。

今持っている力で対処する術はない。前までだったら、ここで詰みだったろう。

けれど。今は。

——代償を払います。だから、力を下さい。

ぼくは北欧神様に祈った。願った。頼んだ。

そうして祈りは届き、願いが叶えられる。

グングニルのゲージが、刹那の間に満タンになった。

ああ、ぼくは幸福だ。なんて幸福なんだ。みんなを守る。守れるんだ。

武谷「感謝を……」

北欧神様、身に余る奇跡をありがとうございます。

ぼくは嬉々としてスマホの画面をスワイプした。魔方陣高速回転。綺麗な音色。巨

大な黄金色の魔方陣展開。

詠唱。

武谷 『グングニル』

轟音。

轟雷。

北欧の最高神オーディンの力、黄金の槍グングニル。

巨大魔方陣の中央から射出されたその力は、雷を広範囲に撒き散らし、全ての毒を消し飛ばす。

世界樹のような蛇バーテックスの巨体は既に破壊済み、毒も完全に消滅している。敵は見えない。もういない。ぼくが殺したから。

勝った。

ぼくはわらった。

頭が痛い。

殴られたような痛み。

ズキンズキンズキン。

痛い痛い痛い！

頭の中で列車が走っているかのようだ。

視界がチカチカする。

——プツン。

ぼくは倒れた。

千景 「聖陵院くん……っ！」

走り寄る音。

千景 「また……私が、弱いから……」

悲しげな声が聞こえた。

16話 感情に導かれて

千景 viewer

今日、朝のニュースでやっていた。大地が腐敗して、作物が育たなくなってしまう土地ができたらしい。巨大地震も起きて、数十人ものが死者が出たのだという。

どちらも、あのバーテックスの毒液の影響だった。

この四国は神樹様の恵みによって成り立っている。作物が育つ栄養もそうだ。それがうまく供給できなくなるほど樹海は被害を負ってしまった。あの量の毒液が触れたのだから当然だ。

ここは大社の管理する病院。その中の個室。

聖陵院くんは白いベッドの上で、安らかな顔で眠っている。

その傍らに、私と高嶋さんはパイプ椅子を広げて座っていた。

千景「聖陵院くん、笑っているわね……」

友奈「楽しい夢でも見てるのかな」

千景「こっちは心配してるのに……いいご身分ね……」

思わず悪態を吐いてしまったけど、本当に怒っているわけではない。

仕方のないことだと、わかっているから。

ただ、悲しくて、遣る瀬無かった。

聖陵院くんの頬を撫でる。

意外と柔らかい、人の体温を感じる、生きている証拠。

聖陵院くんを見てみると、いつも暖かい気持ちになった。

でも今は、寂しさと悲しさと不安も、湧き出てくる。

千景「……高嶋さん……相談、していいかしら……」

友奈「いいよ。いつでも、なんでも言っつて」

高嶋さんは即答してくれた。

その顔は、女神のような微笑みを湛えている。

私は、ゆっくりと口を開いた。

千景「今回の戦い、聖陵院くんがどうにかしなかったら、みんな死んでしまっていたのは分かる……でも、わかるからこそ、どうしようもなくて……力を使わないでなんて、とても言えなくて……」

滔々と、けれど訥々と、言葉が漏れていく。

千景「私には、聖陵院くんを助けられない……。なんとかしてあげたいのに、弱くて、何もできない……」

思わず高嶋さんを縋るように見てしまう。高嶋さんは微笑んだまま私を見て、静かに聴いてくれている。

千景「高嶋さん、どうしよう……。聖陵院くんが、遠くに行つてしまいそうで、怖い……」

そう、怖い。聖陵院くんが好きで、だからこそ、暖かくて、怖い。

いつの間にか、体が震えていた。

抑えようと右手で左手を強くつかんだ、震えは一切衰えない。

友奈「ぐんちゃん……」

ぬくもり。

高嶋さんが、私を抱きしめていた。

高嶋さんに抱きしめられたのは初めてだ。

不思議な感覚。暖かくて、柔らかくて、いい匂い。

震えが、少しずつ収まっていく。

私は無意識に、高嶋さんの背に腕を回して抱きついていった。

友奈「だったら、強くなろう。もつともつと強くなつて、たけくに無理させないよ

うにしよう」

千景「それは今までも……そうしてきたわ……でも、無理だった。すぐに強くなんなれない……強くなれたとしても、聖陵院くんがどうにかなくなってしまいうままでに、きつと間に合わないわ……」

友奈「それは一人だったからだよ。一緒に頑張ろう。みんなが強くなればいいんだよ。そしてたけくんを守る。私たちで守るんだよ」

高嶋さんは力強く笑った。

友奈「だから、私が一緒だから大丈夫だよ、ぐんちゃん」

その言葉には強い意志がこもっていた。自分だけでも必ず守るという意思が込められているような気がした。

だったら、私も一緒に、頑張る。

高嶋さんと一緒なら、頑張れる、恐くない。

友奈「そうと決まれば、みんなにも話してみよう。きつと協力してくれるよ」

高嶋さんが端末で呼びかけて、乃木さんと伊予島さんと土居さんと呼んだ。

みんなにも同じ話をする。

若葉「当然だ。強くなって、わからず屋を守ろう」

杏「武谷さんを、助けたいです」

球子「タマに任せタマえ」

みんなと一緒に鍛錬するために、訓練場にすぐ向かった。

いつもよりハードに、鍛錬をする。

実戦形式で、みんなで武器を持ち戦った。

結局都合のいい解決策なんてない。だから一緒に頑張る。強くなれるところまで強くなる。

強くなるために行動を起こして、戦う。それしかない。

でも、一人じゃない。

不安を掻き消すように、高嶋さんたちと武器を振るった。

m a i n v i e w e r

暖かい。

意識の奥底、夢の中で、暖かいものを見た。

ガヤガヤ、ガヤガヤ。仲間との団欒。だんらん

みんなと過ごした日々は、とても、とても暖かくて。

そして――

目を覚ます。

真つ白な天井。

しばしばーつとする。

やがて思考力が戻ってきた。

今度は、何を忘れた……？

忘れたくないことを思い起こす。

千景さん、友奈さん、杏さん、タマさん、若葉さん、ひなたさん、みんなのことは、しつ

かり覚えている。

白鳥さんのことも、忘れていない。

………うん。大丈夫だ。

まだ、大丈夫だ。

大切はここにある。

失われていない。

病室にはぼくだけがいた。

酷く静かだ。

とりあえず体を起こす。

武谷「……っ」

頭がふらついた。

視界が一瞬ぼやける。

けど、それだけだ。

ベッドから立ち上がる。

立ち眩み。

転びそうになった。

足を前に踏み出し、バランスを取る。

転んではない。

武谷「……………」

まあ、問題ない。

数日後、また樹海化が起きる。

なんかやべー奴が来たからぼくが殺した。

次も、みんなが死にそうになったから一瞬で敵を殺した。

その次も敵が強かったからぼくが殺した。

そのまた次もやばかったから殺した。

なんかあれだったからころした。

やべーなどおもってころした。

なんか、ころした。

千景viewer

結局、今できることをするしかない。

高嶋さんのおかげで吹っ切れて、みんなで頑張った。

けど、それだけで、必ず解決する訳じゃない。

ここ最近の敵はいつも強大で、圧倒的な力を持っていた。私たちの切り札でも倒せない敵ばかり。

だから、聖陵院くんが倒すしかなかった。

何度も何度も、聖陵院くんは倒れた。毎回戦いが終わると、意識を失い、病院に入院する。

私は無力感に何度も苛まれた。だけど、できることをするしかない。頑張る、戦う、強くなる、届かない。高嶋さんが励ましてくれる。少し元気が出て、また頑張れる。

何度も倒れるなんて、普通じゃない。なのに、聖陵院くんは倒れてから目が覚めると、いつもと変わらなかった。

元気に話すし、健康に動く、いえ、少しふらついてるような気もする、だるそうな動きにも見える、でも、それ以外、外見上は、異常は見られなかった。

私たちも切り札を使うとかなり疲れる、だから動きがぎこちないのは、それと同じだと思った。

私は、この期に及んで、まだ楽観していたのかもしいない。

世界は優しくないんだって、前から知っていたはずなのに。

聖陵院くんのせいで、聖陵院くんのおかげで、忘れていた。

main viewer

気がついたらベッドの上だった。ぼくは、何をしていたんだっけ。

大切なものを思い出そうとする、毎回、こうして起きた時にそうしていたような気がする。

親しい人——知り合い——

思い起こそうと時間をかける。

時間をかけている時点で覚えていないことを悟った。

ぼくの大切な人たちって、誰だっけ。

そもそもそんな人がいるのかな。

覚えていないから、わからない。

ならぼくは、どうやって生きてきたんだっけ。

武谷「……………」

ぼくは、なんだ。

……………。

なんか体も節々痛いし、動かしにくい。

でも、こんな弱つているところを、誰にも見られてはいけなような気がする。

見られたら、困るような気がする。

とりあえず、情報を、集めよう。

近くにあるものから。

といつても、この病室にはほとんど目ぼしいものはない。そもそもこの病室が、病院がどこなのかも覚えていないが。

それでも少しでも情報を得られないかと、ここにあるものを一つ一つ確認していく。

ぼくの座っているベッド、畳まれているパイプ椅子、棚。

その棚の上に、携帯端末が置かれていた。

誰かが忘れていったものでなければ、多分ぼくのだろう。

手に取り、^た矯めつ^{すが}眇めつ見る。

端末の裏側に、小さな写真、プリントシールが一枚貼られていた。

そこには、ぼくと、二人の女の子が写っていた。

真ん中に、ぼくと赤毛を小さくポニーテールにした女の子の腕を握って、笑顔を浮かべている黒髪の女の子、左右に満面の笑みの赤毛の子と、戸惑い一つも嬉しげなぼくが写っていた。

幸せそうな写真だ。

——でも。

この二人、誰だよ。

酷く悲しくなった。

複雑な感情が胸の中で渦を巻く。
覚えて、いないのに。

退院した翌日、ぼくは寮から出て、丸亀城の教室へ向かう。
普段の生活に必要なことは、幸い覚えていた。

逆に、それぐらいいしかほとんどわからないけれど。
歩く、歩く、教室へ向けて。

せめて気だけは強く、明るく行こう、と、顔を上げた。
丸亀城を視界に捉える。

なんか、変な光の霽もやみみたいなものが見える。
もや。

もやもや。

もやもや。

もやもやもやもや。

混濁。

頭が痛い。

頭を振った。

痛いまま、変わらない。

わからない。

ぼくは。

ぼくは、どうなっている？

教室に着いた。

ガラリとドアをスライドし、中に入る。

教室内には、すでに六人の女の子がいた。プリントシールに写っていた二人の女の子もいる。

武谷「おはよう」

みんな、ぼくの挨拶に返してくれた。

黒髪の子がぼくを見ていた。事前に名前は調べてある、郡千景さんだ。

千景「聖陵院くん……体に異常はない……？」

心配そうな表情で問いかけてきた。

ぼくは、みんなが誰なのかは覚えていない。でも、感情は違った。

ぼくにとって、この子たちは大切な人だ。

記憶はないけれど、確信できる。

だから、この女の子たちには、記憶があるように振る舞わなければならないような気がした。

武谷「問題ないよ、郡さん」

千景「? ……?」

郡さんは、言われた意味がわからないといったように、戸惑いと混乱を露わにした。ああ、そういうことか。今の反応は、ぼくとこの子は結構仲が良かったということだろう。

だから郡さんなんて呼ばれて戸惑った。
なら。

武谷「ごめん、変な呼び方して。冗談だよ千景」

千景「……!?!」

「!?!?!?!」

千景も、他の五人も一齐に驚きの顔をしてぼくに振り向いた。

武谷「あれ? だめだった……?」

名前呼び捨ては、違ったか……?

早計な判断だったかもしれない。

冷や汗が垂れる。

千景「いえ……だめじゃ、ないけど……」

千景は、顔を真っ赤にして俯きながら、小さくそう言った。

だめじゃない？ なら、なんでみんなこんな反応なんだ。呼び方じゃないのか……？
わからない。

その日は、普通に授業を受けて鍛錬をして過ごした。千景たち五人の勇者は熱心に鍛錬をしていた。

数日後、樹海化が起こる。

スマホを携え、ぼくは、戦いに臨む。

無機物のような化け物。

この化け物共と戦っていたのは、なんとなく覚えてる。

戦い方も、しっかりと覚えている。

ふと、思う。

どこかで冷静になって、一瞬思ってしまう。

ぼくはなんで、こんな見ず知らずの少女たちと一緒に戦っているのだろう。なんで、こんなに怖い、いつ死ぬかもわからない戦いに駆り出されているのだろう。なんで、守らなければならないのだろう、と。

でも、不思議と止めようとは思えなかった。感情だけが、ただ在った。代償を払うことも、守るために全てを賭けることにも躊躇いの感情は湧かなかつた。

ぼくには記憶がない、だからただ感情を信じて前に突き進むしかなかつた。

それに強い充足感も幸福感も覚えた。

一つの感情だけは、今も強く熱く灯ったまま。

今のぼくは、感情だけで動いている。

この感情だけが、今のぼくのすべてだ。

17話 代償の結果

千景viewer

なんだか胸の奥に何かが凝こっているような。むかむかする。

もう朝、窓から日が差している。

時計を見ると、もう起きなければならぬ時間、教室に行かなくては。

でも、体を起こす気力が湧かなかった。

指一本動かすのも、面倒。

なんでこんなにやる気が出ないのだろう。

悩みでもあるからかしら。

悩みってなんだろう。

聖陵院くんのことだ。

聖陵院くんが何度も倒れるから。

でも、その後はいつも何事もなく日常に溶け込んで。

でも、何度も倒れているのだから、何もないはずがないのではないかって、不安になっ

て。

聖陵院くんは、なんであんなに平気そうな顔をしていられるのかしら……。

……………。

なぜか。

沸々と、怒りが、湧き上がってくる。

暗い感情が、理不尽に増幅されていく。

千景「聖陵院くん……」

『聖陵院くんを、守らなければ』

顔を上げると、私と全く同じ顔をした人間がいた。

これは夢なのかしら、と思いつつ、疑問を掘り下げる気にはなれなかった。

私の姿をした目の前の存在は、口を三日月型に吊り上げ、作り物のような笑みを浮かべる。

『聖陵院くんを、守るのよ』

さつきまでの気力の無さが嘘のように、私は跳び起きた。

m a i n v i e w e r

その日の放課後、ぼくは千景さんに寮の自室へと呼ばれた。

この前の戦闘でまた記憶が消し飛んだけど、みんなの呼び方は、スマホのメールとかまで確認して予習済みだ。

そうしてぼくは、千景さんの部屋の前までやって来た。

ドアをコンコンとノックする。

武谷「千景さん、来たよ。話って何？」

千景「開いてるから、入って……」

言われた通り、ドアノブを握り回して、部屋へと入った。

正面には誰もいない。横に人影が見え――

頭に強い衝撃。

転んだ。

武谷「いつてえ……」

何が起きている。かなり痛い。意識が朦朧と。

千景「気絶してない……頭だと加減が……」

千景さんの声。

目だけで見上げた時には、千景さんが何かを振り下ろしていた。

顎に衝撃。

意識はすぐに、ブラックアウトした。

……………ん。

ゆっくりと。

景色が開いた。

頭が、少し痛い。

武谷「ここは……………」

千景「私の部屋よ……………」

目の前に、千景さんが座り込んでいた。

ぼくは壁に寄りかかって座っている状態だ。

動こうとした、けど、動かせない。ギシツ、と音を立てて、阻まれる。

視線を下に。見ると、ぼくはロープで縛られていた。

腕までがっちり縛られているから、自分で抜け出すのは無理そうだ。

武谷「どうということだ……………」

いや、千景さんに気絶させられたのであろうことは途切れる前の記憶からわかるのだが、どうして気絶させられたのか、どうして縛られているのか、それについてのどうい

千景「聖陵院くんが……悪いのよ……」

武谷「ぼくが、悪い？」

千景「聖陵院くんが……何度も倒れるから……どこかにいこうと、するから……」

武谷「……………」

ぼくは息を呑んだ。

武谷「千景さん、なんて顔してるんだよ」

よく見ると、千景さんの顔は、酷くやつれて、今から自死でもしそうな暗さを湛えていたからだ。

千景「名前、呼び方戻ったわね……」

千景さんの発言に、意識を逸らされた。

武谷「そ、そう？」

ちゃんと確認したはずだ。この呼び方で間違いはないはずだ。

……でも、少し前に記憶を失ったぼくが、呼び方の確認を今のぼくより怠っていたとしたら？

それとも、最近呼び方を変えたのか？

千景さんは、呼び方が戻ったと言った。どちらの可能性もある。

だからぼくは判断がつかず、戸惑った。

戸惑ってしまった。

千景「聖陵院くん……?」

武谷「……………」

千景「ねえ、やつぱり、最近のあなたおかしいわ……」

今の千景さんもおかしいと思う。とは口にできないかった。

それよりも、千景さんの追求を躲さないと、という思考に移っていた。

千景「なんで、呼び方変わったの……?」

武谷「や、やつぱり、そっちの方がじっくりくるかなって……」

千景「なんで、そう思ったの……?」

武谷「なんでって……」

やばい。冷静に、理に適った理由を答えないと。

でも、すぐに思いつかない。その時間の空白、困惑が悪かった。

千景「わからないの……?」

武谷「わからないわけじゃない……」

苦し紛れに言葉を繋ぐ事しか出来なかった。

千景「わからないわけではないのなら、言えるわよね……」

武谷「……言えない。言えない理由があるんだ」

そういうことにして、乗り切ろうとした。言えない理由があるから何も言わないだけだと、わからないわけでは、覚えていないわけではないと、そう思ってもらおう為に。

千景「納得、できない」

千景さんは俯き、しばらく考えている様子だった。

やがて口を開く。

千景「……今、思いついたわ」

千景「もしかして……聖陵院くん、覚えていないの……？」

武谷「……っ」

喉から声が漏れる。表情は何とか堪える。目はいつもより開いてしまった。

そう、ぼくは、そんなふうに反応してしまった。

それは重大なミスだ。

千景「まさか、本当に記憶がないの……？」

本当に意外という顔をしていた。つまり、ぼくはカマをかけられたのか。

千景「記憶が、ない……？ 何度も倒れてる。あの力を使い続けるから……？」

千景「ああ……ああ、ああ、ああ……」

千景「どうして……」

千景さんは、死にそうな顔を濡らしていた。涙を流していたんだ。ぼくなんかの為

に。

武谷「違うんだ、千景さん」

千景「そんな反応しておいて、どう違うというのよ……!」

もう、言い逃れはできそうになかった。

間抜けにも、最後まで隠し通そうとしていたぼくの秘密は、あっさりバレたんだ。

千景「聖陵院くん、記憶がなくなるって、それをわかってて、あんなに沢山、使い続けてたの……?」

ぼくは沈黙した。

千景「あなた、壊れてるわ……」

千景「おかしい。普通、そんなこと、できない……」

武谷「そうかな」

千景「当たり前じゃないっ……」

そうかもしれない。

千景「馬鹿……大馬鹿よ……」

ぼくぼくと、胸を叩かれる。全然痛くない。

千景「馬鹿……っ! 嫌いよ、あなたなんて……っ!」

武谷「うん。そうだよね。ごめんね」

ぼくは千景さんを泣かせた。嫌われても仕方がない。
でも。

千景「……なんで」

千景さんはぼくの言葉に、より悲しそうな顔をした。

千景「嘘に……決まってるじゃない……」

千景「私が……聖陵院くんに救われたのは本当なんだから……嫌いになんてなれるわけないじゃない……」

千景「いなく、ならないですよ……」

千景「ずっと、そばにいてよ……」

告白みたいな言葉。

もしかしたら、これは告白なのかもしれない、とは思った。

でも、これからぼくがしていくことを考えると、その言葉については何も考えない方がいいと結論を出す。

武谷「ごめんね。ぼくはかなり我が侷なんだ」

自分のしたいことをやり通すことしか考えていないから。

千景「いや……もう絶対に、戦わせない……」

武谷「ぼくにはそれしかないんだ」

千景「縛ったまま、外してやらない……」

そういえば、ぼくは今縛られていた。

まあ、樹海化したらどちらにしろここからでもバーテックスに攻撃できる。そもそもこのロープが樹海化の影響で消える可能性もある。こんなことをしても意味はない。

それを千景さんに伝えた。

千景「そんなことわかってたわよ……！　でも、じゃあ、どうしろっていうのよ……！　いやなのよ……もう、いやなのよ……」

千景「絶対に、いかせないから……」

そう言つて、千景さんはぼくを解放せず、監禁することに決めたようだ。

意味なんて、無いのに。

それから、しばらく経つ。

ぼくは千景さんに怒る気になれなかった。

ここで監禁されたところで守れなくなるわけではないから。

それに、こんなことは長続きしないだろう。

心は穏やかに風いている。

ただ千景さんのしたいように、されるがままでいた。

ぐううう。

ぼくのお腹が鳴った。

千景「……そういえば、もうそんな時間ね」

時計の針は、夕飯時を差している。

武谷「ご飯食べたいからこの縄解いてくれないかな」

千景「だめよ」

駄目元で頼んでみたけど、即答だった。

千景「私が、作ってあげるから、待ってて……」

ぼくは待つことにした。

数分後。

千景「あーん……しなさい……」

武谷「あ、あーん？」

口を開けると、そこに箸に挿まれたうどんを千景さんが入れようとする。

武谷「あつつ、あちつ、熱いつて！」

麺類だから自分で箸を使わないと食べにくく、唇や顎に熱々の汁に浸かっていた麺が当たって熱い。

武谷「ねえ」

千景「なに……？」

武谷「なんでうどん、しかもインスタント」

そう、千景さんは湯気を上げるカップうどんの容器を手に持っている。たった三分で出来上がった夕食である。いや、お湯を沸かす時間もあつたから三分ではないか。

千景「うどん、美味しいから……」

武谷「そりゃ、そうだけど」

千景「それに、私ほんとは料理そんなうまくないし、今は作る気になれない……」

武谷「そう……」

ぼくはもうどうでもよくなった。されるがままに、うどんを啜った。

熱い。

武谷「トイレに行きたいんだ」

食事を取って少し経つと、当然の生理現象が来る。

千景「………仕方がないわ」

千景さんは縄を解いてくれた。

千景「逃げないでよ……」

トイレの前まで連れていかれ、その前に千景さんは陣取った。

千景「逃げようとしたら、これでまた殴るから……」

千景さんは大鎌を構えた。

どうやらぼくはこの部屋に入った時、大葉刈おおはがりで殴られたらしい。多分柄とかで。

武谷「わかつてるよ」

逃げるつもりもない。

トイレの中には窓があったけど、人が出れる大きさではなかった。出られたとしても、音で気づかれて殴り倒されるだろう。逃げるつもりはないけど。

夜。

そう、もう夜中になってしまった。

外は真つ暗な深夜。そんな中、女の子の部屋で二人きり。

でも、何も起こらない。

なにせぼくは縛られている。

千景「……おやすみなさい」

千景さんはぼくに布団を羽織らせて、自分も布団に包まって、ぼくの膝に頭を乗せてきた。

武谷「……自分のベッドで寝た方がいいんじゃないかな」

千景「いえ、ここがいい……」
千景さんのその様子は、まるで父親に甘える娘、兄に甘える妹だった。

18話 目が覚めるとき

ひなた viewer

最近みんなの様子がおかしい。特に、千景さん。

と思っていたら、杏さんに相談を持ち掛けられました。

杏「やっぱりこれ、切り札を使った、精霊の悪影響だと思うんです」

杏「私も最近、精神状態が普通じゃなくなりそうなので。問題の心当たりがあつた分なんとか耐えましたけど、かなりきついです」

というので、みんなの様子を窺うことにしました。

放課後に、直接訊いてみます。

球子「少し心がタマらんってなりそうなのはあるけど、タマは鋼の心を持つてるから負けることはないぞ」

友奈「私も大丈夫！」

若葉「少々攻撃的になりそうな時はあつたが、自制しているから問題ない」

三人は、まだ元気そうです。

そんな中、千景さんだけ、無言で帰っていききました。

嫌な予感がして、気になった私は悪いと思いながら、こつそり後ろをつけていくことに決めました。

友奈「私も行くよ！　ぐんちゃんが心配だから」

杏「私も、行きます」

球子「あんずが行くならタマも行くぞ」

若葉「わざわざ尾行する必要があるかは疑問だが、私も同行させてもらう。というかまた尾行か……」

ひなた「若葉ちゃん、普通に話しかけても答えてくれるとは限りません、普段ならともかく精霊の影響がある今ならなおさら。なら、様子を気づかれないようにするのが最適でしょう」

若葉「確かに今も私たちの話に加わらずに帰ったし、一理あるな」

そんなわけで、みんなついてくることになりました。

そして、もう一つの懸念もあります。

今日、武谷さんは教室に来ませんでした。千景さんが、武谷さんは今日休むと言っていましたけど、大社の人の様子から最近力を使って倒れている事とは関係が無さそうで

す。

それも確かめませんと。

私たちはそろそろと、できるだけ音を立てずに歩いて行きます。

角から角へ、物陰から物陰へ、慎重に追跡します。

そうして、なんとか千景さんに気づかれることなく、寮まで来ました。

寄り道はせず、直帰するようです。

千景さんは自分の部屋へと入っていききました。

悪いと思いながら、私は扉の前で聞き耳を立てます。

声が、聞こえてきました。独り言でしょうか？

いえ、これは会話ですね。

それに男の子の声です。というか武谷さんの声ですね。

杏「逢引きでしょうか？」

球子「マジか」

若葉「いや、これは……」

私は口の前に人差し指を立て、静かにするように頼みます。

さらに聞き耳を立ててみました。

武谷「いつまで、続けるつもりなのかな？」

千景「……………」

武谷「こんな、監禁なんて、誰かにバレたら千景さんが大変だよ」

千景「……………うるさいわね」

武谷「まあ、続けたいなら、それでもいいけど」

不穏な言葉が聞こえました。

ひなた「そういう、愛情表現なのでしょうか……………」

若葉「いや、監禁はどう考えてもまずいだろう」

友奈「ぐんちゃああああああん!!」

ガチャガチャガチャガチャツ!

友奈さんがドアノブに飛びつき何度も回しました。

友奈「鍵かかっている。開けて、ぐんちゃん!」

千景「た、高嶋さん……………!?!」

千景「だ、駄目、開けないで……………!」

友奈「ぐんちゃん!」

友奈「どうしよう。ぐんちゃんが危ない道に、危ないことを、たけくんが大変、おかしくなっちゃう」

若葉「落ち着け、友奈」

若葉ちゃんが論しても、友奈さんは止まりませんでした。

友奈「どりやああああああ！」

ドガツシャアアアアアアッ！

友奈さんが、千景さんの部屋のドアを殴り壊しました。

すごいパワーです。

球子「ぶつタマげたっ。派手にやるなあ友奈」

杏「愛の力……」

若葉「やり過ぎな気が……」

ひなた「精霊の悪影響かもしれない危急の事態です。致し方ありません」

もしかしたら友奈さんの今の突飛な行動も、精霊の悪影響かもしれません。普段の彼女ならここまでではないような気がしますから。

室内に乗り込んだ友奈さんに続いて入っていくと、奥の壁際に武谷さんが縛られて座っていました。

本当に監禁されていた様子です。

私は気を引き締めました。

なんとかしなれば。

巫女として、勇者を支える。それが私にできることなのですから。

main viewer

案の定、監禁など長く続くわけがなく、みんなが千景さんの部屋に乗り込んできた。

友奈「ぐんちゃん、たけくん、無事!?!」

球子「タマが来たからにはもう安心だ!」

千景「こ、来ないで……!」

五人の足は、千景さんの叫びで止まった。

千景さんの表情は怯えに染まっている。

千景さんは大鎌を構えている。

自分とぼくを護る楯にするかのように。

友奈さんはゆっくりと足を踏み出し、千景さんに近づく。

友奈「大丈夫。怖くないよ、ぐんちゃん」

近づく。

友奈「怖くないから」

千景さんの目の前まで近づく。

千景さんは、大鎌を振り上げはしなかった。

友奈さんは、千景さんを優しく抱きしめる。

友奈「二人とも、何があつたか話して。私、ちゃんと全部聞くから、そして全部解決するから」

友奈さんの、優しく包むような声音。

友奈「みんなでなんとかするから、絶対なんとかなるよ。安心して」

千景「……う……えう……っ」

千景さんは、嗚咽しながら、不安になりぼくを監禁してしまったこと、そしてぼくの記憶がほとんどないことを話した。

千景さんが全部話したので、ぼくは一言も話さなかった。否定もしなかった。

千景「私、もうどうすればいいかわからない……」

友奈「ぐんちゃん……たけくん……」

杏「記憶が、ない……」

球子「タマ……さつきからぶつタマげてばかりだ……」

若葉「思ってたより、まずい事態になってたようだな……」

ひなた「——みなさん」

落ち着いた、よく通る声が響いた。

ひなた「まず、冷静に今の状況を考えて、確認してみましよう。そして、徹底的に話

し合いましょう」

ひなた「それから、どうすればいいかみんなで考えるんです」

話す前に、ぼくを縛っていた縄は若葉さんとタマさんによって解かれた。

ひなた「最初に、戦うべき敵は何か、わかりますね」

若葉「バーテックスだ、全てひっくるめたら天の神だ」

端的に即答する若葉さん。

ひなた「はい若葉ちゃん、正解です」

につこりと笑ってひなたさんは言った。

武谷「そんな最初から始めるんだね」

ひなた「確認して実感することが大切なんです」

ひなた「そして、現在攻めてきているバーテックスは強力です。武谷さんが何度も代

償を負って力を使い、倒れるほどに」

ひなた「武谷さんの力で代償。精霊の力でも代償。強大な力を扱うには代償が伴いま

す。でも敵が強大ですから、こちらも対抗できるほどの力を使わなければ勝てないので

す」

杏「代償を負わないで戦うのなら、連携をして、工夫をしながら戦うしかないですよ

ね」

武谷「でもそんな小細工は最近襲撃してくるバーテックスには通用しない。ストレー
トに強力な力をぶつけないと対処できない所まで来ている」

球子「なら、どうすればいいんだ？」

話し合った結果。

そして、どうしようもないことがわかった。

武谷「結局、ぼくが倒さなければ終わるだけだ」

武谷「そんなこと、わかっていただろう。だから今、こんなことになっている」

ぼくがそう言っても、みんなは諦めた表情をしなかった。

ひなた「けれど。だったら、その現実を受け入れた上で、どうするか考えてみましょ
う」

友奈さんが、静かに強く、言葉を紡いだ。

友奈「なら、みんなで戦おうよ」

武谷「今までみんなで戦ってはいただろ」

友奈「ううん。みんなで、全力で。たたくんみたいになりふり構わずに戦うんだよ」

友奈「赤信号、みんなで渡れば怖くない！　ちよつと違うかな？　赤信号は渡っちゃ

いけないもんね」

武谷「それは、みんなも代償を恐れず、全力で使うということかな……」

友奈「そういうことだよ」

千景「決めたわ」

さつきまで不安そうな顔をしていた千景さんは、決意に満ちた表情をしていた。

千景「聖陵院くんと同じ場所に、私も行く」

ひなた「苦肉の策ですが、それしかないでしょうね……」

若葉「いつもより、なりふり構わず戦うだけだ」

球子「そういうことならどんどこいつ。タマに任せタマえっ」

杏「無茶、しなければいけないときなんですね……」

武谷「待て!!」

ぼくは思わず、声を荒げていた。

武谷「みんなが代償を負うのは、駄目だ……」

武谷「やめろ……やめてくれ……」

ぼくがここまでして護っている意味が、無くなってしまう。

ぼくには、これしかないんだ。

もう、これしか残っていないんだ。

友奈「たけくん、私たちにとって、たけくんは大切な友達なんだよ。だから、たけくんが私たちに死んでほしくないと思っっているくらい、私たちもたけくんに死んでほしく

ないと思つてるんだよ」

武谷「んなもん、どうでもいいんだよ!!」

ぼくは、なぜか声を荒げていた。

覚えていないはずなのに、感情だけが、先走つて、言葉が次々と吐き出された。

武谷「そんな綺麗なこと言つて、あの子も!」

誰だよ。

武谷「あの子も!」

あの子つて誰だよ。

武谷「みんな、みんな死んでしまったんだよ!」

武谷「ぼくが頑張らないと、みんな死んでしまうんだよお!!」

友奈「私たちは、死なないよ」

武谷「うるさい! そういうこと言つてる奴ほどすぐに死ぬんだ!」

友奈「たけくん」

——怒っていた。

友奈さんは、怒っていた。

ぼくは、覚えていないからわからないけれど、友奈さんが怒るのはとても珍しいことなのではないかと思つた。

もしも記憶があつたら、この誰よりも優しい女の子が怒つているところを始めてみた、とても思つていただろう。

友奈「ごめんね。最初に謝つておくよ。私、今からたけくに酷いこと言うね」

友奈さんは、真摯にぼくを見つめていた。

友奈「記憶がないなら、わかつてつて言つても、酷だと思ふけど、それでも、一番最初に、記憶がなくなる前に使うと決めたのはたけくんだから。その責任はとつて」

友奈さんは、息を吸つて、ぼくに正面から言葉をぶつけた。

友奈「私の大切な友達のぐんちゃんさんの気持ちを考えないなんて、大切な友達のたけくんでも許さないよ」

彼女が怒つている原因は、それだった。

千景さんの、ため。

武谷「あ——」

ぼくは、頭を強くガツンと殴られたような錯覚を覚えた。

ぼくは自分勝手に、他を顧みていない。それはわかつていた。

でも、全然わかつていなかつたのだ。そんなふうには悪人ぶることで、不幸に酔つて自

分の中で免罪符を得ていただけだ。なんて野郎だ。

でも、友奈さんの言葉、表情、思いをストリートにぶつけられ、気づかされた。

ぼくは、本当に千景さんたちが大切なら、本当に守りたいと思っっているのなら、ここで彼女たちを止めることはしてはいけない。

しては、いけないのだろう。

友奈「お願い。記憶がなくても、ぐんちゃんのこと、ちゃんと考えてあげて」

その言葉は、完全に、ぼくよりも友奈さんの方が、千景さんのことをちゃんとわかっていて、大切にしていることがわかって。

その事実には、ぼくは打ちのめされて、このままでは駄目だと強く――

何か、湧き上がってくるもの。

なぜか、都合よく、誰かの意図のように、思い出された。

このときぼくは、北欧神様に力を与えられた時と同じ暖かな光を、心に感じていた。

――千景さんがどうあろうと、ぼくはあなたを肯定する。ただそこに存在してくれるだけで、ぼくは価値を認めるよ。ぼくは君に生きていてほしい。何もしなくても、何をしても、千景さんはぼくにとって価値のある存在だ。

――何かあった時は、いつでもぼくを頼ってくれ。ぼくは千景さんの絶対的な味方だ。

——ぼくは、千景さんに喜んでほしい、笑っていてほしい。と思っているよ。いつか発した言葉。

千景さんに向けて、心の底から伝えた言葉。

本当になぜか、ここで思い起こされた。

いや、なんとなくわかる。

これは、北歐神様が慈悲をかけてくれたんだ。

本当は代償で、取り戻すことなど叶わなかったのに。

北歐神様は、ぼくのために思い出させて下さった。

涙が溢れてきた。

ぼくは、なにをやっていたんだ。

何が笑っていてほしい、喜んでほしいだよ、今、千景さんは泣いているじゃないか。

何が守るだ、お笑いだよまったく。

年長者、なにやっていたんだよ。

武谷「ごめん……ごめんなさい……ぼく、千景さんのことちゃんと考えるよ」

まだ、不安はある。人は、死ぬときは死んでしまうから。

でも、もう間違えない。

ぼくは千景さんの味方だ。

ぼくはひとつの光を、瞳に宿した。
揺るぎない強いひとつを、得たんだ。

あとは、進むだけ。

友奈「ありがとう」

友奈さんは、いつものような満面の笑みをして、ぼくの手を握った。

引つ張られながら立ち上がる。

ぼくは千景さんを見た。

千景さんもぼくを見ている。

武谷「千景さん、ごめん……」

ふわりと、人肌と柔らかさが包んだ。

ぼくは、千景さんに抱きしめられていた。

千景「聖陵院くん、私は、あなたにずっといてほしいだけだから……いなくなつてほしくないだけだから……」

武谷「うん、いるよ。約束する」

千景「約束……約束よ……」

この言葉を守るかはわからない。

これからも変わらず代償は負うのだ。敵を倒さなければぼくたちは死んでしまうか

ら。

——それと、ぼくの代償は、きつと記憶の消失だけでもないだろう。それでも、ずっといようとする気ではいることはできる。

きつとそれが、千景さんのことを考えるとということだと思っから。

ひなたさんは微笑んでいた。

若葉さんは腕を組んで瞑目し、口元を綻ばせていた。

杏さんは嬉しそうに涙を流していた。

タマさんも嬉しそうに笑っていた。

ぼくは友奈さんに手を握られ、千景さんに抱きしめられて、しばらく立っていた。

19話 六つの頭を持つ怪物

数日後。

樹海化が起きた。

不思議な光に包まれ、根ばかりになった世界で皆は変身し、ぼくはスマホを握り締め、大地に立つ。

若葉「さあ、来い！」

球子「どんとこーい！ タマが相手になってやる！」

友奈「気合十分！」

そして、樹海の向こうから襲来する巨体。

バーテックスの姿は、ここ最近の中でも一際異様ひしぎわだった。

それは、一言でいえば「六つの頭を持つ怪物」だ。

数十メートルはあるサソリ型と同じかそれ以上の巨体。バーテックス特有の無機物のような見た目は変わらず、二本足で歩を進め、視線を上に向かっていくと胴体が見え、その上に不気味な六つの頭が浮いていた。大口を開けている頭もある。

通常個体のバーテックスは一体もいなかった。この怪物だけが侵攻し迫っている。

友奈「全力、ぜんかーい！」

五人は最初からそれぞれいつもの精霊の力を宿した。一目連、七人岬、源義経、輸入道、雪女郎の五体だ。

敵は、あの一体だけか。

なら、先手必勝、撃たない理由はない。

スマホの画面中央にある黄金色の魔方陣を上にはスワイプ。画面上方にある歯車型魔方陣と噛み合い、回転、高速回転、綺麗な音色を発し、達し、数十メートルの巨大魔方陣が目の前に展開された。そして巨大魔方陣の中央から黄金の槍の穂先が迫り出す。

詠唱。

武谷「『グングニル』」

轟音。

轟雷。

豪速で撃ち出された神の雷纏う黄金槍は、六つの頭を持つ怪物を討ち滅ぼさんと進む。
む。

ここで、奴は動いた。

六つの頭のうち一つ。大口を開けた頭。

その大口の中が、刹那瞬いた。
水閃。

水色の光線が放たれた。

極太の光線は周囲を凍らせ霜を撒き散らしながら光速で進み。

雷纏うグングニルと真正面から激突する。

衝撃、豪風、大音。

後に。

グングニルと霜の光線は対消滅していた。

ぼくは思わず歯を噛み締めた。

また、だ。

また、グングニルを消すことができ敵が来てしまった。

結界の外で対峙した光り輝くバーテックスだけが例外ではなかったのだ。

バーテックスは着実に強くなってきている。

お互いの攻撃が消滅してから、時間の間隙は僅かだった。

水色の光が瞬く。

水閃。

先とは別の頭から、霜の光線が放たれた。

あの光線は、グングニルを消滅させるほどの威力だ。みんなでは対処できないだろう。

なら、惜しまずにぼくが対処するしかない。

フリックして変えた画面の中央にある純白の魔方陣を下にスワイプ。下端にある歯車型魔方陣と噛み合い、高速回転、綺麗な音色、巨大な純白色の魔方陣が現実の上方、ぼくから前方斜め上の空に展開される。

詠唱。

武谷『ミヨルニール』

純白の魔方陣から白雷が迸り、白雷纏いし純白のハンマーが豪速で落とされた。

霜の光線に命中。

二つの極大破壊現象は、先とは違う結果だが、結局は同じ道を辿った。

大音が響き、霜の光線はミヨルニールに潰される。

されど、ミヨルニールは一を必殺する雷槌だ。

霜の光線を殺した後は、消失する。

ぼくの、代償を負わない手札は、これで潰された。

だが、それはここ最近の戦闘では日常茶飯事だった。

でなければここまで記憶がなくなっただけだ。

また別の頭から水色が瞬き、霜の光線が迫り来る。今防げるのは、ぼくだけだ。

——神様。北歐神様、どうか力を下さい。

祈り、それは北歐神様へと届き、代償で以って叶えられる。グングニルの再使用ゲージが一瞬で満タンになった。感謝を。

画面をスワイプ。黄金色の巨大魔方陣が眼前に展開。詠唱。

武谷「『グングニル』」

轟音轟雷。

放たれた雷纏う黄金槍は霜の光線にぶち当たり対消滅した。ズキンッ。

少しの頭痛を感じる。無視した。

間髪入れず、四発目の霜の光線が解き放たれる。

——幾らでも持っていけ。

グングニルの再使用ゲージが満タンになる。

神に感謝を。

画面をスワイプ、詠唱。

武谷「『グングニル』」

相殺。

大事なものが失われていく感覚。

喪失感。倦怠感。不安感。

ズキンズキン。頭が痛い。

そんなもの、どうでもいい。

水色、光瞬き。五発目の霜の光線。

祈りが届き、グングニルが即座に再使用可能状態へとなる。そして神に感謝する。

指を動かす、画面をスワイプ、詠唱を零す。

武谷「『グングニル』」

轟音爆風衝撃相殺。

視界が霞む。

体が硬直。酷い倦怠感。凄まじい頭痛。

大切なものが、無くなっていく。

頭痛というものも適切でないと感じてしまうほどの、痛覚。

痛い痛い痛い！

ズキンズキンズキンズキンズキンズキンズキン。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

——氷閃。

眼前に迫る水色。

早く、グングニルを撃たないと……。

みんなが、死んでしまう……。

指を、動かせ。

なんとか、指を動かす。

けれど、指が震える。ぼくの動きは緩慢だった。

間に合わない。

杏「回避してください！」

球子「タマに任せろおおおお！」

千景「聖陵院くん……！」

タマさんがぼくの前に降り立ち、旋刃盤を楯とし、巨大化させ構える。

七人の千景さんがぼくを守るように覆い、抱えた。

霜の光線がタマさんの楯に衝突する。

ぼくたちの視界は、白に染まった。

耳を劈く音。爆発。荒れ狂う衝撃。耳鳴りが広がる。

ぼくの体は千景さんと共に吹っ飛んだ。

そこまで理解して、意識は暗闇に閉ざされた。

友奈 viewer

視界を邪魔していた霜が晴れる。

私は立ち尽くしていた。

私と若葉ちゃんとアンちゃんは、六発目の水色光線を後ろや横に跳んで退くことで避けていた。

でも、たけくとぐんちゃんとタマちゃんは違う。

三人とも、倒れている。

ぐんちゃん六人は消えて、タマちゃんの楯は罅割れて、三人とも気を失っていた。

杏「あ……ああ……」

若葉「ぬかった……っ」

まだ、誰も死んでいない。

でも、このままだと、すぐ、みんなが死んでしまう。

六つの頭を持つ怪物が、大口を閉じ、何かを溜めるような仕草をしていた。

杏「六つの頭から一度ずつ光線を放った後にあの仕草、きつと、あれは銃の装填と同じです、なんとか、しないと……」

アンちゃんが茫然としながらも分析したことを伝えてくれる。

もうすぐ、またあの光線が放たれるということ。

杏「あれを防ぐのは難しいです……。避けましょう！ みんなを抱えて逃げない！」

若葉「く……っ」

アンちゃんと若葉ちゃんが走り出して、若葉ちゃんがたけくんとぐんちゃんを抱えて、アンちゃんがタマちゃんを抱える。

若葉「おい！ 友奈も一人運んでくれ！」

私は気を奮い立たせた。

友奈「全力で戦うって、言っただけだ！」

友奈「言い出しつpegができなくちゃだめだ！」

私は自分の内側に意識を集中させる。

全力！ 全力！ 全力！

そう念じて神樹様にアクセス。精霊の力を引き出す。

そのとき、今までにない知識が与えられた。

神樹様から流れ込んでくる精霊の情報。

今まで開示されていなかった力。

私が宿せる一番強い精霊。

——酒呑童子。

三大悪妖怪の一角。鬼の王。比類なき力の権化。

友奈「来い——酒呑童子!!」

勇者装束が変化し、額に二本の角の装飾が現れ、武器である手甲が強化されていく。私の体に不釣り合いなほど過剰に巨大化した手甲。でっかいでっかい手甲。それは歪にさえ見えた。

装束は全体的に、赤よりも赤い、濃い赤色に変化する。

手甲も角も、朱い^{あか}紅い^{あか}赤い。

力が、どこまでも漲ってくる。

今なら、なんでも出来る気がした。

六つの頭を持つ怪物が、大口を開く。

刹那、眩しい水色の光が溢れた。

水閃。霜の光線が一つの頭から吐き出されてこっちにやって来る。

私は赤い拳を固め、踏み込んだ。

矢のように拳を引き絞って。

そして、放つ！

ドオンツ!!! と大きな音が鳴り響いて光線は消えて散った。

辺りに霜が広がり舞い落ちていく。

酒呑童子の力は、その巨大化した手甲が示す通り、破壊への打撃力に特化している。

たたくんの力に勝るとも劣らない、桁違いの攻撃力を持つているんだ。

友奈「いたた……」

霜の光線を殴り付けた拳は冷たく、痛い。

でも、拳が壊れるほどじゃない。

だったらこんなもの、無傷と同じだ。

私は足を進めた。

走る、跳ぶ、もつとあいつの近くまで。この拳を届かせるために。

霜の光線が放射され降りかかる。

それをまた殴りつけ散らした。

足を前に進める。

三発目の水色。

殴って消す。

バーテックスに接近していく。

四発目の光線。

殴って散らす。

進む。

五発目。

殴る。

跳ぶ。前へ。

六発目。

殴り散らした。

これで、霜の光線はもうない。

溜める時間なんて、やらない。

六つの頭を持つ怪物の、ようやく間近まで来た。

六つの頭の内、一頭が動いた。突っ込んで来る。

拳を振りかぶって、その額に赤い手甲纏う強攻撃力の拳を突き刺す。

拳が突き刺さった一頭は、爆発するように壊れた。

――、一気に二頭が動く。

風を切って勢い良く襲い来る二つの頭。

一つを、殴りつけて壊した。

でも、その硬直時間の隙に、大口を開けた二つ目が肉薄する。

目の前が真っ暗になった。

私はその大口に呑み込まれたんだ。

どンドン内部へと押しやられる感覚。

このまま、やられちゃう……？

友奈「根、性おおおおおおおお!!」

私は握り締めた拳を、空に放った。

そうすると、何かにぶち当たる。

視界が晴れた。

私を呑み込んでいた頭は弾けて消えていた。

内部から、破壊できたんだ。

地面になんとか着地した瞬間。

別の頭がすでに迫っていた。

殴る。壊した。

その後ろからも別の頭は凄い勢い良く速くこっちへ来ていた。

私の動きは間に合わない。

視界は暗くなって、ガブリと鋭い歯で噛みつかれる。

でも、私の体は引き裂かれなかったし、食べられちゃうこともなかった。

私の額にある二本の赤い角が、怪物の歯とぶつかり合って防いでいた。

それでも咬む力、顎を閉じる圧力は全身にのしかかってくる。

あと数秒持つてくれるかどうかだろうけど。

そんなに、必要ない。

友奈「う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

赤の拳を暗い壁、口内に思い切り叩きつけた。

それだけで、強力無比の攻撃力を誇る酒吞童子の力は敵を壊す。

弾け飛んだ頭から、私は再び解放される。

——目の前に。

超至近距離で、最後の一頭が、水色の光を眩く発しながら霜の光線を溜めていた。

友奈「諦めないッ！」

放たれる。

拳と光線が。

爆音。爆発。力が吹き荒れる。

霜の光線は、消えて無くなった。

眼前には、最後の頭。

私は、すごく痛いけど、全然動ける！

赤い手甲纏う拳を握り締め、引き絞り。

前に、放つ！

友奈「勇者ッ、パーパーパーパーパーンチッッ!!!」

その拳は最後の頭に命中し、発破するように弾け飛んだ。

友奈「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

六つの頭を破壊されると、パーテックスの残りの体も消え始めた。

友奈「たお、したんだ……」

私は、体に力が入らなくなって、立っているのも億劫で、できなくなつて倒れて、意識を失っていた。

m a i n v i e w e r

自分の病室を出て、病衣姿で病院の廊下を歩く。

友奈さんの新しい力、三大悪妖怪の一角である酒吞童子は、肉体への負担を度外視し、ただひたすら力のみを求めた結果として宿し得たものだという。

神樹様は北歐神様との意思疎通の結果、今までぼくが戦うことで神樹の勇者たちの負担を掛け過ぎないために三大悪妖怪のことは秘匿していた。

だが敵の強さが想定以上になってきたことと、勇者たちが覚悟を決めたため負担の大きな三大悪妖怪の力を与えることを決めたそう。

ひなたさんが受け取った神託で伝えられたことと、大社もいつていたことだからそうなんだろう。

意識や視界が時々ボヤケながら、ぼくは歩いた。

ずっと病室のベッドにいるのも何だったので、気分転換にジュースでも飲もうと思っただのだ。

そうして自動販売機が並ぶ区画に着く。

一つの自販機の前に立って、何を飲もうか少し考える。

ブラックコーヒーにしようかな、ぼくカフェラテの方が好きだけど。

炭酸……強炭酸コーラもいいな。あ、この激辛うまあじ毒ジュースとかいう変なものいいな。

友奈「あ、たけくん」

振り返ると、友奈さんがいた。

簡素な薄緑色の病衣姿で、目の前に立っている。

武谷「どうしてここに？」

友奈「ジュースが飲みたくなって。たけくんもそうじゃないの？」

友奈さんは可愛らしく首を傾げた、短めの赤いポニーテールが揺れる。

そうだね、とぼくは頷く。

……なんか、どうしようもない感情が込み上げてきた。

武谷「はははっははははっ」

友奈「たけくん、なんでわらってるの？」

武谷「あはははははっ」

友奈さんはキョトンとしたあと、相好を崩した。

友奈「ふふっ……そんなに笑われると、私も笑っちゃうよ」

ぼくはみんなを守る為の、みんなと戦う為の知識、感情、意志は持っているけれど、それ以外はほとんどない。残骸が立っているようなものだ。

友奈さんはこの前の戦いの後倒れて、すぐには目を覚まさなくて、命の危険まであると大社に判断されていた。今は起き上がって普通に過ごしているけれど。

武谷 「なに、飲みたいっ？」

友奈 「じゃあ、オレンジジュースでっ」

武谷 「オレンジジュースねっ、ぼくはー、これにしようかなっ、ははははっ」

硬貨を投入してチャリンチャリン。ぼくはアツプルジュースと激辛うまあじ毒ジュースを買った。友奈さんにアツプルジュースを渡す。

友奈 「これwwwアツプルジュースwwwオレンジジュースじゃないよwww」

武谷 「間違えたwwごめんねww」

友奈 「いいよww私wwwアツプルジュースも好きだしww」

友奈 「それよりたたくんのジュースwwなにそれww」

武谷 「これはww激辛うまあじ毒ジュースww新商品みたいだよww」

友奈 「なにそれwwすごそうww」

武谷 「すごいだろww」

友奈 「なんでたたくくんが偉そうなのww」

武谷 「ぼくが作ったww」

友奈 「えwwそうなのww」

武谷 「うそwwww」

友奈 「なんでwwうそついたのwwww」

武谷「じゃあ、乾杯っ！」

友奈「かんぱーい！」

ぼくらは缶ジュースを打ちつけ合った。

プルタブを開け、お互いラツパ飲みで一気に飲み干す。

武谷・友奈「プハーーーーー！！！！」

味はしなかった。

でも、美味かった。

激辛で口の中は刺激されまくった。

千景「二人とも、なに笑ってたの？ 向こうまで聞こえてきたわよ。他の人に迷惑に

なるから抑えた方がいいわ」

振り返ると、困り顔で千景さんが立っている。

武谷「あ、千景さん」

友奈「ぐんちやーん」

ぼくたちは片手を上げ、満面の笑みで迎えた。

20話 北欧の大狼 フェンリル・バーテックス

あくる日。皆で教室にいるとき。

樹海化が、起きた。

根ばかりの世界で、ぼくらは変身してスマホを握り締めて並び立つ。

息を吸い、吐く。落ち着ける。今回も、全力で戦うだけだ。

前を、見据える。周囲にも、意識を巡らす。

ぼくたちは、身構えていた。

バーテックスが、いつ、どこから、どのようなやつが現れてもいいように、警戒して

いたんだ。

そう、ぼくたちは少しも油断せず、最大限警戒していたんだ。

でも。そのうえで。

ぼくには、視界の奥で僅かに影のようなものが過ぎつたような、程度だった。

だから、バーテックスの初撃に反応できたのは、ぼくたちの中で最も早く、反射神経

と戦闘の直感が鋭い若葉さんだけだった。

激しい金属音、衝突音が聞こえたと思った時、一瞬見えた。

生太刀を振り上げる若葉さん、その刀に、鋭すぎる煌く爪を薙ぎ払うバーテックスの姿が。

それは、巨大な狼のような姿形をしていた。

何ものをも裂いてしまいそうな煌く鋭い爪と牙を持つ、大狼型バーテックスだ。

薙ぎ払われた若葉さんは、ボールのように跳んでいった。

友奈「若葉ちゃん！」

球子「若葉っ！」

ぼくも若葉さんが心配だが、振り返っている余裕はない。

恐ろしく速い大狼型バーテックスは、目に見えない。少なくとも、ぼくの目では追えないんだ。

最近のバーテックスはどいつもこいつもそうだったが、この大狼型バーテックスも危険すぎる。

なにしろ、速すぎるのだから。

即刻、殺す必要がある。

精霊、七人岬を宿した千景さんの分身、その一人がぼくの前で引き裂かれた。

ぼくには、見えなかった。

今は敵を倒す為にやるべきことをやるだけだ。

心配も何もかも、今は考えるな。

ぼくは高速ですべての工程を為していった。

スマホの画面の上にスワイプ、巨大魔方陣が展開、詠唱。

武谷「『グングニル』」

轟音轟雷。

雷を撒き散らしながら黄金槍は一直線に放たれる。

ぼくは大狼がどこにいるかわからない。でも、雷を撒き散らす範囲攻撃も兼ねた黄金槍ならば当たるとは思わなかった。

そう思っていた。

グングニルが消えた後。

大狼は、無傷だった。

無数に走る雷を、この化け物はあるのかすべて避けたのだ。

瞬。風を裂く音。ぼくは、死を予感した。

死んで、たまるか。

刹那の間に、工程は完成する。

スマホの画面をフリックし切り替え、中央魔方陣を下にスワイプ。巨大な純白色の魔

方陣がぼくの目の前の上空に出現。詠唱。

武谷『「ミヨルニール」』

ぼくの目の前に迫っていただろう大狼型バーテックスがいる地点に、白雷纏うハンマーが落とされる。

一を必殺する雷槌を受ければ、この化け物とて一撃で滅するだろう。

そう、当たれば。

大狼は、ミヨルニールまでも避けたのだ。

死んでいない。手応えで解る。空ぶった。何もない空間を雷槌は押し潰したただけだ。

必殺の攻撃も当たらなければ意味がない。

奴は生きて、今もぼくらの命を狙っている。

代償を払わないぼくの攻撃はこれで尽きた。

だが、けれど、されど。

代償を払ってグングニルやミヨルニールを何度撃つたとして、果たして奴に命中するだろうか。

ぼくは、直感する。今まで死線を潜っていた経験から、確信する。

確実に、一発として当たることはない。そんな結論だけが冷たく存在した。

若葉「——私に、任せろッ!!」

とても、力強い声音。

今は彼女に頼るしかない。

現在のぼくは、抵抗感なく当然のように、そう思えたんだ。

若葉 viewer

私は血を吐き捨て、立ち上がる。

根に叩きつけられたが、大した怪我ではない。

――。

私は自らの内に意識を集中する。神樹様にアクセス、三大悪妖怪の一角の力を、引き出す。

刹那の間に、刹那を越えて、超常は為された。

若葉「降りよ――大天狗!!」

神にも比肩する大妖、魔縁の王、とある伝承によれば天上を一夜にして灰燼に帰したという大天狗。

背中から漆黒の巨大な翼が生えた。勇者装束は伝承に記される天狗のような衣装に変化する、生太刀も形状を変え、より大きな刀へと成る。

これが三大悪妖怪である大天狗を宿した、私の姿。羽ばたき、飛翔する。

風を切り、いや、風と共に。

翼を得たことによる圧倒的機動力、速度。

大天狗の力によって、私の速さは神域の世界にまで足を踏み入れていた。

今なら、大狼の姿が見える。無機物のようだが大狼の姿を象っている化け物の姿が。

大狼型バーテックスに肉薄。大太刀を振るう。

バーテックスは鋭き爪を揮った。

切り結ぶ。爪と刀が弾き合う。この速度の世界には、今私と奴以外にいない。

金属音。連続音。止まず、絶えず、何度も幾度も、神速の剣戟が続いた。

だが、私は奴と違い、高速飛行によって生じた莫大な重力加速度が、自身の内臓や脳

にダメージを与える。ただ戦っているだけで、動き回るだけで傷を負っていく。

だから、時間との勝負だ。

——瞬。

大狼型バーテックスの体から、突然鎖のようなものが幾本も伸びた。

不意を打たれた私はそれに強く巻き付かれ、何重にも巻かれ拘束される。

拘束した私を殺さんと刹那の一爪いっそうが放たれた。

私の意識は、その刹那で引き延ばされる。

眼前には、鋭い爪。

大天狗——それは炎と関わりが深い精霊である。伝承において、天を一夜にして焼き尽くし、かつて京都の半分を大火によって滅ぼした。三大悪妖怪の一角たる大妖の炎は、神をも脅かす埒外の力。

意識を集中させる。大天狗を宿した時から、力の使い方は本能的に理解していた。

大妖の炎が、呼び起こされる。

私を取り囲み、守るように炎が出現していた。

その炎は眼前の凶爪を焼いた。

大狼は半分焼失した爪を庇いながら瞬時に後退する。

私を拘束していた鎖は、全て焼け落ちた。

大太刀を構え、大狼を見据える。

私を中心として発生した熱は炎は際限なく大きくなっていった。世界全体を覆い尽くさんとするように。炎の熱は、私自身をも傷つける。勇者装束は焼け落ち、皮膚は火傷で爛れる。

若葉「化け物が。此処ここが貴様の終端と知れ」

されど、この大天狗の力は、そのデメリットを補って余りあるほど強大だ。

この力で敵を斃せるのなら、仲間を守り、民を守り、ひなたを守って帰ることができ
るのなら、この程度の代償生ぬるい。

炎を従え、大太刀を携え、神速で飛翔する。

大狼は鎖のようなものを無数に体から生やし伸ばし、こちらにけしかけながら逃げ
回った。

一閃、二閃、三閃、幾千。

その全ての鎖を斬り落とす、この刀に斬られた鎖はすべてが炎で焼かれ、焼滅した。
大量の炎を、津波のように放った。

大狼は神速で避けようとしたが、これは面攻撃、炎の壁が迫る範囲は凄まじく広い。
奴は、完全には避けられなかった。

大狼型バーテックスの下半身は、焼け落ちた。

止めを刺さんと、私は一気に踏み込んだ。

飛翔し、一瞬の間に大狼へと肉薄する。

突然、唐突、刹那の間に。

大狼型バーテックスの頭が、巨大化した。

山をも飲み込むほどの質量に、瞬時にして成ったのだ。

そして私は、その広大な洞窟のような口内にいた。

大狼の口内は、針山剣山だった。全てが煌めく鋭利な牙で埋まっている。視界は牙以外に存在しない。

更に、その牙が凄まじい勢いで伸びてきている。

飲み込むのではなく、私を斬り刻み串刺しにするつもりなのだろう。

後退を考えたが、既に後ろの口内への入り口は閉じられていた。

牙は、目前。

若葉「おおおおおおおっ!!」

私は炎を操り、大太刀を揮い、一直線に牙の壁に突っ込む。

牙を炎で焼滅させる、牙を切り落とす、だが、数が多すぎる。一度に対処はできない。

なにしろ視界全てが鋭い牙だ。

体は斬り刻まれ、鮮血が舞う。

それでも、私は止まらない。止まるわけにはいかない。

一千、二千、三千と、牙を焼き落し、斬り落としていく。

体を裂かれながら、前に進む。

そして、ついに。

一直線に進んだ終端、その壁を一闪、外へと突き破り脱出した。

漆黒の翼をはばたかせ、振り返る。

外に出ると、奴は隙だらけだった。

口を閉じ、巨大すぎる頭を鎮座させている。

若葉「終わりだ」

幾閃、斬撃を喰らわせ、焼き尽くした。

バーテックスが消えていく。

私は勝利したのだ。

それを確信した時、私の意識はゆっくりと沈み、閉じた。

ひなた viewer

大天狗の力を宿した若葉ちゃんは、入院しました。

私は、今その若葉ちゃんが眠るベッドの隣に椅子を置いて座っています。

若葉ちゃんの寝顔は、穏やかです。

ここに来てから、私はずっと、若葉ちゃんの寝顔を見えています。

若葉「ん……うん……」

若葉ちゃんが起きたようです、瞼が開かれていきます。

若葉「ひなたあ……ここ、どこだ……」

ひなた「ここは病院ですよ若葉ちゃん」

若葉「病院……病院か……ああ、確か、あいつを倒して、それで……」

ひなた「若葉ちゃん、お疲れ様です。今回は人一倍頑張ったんですね」

こんなに、ボロボロになってまで。

そんなことを考えて、病衣姿で包帯の巻かれた若葉ちゃんを見ると……見ていると……。

押し殺していた気持ち、出て来てしまいます。

本音をいうと、私も戦いたかったです。傷つかないでほしい、死なないでほしいです。戦わないでほしいです。私が戦って、若葉ちゃんを守れたらいいのに。

ひなた「若葉ちゃん……」

思わず、その思いが声に出してしまったのか。

若葉「大丈夫だひなた。私たち全員が、なりふり構わず戦うんだぞ。負けるわけがない」

若葉ちゃんは、力強い言葉をかけてくれました。

ひなた「はい……」

若葉「ひなた、いつだって、必ずお前の元に帰って来るから、心配するな」

若葉「私は守るために戦う、私が死んだら、ひなたを守れないからな」

若葉ちゃんは、自信をもって、絶対にそうすると誓うように、真摯な強い瞳でそう言うてくれました。

ひなた「はい……っ」

私は、若葉ちゃんがそう言うてくれるなら、信じます。

私は私にできること、私にしかできないことをしましょう。

若葉ちゃんは、きつと帰って来てくれます。

だって、若葉ちゃんは私のヒーローなんですから。

21話 北欧の竜 ニーズヘッグ・バーテックス

ぼくも含め、皆が退院をした頃。

樹海化警報が鳴り響く。

樹海化。

樹海化だ。

樹海化が起きる。

また。

今日も、バーテックスはやって来る。

並び立つぼくたちの視界の先。

最初は、黒い点に見えた。

でもそれはすぐに大きくなる。

そのの大きさ自体が変わったわけではない。近づいたことで元々の姿が見えてきただけだ。

それは、俗に云うドラゴンだった。無機物のような、ドラゴンだった。

巨大な翼を持ち、二本の角を生やし、黒、金、白、三色の色合いをした巨体。竜型バーテックスが、翼を羽ばたかせ、豪速で来襲してくる。

スマホの画面をスワイプ。詠唱。

武谷 『グングニル』

轟音轟雷。

雷纏う巨大な黄金槍が発射される。

竜型バーテックスは、避ける素振りもなく突っ込んできた。

真正面から命中する。

轟き響く大音。

黄金槍は竜の胸を貫通し、雷撃を迸らせた。

投槍は彼方へと消えていく。

竜型バーテックスは胸に大穴を開けられ、全身に罅が入っていた。
だが。

瞬時に、その穴が塞がった。

罅も、すでに見当たらない。

竜は健在だ。

止まらず、空を駆けて来ている。

武谷「は」

真正面から、完全に、グングニル——北欧神オーディンの槍の——そのすべての力を受けて無傷。いや、急速回復。

あり得ない。

武谷「……馬鹿げている」

されど、竜は止まることなくこちらへ向かってくる。

それが雄弁に事実を物語っていた。

武谷「まったく」

六つの頭を持つ怪物といい、大狼型パーテックスといい。

来る奴、来る奴、急速に馬鹿げた存在に成っている。

武谷「化け物が」

すぐに次弾を撃ちたいが、ミヨルニールの射程範囲内には、まだ奴は入っていない。

代償を払ってグングニルのゲージを満タンにすることはできるが、たつた今竜型パーテックスはそれを受けて無傷だった。ミヨルニールの方が効果的かもしれない。

友奈「来い、酒呑童子！」

若葉「降りよ、大天狗！」

二人が、三大悪妖怪の一角をその身に宿した。

友奈さんは二本の角を生やし、巨大な手甲を纏った赤い鬼に。若葉さんは漆黒の翼を持ち、大太刀を携えた天狗に。それぞれ姿を変える。

友奈さんは地を蹴り疾駆し、若葉さんは神速で飛翔した。

炎を従えた若葉さんは、大太刀で斬りかかる。

竜型バーテックスの体は容易く断裂し、炎で全身を焼かれた。

けれど、死なない。一瞬の後には、その傷は修復されている。

そして傷を負おうとも怯むことなく、速度を落とさず、止まらない。

変わらず此方こちらに、飛翔してくる。

友奈さんが巨大な赤の拳を放った。

その超攻撃力は、竜の腹に直撃、破壊する。

竜型バーテックスの体は無残に上半身と下半身に別たれたが、即、繋がった。

止まらない。

輪入道を宿したタマさんが炎纏う旋刃盤を投擲する。

雪女郎を宿した杏さんが猛吹雪を射出する。

七人岬を宿した千景さんの内六人が、三日月を描くように斬閃する。

斬り刻まれ、凍結されても、瞬間回復。奴は、飛んでくる。

何度も、何度も、拳で穿たれても、炎で焼かれても、斬り落とされ、斬り払われ。斬り消されても、凍らされても、竜型パーテックスは止まらない。どれだけ攻撃されても回復し、止まらず飛翔する。ぼくたちの元へ迫り来る。

殺しきれない。

奴の生命力は、桁外れだ。

止まらない。停とまらない。留とまらない。

奴は、とまらない。

確実にぼくたちを殺す気だ。人を、勇者を、ぼくたちを殺す執念を感じた。

友奈「おおおお!!」

友奈さんが、真横から竜に突進した。

竜の体は何割か消し飛ぶが、瞬時に修復。そして、吹き飛ばされることもなく動じることもなくぼくと千景さんと杏さんとタマさんのいる此処こゝへと向かう。

——ミヨルニールの射程範囲に入った。

画面をフリック、そして下にスワイプ。詠唱。

武谷『『ミヨルニール』』

上空に出現した白い巨大魔方陣から、白雷が迸る。

一を必殺する雷槌が、竜型パーテックスに落とされた。

轟音轟雷。

竜は両手を頭上に掲げ、防御行動を取った。

直撃。

竜型バーテックスの両腕と頭が消し飛んだ。

だが、数秒も経たないうちに元通りへと直る。

一を必殺する雷槌は、必殺できなかつた。

命中、したというのに。

北欧神様、代償を払います。

ぼくは、何度も雷槌を放った。

竜型バーテックスはもう、眼前へと肉薄している。

その巨体に押し掛からただけでも、ぼくはあつさり死ぬだろう。

轟音。

轟音。

轟音。

ぼくたちの総攻撃力が、今竜型バーテックスに集中していた。

けれど。

それでも。

どれだけやっても。

奴は、とまらない。

竜の手が、ぼくの目の前にあつた。

武谷「あ」

死ぬ。

押し潰される。

そう思った。

まずは、ぼくを殺すのか。

妥当な判断だろうな。

そしたら、次は誰を殺すのだろう。

杏さんか、それとも友奈さんか若葉さんか、タマさんか、千景さんか。

誰も、殺させたくない。

新しい力。

間に合わない。

死は目前。

千景「宿れ——玉藻前!!」

たまものまえ

ぼくのそばには、千景さんの背中があつた。

千景 viewer

聖陵院くんが、狙われている。

聖陵院くんが、殺されてしまう。

聖陵院くんが、死んでしまう。

それを理解した時、私は自然と、三大悪妖怪最後の一角へと手を伸ばし、呼んでいた。

千景「宿れ——玉藻前!!」

今まで感じた事もない凄まじい力が私に降り、宿った。

背後に濃紫色のうししよくの狐の尾が九本顕現する。戦装束が濃く暗い色の着物のように変化。

大鎌が三倍ぐらいの大きさになり、刃がまるで獣の爪のように何枚も重ねられた。

私は聖陵院くんの前に立つ。

目の前には、竜型バーテックスの手。

あと一秒もない先に、私たちを潰す。

私は、九枚刃の大鎌を振り下ろした。

真正面の竜の手の平に、獣の爪の如く突き立てる。

重い……っ！

瞬時に、尾の八本を地面に突き立てた。

武谷「うわっ」

そして一本を、聖陵院くんに巻き付けて包む。

千景「あああああああ!!」

かなりの距離、地面を削りながら押された。

やがて、勢いは完全に止まる。

竜型パーテックスは、左腕を振り上げた。

そのまま振り下ろされたら、防げないかもしれない。

でも。

その腕が振り下ろされることはなかった。

竜型パーテックスの動きは、すべてが、完全に止まっている。

玉藻前の力だ。

伝承では、玉藻前は息絶えたとき、その直後に巨大な毒石に変化し、近づく人間や動物等の命を奪ったといわれている。

毒と呪い、それが玉藻前の特性だ。

呪い。

呪う。

呪う、呪う、呪う。

赦さぬ殺すという強い怨念。

何時までも何処までも呪い続けるという極上の黒い意志。

この九枚刃の大鎌に傷を負わせられた存在は、毒と呪いを受ける。

呪いが一瞬にして回り、竜型バーテックスのすべてを、驚異的な回復力をも蝕む。

竜の体は今、指一本動かせない。

千景「聖陵院くんは、私を守る……！」

一閃。

九枚刃の大鎌を振り抜く。

竜の体は、上下に断斬された。

呪いで殺し続けることによって、神级生命力を無効化する。

竜型バーテックスは回復ができず、消滅していった。

私は、聖陵院くんを守れた。

それを理解すると、意識は急速に遠のき。

暗い底へと、落ちた。

m a i n v i e w e r

また入院してしまったぼくは、病室のベッドに座りながら適当にスマホを弄いじつていた。

記憶に支障は、この前から大してない。

ドアがコンコンとノックされる。

千景「聖陵院くん、入っていいかしら……」

武谷「どうぞ」

スライドドアを開けて、病衣姿の千景さんが入室してきた。

彼女も今回の戦いで三大悪妖怪の力を使い倒れたため、入院している。

千景さんは倒れた後、目を覚ますのにぼくよりも時間がかかっていた。

……それでも今、ここにいる。

千景さんが近づいてくる。

そして、手を握ってきた。

小さく、柔らかい。

千景「これで私も、同じ場所に立てたかしら……」

死の直前に見えた千景さんの背中を思い出した。

武谷「千景さんが助けてくれなければ死んでいた、だから、ありがとう」

千景「うん……」

千景さんはぼくの座るベッドに腰掛けた。

千景「……生きてるわよね」

武谷「ああ、生きてるよ」

千景「ここにいてるわよね」

武谷「ああ、いるよ」

千景「よかった」

千景「触っていいかしら」

武谷「触る？」

千景「ええ、触る」

武谷「まあ、いいけど」

千景「いいのね」

武谷「いいよ」

千景「触るわ」

武谷「どうぞ」

千景「うん」

千景さんは手を伸ばし、ぼくの顔に触れる。

千景「体温があるわ」

武谷「なければ死んでるね」

徐々に下の手を持って行く千景さん。

千景「胸堅いわ」

千景「お腹引き締まってるわね」

千景「全体的に鍛えられてるわね」

千景「すう……すう……」

いつの間にか、千景さんはぼくの胸に顔を預け抱きつくようにして眠っていた。

あどけない寝顔は、幼子のようだ。

千景さんは寂しかったのだろう。

人のぬくもりが欲しかったのだろう。

不安、なのだろう。

ならばぼくは、好きにさせてあげよう。

ぼくは、ここにいます。

退院して数日経った頃。

ぼくは自室で、よくわからないものを見つけた。

黄緑色の、見ているだけで神聖さを感じる髪飾りが、机の棚の中にしまつてあった。これ、なんだ。

ぼくみたいな男が持っているには不自然な物。

これは女の子に似合う髪飾りだ。だからぼくのではないのだろう。

でもぼくが持っている。

消失した記憶の中に答えはあるだろう。

だって、感情が訴えている。これは大切なものだ。

とりあえずポケットに入れておいた。もしぼくが預かっているだけだとしたらいつか誰かが取りに来るはずだ。その時の為に肌身離さず持っていることにした。

まあ、まずは勇者たち六人に訊くところから始めよう。それで心当たりがなかったらそのまま所持する。

スマホの着信音が響く。

取り出して画面を見ると、千景さんから電話だ。

画面をタップし電話に出る。

千景『……聖陵院くん、今から私の部屋に来てくれる？』

武谷「千景さんの部屋に？ いいけど」

千景『それじゃあ、すぐ来てね……』
電話が切れた。

千景さんは理由を話していない。

……まあ、行ってみるか。

自室を出て廊下を歩き、階段を上り、廊下を歩き、千景さんの部屋の前に着いた。
ドアをコンコンとノックする。

武谷「千景さん、来たよ」

千景「……入っていいわよ」

と言われたのでドアノブを捻って入室――

パアンツ。パアンツ。

破裂音。断続的に破裂音が響いた。

それはクラッカーの音だ。

散った紙やテープが空を舞いぼくに掛かる。

千景「聖陵院くん、誕生日おめでどう」

友奈「たけくん誕生日おめでとー！」

若葉「武谷、おめでどう」

ひなた「武谷さん、おめでどうございます」

球子「武谷、おめでとうっ！」

杏「武谷さん、誕生日おめでとうございます」

皆笑顔でクラッカーをぼくに向けていた。

かなり驚いて硬直してしまう。

武谷「たん、じょう、び……？」

そういえば。

ぼくの誕生日っていつだ。

千景「そう、今日は聖陵院くんの誕生日……名簿を見て知ったわ」

名簿か。なら情報は確かだろう。

今日は、八月じゅういち一日。暑い夏の日。

そうか、ぼくの、誕生日なのか。

千景「このサプライズは、私の卒業式の時のお返しよ」

千景さんの卒業式……。

思い出せない。いや、記憶がない。

友奈「今日はたけくんのお誕生日会だよ、さあ座って座って！」

促されるまま腰を下ろす。

目の前には、華やかな光景が広がっていた。

色とりどりの料理に、テーブルの中央にはホールケーキが置かれている。ホイップクリームが塗られ様々なフルーツが乗っている。チョコプレートには「たけやくん誕生日おめでとう」と書かれていた。

室内の様相も変わっていた。煌びやかに飾りつけされている。折り紙で作る鎖みたいな飾りも四方八方にあった。

いつの間に作ったんだ。

千景「それでは、食べましょう」

それからみんなで食事をしていく。

ひなたさんが切り分けてくれたケーキを一口食べる。

武谷「うまい」

味が分からなくとも、凄く美味しいんだ。それは本音だった。

杏「みんなで作ったんですよ。千景さん凄く頑張っていました」

千景さんを見ると、顔を赤くして俯いていた。

食事も落ち着いてきた頃。

球子「それじゃあ、そろそろプレゼントタイムだっ」

タマさんがいきなりそう言った。

杏さんからは本人お気に入り小説を、若葉さんからは時計を、ひなたさんは力の籠

もったお札の入ったお守り、タマさんからはアウトドアチェア、友奈さんからは指ぬきグローブを貰った。

武谷「ちよ、ちよつと、みんなこれ本当に貰っていいの……?」

一部高そうなのが混ざっている。申し訳なくなってくるのだけど。

若葉「誕生日なんだ。素直に受け取れ」

友奈「そうそう、誕生日のたけくんは、今日は王様みたいなものなんだから」

ひなた「むしろ貰ってくれない方が悲しくなりますよ」

球子「どーんと構えてろっ」

杏「読んで感想聞かせてほしいです」

武谷「う、うん」

静々と千景さんが包装紙に包まれた箱を取り出した。

千景「聖陵院くん……私のプレゼントは、これ……」

受け取った箱を包装紙を剥がし開けると、ゲームソフトが入っていた。

千景「……前に、もうすぐ発売だから買ったら一緒にやりましょうと言っていたゲームよ……」

ぼくの記憶には、ない。消えてしまったのだろう。

千景「覚えていなくてもいいわ……一緒に遊びましょう」

武谷「……うん」

武谷「ありがとう、みんな」

こんなに盛大に祝われたのは、他の記憶にはない。

友奈「たけくんと一緒に、本当に色々あったんだよ」

友奈「楽しいこと、いっぱいあったの」

友奈さんは優しげに笑んでぼくを見ていた。

千景「聖陵院くんと過ごしたこと、話しましょう」

ひなた「それはいいですね。写真もあるので見ながらで」

ひなたさんがアルバムをどこからともなく取り出した。

ページを開いていく。

ひなたさんが一つの写真を指差す。

ひなた「この写真は、四国への最初の襲撃を退けたときのですね」

その写真にはぼくを含めた七人が写っていた。

若葉「リーダーと副リーダーを決めたな」

杏「そうですね。少し前のことなのに、懐かしいです」

千景「これ、高嶋さんと三人でプリシーを撮ったのよ」

友奈「あの時も楽しかったね」

千景さんはスマホの背に貼ってある小さな写真を見せてきた。

武谷「あ、それならばくのスマホにも貼ってあるよ」

千景「貼っててくれたのね。嬉しいわ……」

友奈「お揃いだね！」

ひなた「川で水浴びをしたこともありましたね」

杏「あ、あのときは……」

杏さんはなぜか顔を赤くした。

杏「お花見も、しましたね……」

若葉「ああ、綺麗だった」

球子「うむ、美味かったな」

杏「タマつち先輩は食い気の方が大事なんだね」

友奈「これが、ぐんちゃんの卒業式の時の写真だよ」

友奈さんが指差した写真で、千景さんが微笑んでいた。

それから、色々な話を聞かせてもらった。

でもぼくは、それを全部、忘れてしまった。

友奈「思い出はこれから作っていけばいいんだよ。私たちは生きるんだから」

千景「そうよ……ずっとそばにいてもらうんだから」

その二人の言葉が、耳に胸に心に、すつと入ってきた。
じんわりと、暖かく広がる。

球子「そういうえば、タマにも三大悪妖怪みたいな使えないかな」

杏「ここ最近のパーテックスは、三大悪妖怪の力でないと倒せないほど強大きを増していますからね」

ひなた「すでに大社に確認してみましたが、今の時点では三大悪妖怪以上、または同等の精霊はいないそうです。勇者システムのアップデートは進んでいるようですが、いつになるかはわかりません」

球子「そうか」

球子「なら、もつと強くなる」

タマさんは静かに、しかし強く、瞳と声音に乗せて宣言した。

ひなた「それと、結界の強化が、今儀式をしたりして準備が進められていますから、それが成されたら、もうパーテックスの侵入を許すことはなくなりませう。少なくともあと数十年は」

ひなた「北欧神様の協力もあって、かなり強力な結界になるみたいですから」

ひなた「だから、みんなが戦うのはその時に終わりです。勇者の御役目は次の世代へ

渡りますので」

若葉「あともう少しの辛抱ということか」

杏「それなら、希望が持てますね」

友奈「うん！ あともう少し頑張るだけだもんね！」

千景「あと、少し……」

球子「強くなって、守ればいいだけだ。なあに、タマに任せタマえ」

武谷「そうか、もうすぐ終わるのか……」

感慨深く思っていると、訊くことがあったのだと思いつく。

武谷「これって、ぼくの部屋にあったけど、誰のなのかな？」

ポケットから黄緑色の髪飾りを取り出してみんなに見せた。

若葉「——あ………」

千景「……？」

球子「武谷のじゃないのか？」

杏「見たこと、ありませんね……」

友奈「綺麗な髪飾りだけど、誰かへのプレゼントだったとか？」

ひなた「……これは、もしかして」

みんな、本当に知らない様子の中、若葉さんとひなたさんが反応していた。

若葉「——それは、武谷が持っていたのだろうか？」

武谷「うん、まあ、ぼくの部屋にあったよ」

若葉「なら、武谷が持っていてくれ」

若葉さんの表情は、優しげだった。

それを見てみると、言う通りにするのが正解なのだろうと思えてくる。

武谷「じゃあ、そうするよ」

若葉「そうしてくれ」

パーティーは最終的に、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎになった。

みんな、少しはつちやけ過ぎてる節があったが、今はそれくらいが丁度いい。

22話 北欧の死者王 ヘル・ナグルファル・バーテツク ス

誕生日パーティーから数日後の夕暮れ時。

樹海化が起きる。

神樹様の創り出した結界、樹海へと世界は変貌する。

見渡す限り根ばかりの先を見据えた。

ゴウンゴウン。重低音が連続的に響く。

それは遠くから来る音。

ゴウンゴウン。

視界に映るは、人類の敵バーテツクス。天の神の尖兵。

今から、ぼくたちが殺す相手だ。

重低音を響かせる深淵色しんえんしよくの船のような形状、その船と一体化している左右半身白黒の

骸骨のような無機物を感じさせる上半身。

巨大な骸骨型バーテツクスが、空飛ぶ船に乗り襲来する。

若葉「降りよ——大天狗!!」

友奈「来い——酒呑童子!!」

千景「宿れ——玉藻前!!」

若葉さんが翼を生やし天狗のような装束に変化、大太刀を構える。友奈さんが赤い二本角を持った鬼の装束に変化、大きな手甲を握り締める。千景さんの背後から九本の紫色の尻尾が現出、装束が着物のようになり、九枚刃の大鎌を携える。

ぼくはスマホの画面中央に存在する黄金色の魔方陣を上にはスワイプする、画面上端にある歯車型の魔方陣と噛み合い高速回転、綺麗な音色が鳴り、巨大魔方陣が目の前に出現、その中心から黄金槍の穂先が顔を出す。

詠唱を紡いだ。

武谷『『グングニル』』

轟音。轟雷。

射出された黄金槍は瞬く間に突き進み、骸骨の胴体に至る。

——グングニルが消えた。

いや……。いや、違う。

擦り抜けた。

黄金槍は骸骨の体を擦り抜けて、彼方へと進み消えていったんだ。

つまりグングニルは全く効かなかった。傷一つ付けられなかった。

武谷「……………」

敵の強さの上がり具合から、そんな予感はしていた。

もう、グングニルの力はバーテックス共にあまり効果がないのかもしれない。

でも、ミヨルニールならどうだろう。

まだぼくは戦える。

振動。震動。骸骨型バーテックスが全身を鳴動させていた。

骸骨の下半身である船から、大量の何かが降りてくる。

それは人型の骸骨の形をしていた。それは全て、バーテックスだ。

骸^{むくろ}の軍勢は空を飛びこちらへ進軍してくる。

その数、恐らく数万はいるだろう。

若葉「いくぞ！」

三大悪妖怪を宿した三人が飛び立つ。

飛翔し、跳び走り接近する。

軍勢と三人が接敵した。

大太刀で斬り伏せ焼き焦がし、深紅の手甲その一撃で何体もの骸を砕いた、九枚刃の

大鎌が振るわれる度に呪いを撒き散らし周囲の骸骨を塵へと変えていく。

骸の軍勢は絶え間なく増え続け、もはや骸骨の壁と化している。

皆が動き回っているのです、迂闊にグングニルは撃てない。ある程度雷撃の操作はきくがあれば遠距離一点特化であり、遠距離範囲攻撃でもあるんだ。皆に当たりかねない。杏さんが雪女郎を宿し、一点集中のレーザーのように猛吹雪を撃ち出す。タマさんが輪入道を宿し、炎纏いチエーンソウのように刃を回転させる旋刃盤を自由自在に走らせる。

骸共は凍り、燃え、消えていく。皆によつて確かに軍勢は減らされていった。

だが、多い。全滅はまだだ。

船と一体化している本体をミヨルニールの射程範囲内に入れるのは、この骸の軍勢をどうにかしなければ不可能だろう。

骸共もただやられていくわけではない。その腕を振るい、足で蹴りつけ、噛みつく。人など容易に一撃で四散するだろう攻撃を軍勢の数で絶え間なく繰り出す。

前線で戦う三人は、まったくの無傷ではいられなかった。骸の攻撃が掠り、傷ついていく。

それでも皆の攻勢は止まらなかった。

若葉さんが大量に生成した炎で周囲一帯の骸を焼失させる。友奈さんが拳を瞬時に連続で放ち、周囲の骸を殴り碎き続ける。千景さんが高速で回転しながら大鎌の九枚刃

を獣の爪のように走らせ、呪いと毒を撒き散らし斬り捨て機能を停止させ化け物の命を散らせていく。杏さんが吹雪を一転集中させた一射を何度も撃ち凍結させていく。タマさんが旋刃盤を縦横無尽に動かし斬り刻み焼き尽くす。

減って行く。着実に敵は減って行く。

——やがて。

視界を埋め尽くすほど存在した壁の如き骸の軍勢は、全て彼女たちによつて倒された。

前線にいた千景さん、友奈さん、若葉さんの三人は傷を負っているが、あとは滞空したまま動いていない上半身白黒骸骨下半身深淵色の船のバーテックスだけだ。

三人があまり骸を後ろに通さなかったおかげで、ぼくも杏さんもタマさんも傷を負っていない。

武谷「ぼくをあいつの元に運んでほしい」

杏「ミヨルニールを当てるんですね」

武谷「うん」

球子「そういうことならタマに任せタマえ」

そう言つて、タマさんがぼくを抱え、前方に跳んだ。

直後。

——心臓が縮み上がった。

背筋が凍り凍えた。

ドクンドクンバクンバクンバクン。

船骸骨型バーテックスが、鳴動、先よりも大音を響かせながら深淵色の船を震動させていた。

瘴気が、闇が、死が、地獄から這い出し舞い戻ってくる。

終わったものが蘇る。

白黒骸骨の船から生じ、降り立つ者達。

反射板を持つ棒状のバーテックス、大口だけの無数の矢を放ってきたバーテックス、高速で地を走ってきたバーテックス、全身氷のバーテックス、全身溶岩のバーテックス、巨人バーテックス、サソリ型バーテックス。世界樹のような蛇バーテックス、六つの頭を持つ怪物、大狼型バーテックス、竜型バーテックス。

今まで倒した化け物共が、降ってくる。

武谷「……うそだろ」

球子「ははは、ぶつたまげた……」

先の骸の軍勢は、こて試し程度でしかないのだろう。

その骸達は倒したが、皆は消耗している。

消耗しているところに、この全戦力で一気に潰すつもりなのだ。

友奈「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

若葉「うおおおおおおおおおおおおおッ!!」

千景「あああああああああああああッ!!」

武器を携え、気合いの声を張り上げながら皆が立ち向かっていくのが見えた。

ぼくは真つ先に、毒津波を使う世界樹のような蛇バーテックスに対処した。それ以外は考えられなかった。今最も危険だと思ったから。だから他の敵の対処は何もできなかった。皆に任せるしかなかった。

代償を払い、自分の中の何かが揺らぎ、グングニルを連射する。

連射、速射、連射、速射、連射連射連射。

球子「うおおおおおおおおおッ!!」

ぼくを抱えていたタマさんが決死の声を発したことを認識する。

ぼくたちと敵の攻撃が飛び交い合い、轟音が鳴り響き続け、何もわからない。

視界が、世界が、光に染まる。何も見えない。

自分がどうなっているのかさえ、わからなくなつた。

視界が戻ってきた時には、ぼくは倒れていた。

周りを見る。

タマさんがすぐ近くに血だらけで倒れていた。

その傍には楯が無残に壊れて転がっていた。

ぼくには大して傷がない。つまりタマさんが守ってくれたんだ。死力を尽くして、護ってくれたんだ。

タマさん、生きてるよな。

生きろよ。死ぬなよ。死んでたら、だめだ。

他を見る。

みんな、倒れていた。

血を流し倒れていた。

千景さんも、血だらけだ。

千景さんが、死んでしまうかもしれない。

スマホはぼくの手からなくなっていた。北歐勇者システムを起動させる装置であるあの特殊なスマホがなければ、グングニルもミヨルニールも撃てない。

空を見る。綺麗な色の空だ。青くはないけれど。

化け物共は、健在だった。

何体か減っているけれど、船骸骨も、サソリも、竜も、大狼も、六つ頭も、生き残っ

ている。

ぼくは、絶望を感じた。

——けれど。

それを吹き飛ばす方法を、ぼくは。

船骸骨型バーテックスの顔、その口から、白黒の光が瞬いていた。光は徐々に大きくなっていく。

それは、見るからに攻撃の溜め動作だった。

その銃口は、最も近くにいた千景さんに向いている。

彼女は立てるようには見えない。

なんとか立ち上がろうとはしているようだが、立てていない。

間に合わない。

ぼくは走っていた。

考える前に、ただ体を動かしていた。

千景さん。千景さん。千景さん。

——犬吠埼さん。

知らないはずの人。知らない人。犬吠埼さん。
いや。

武谷「千景さん！」

千景さんの元に辿り着き、彼女の体を抱え上げ、全力を尽くして、火事場の馬鹿力も無意識に発揮して、遠くへ投げた。

千景「せい、りょういん、く……！」

千景さんは驚いた顔をしていた。

心配しないで。

ぼくも死ぬつもりはない。

千景さんを投げると共に、ぼくもその場を離脱するために跳び走っていた。

白色と黒色が混ざり合った閃光が、骸骨の口から放たれる。

それは刹那の間にこちらへ降り注ぎ至り。

ジュツ。変な音がした。

爆発。轟き響き劈く音。

ぼくは強い衝撃に吹き飛ばされた。

千景さんの傍に転がり落ちる。

千景「あ……あ、ああ……あああ……」

動けない。

千景「聖陵院くん……腕が……」

目だけを動かし見やる。

ぼくの右腕は無くなっていた。

そこから血が噴き出している。

全身ボロボロだ。ぼくも血だらけだ。

動けない。立てない。

痛みすらない。意識が。

千景「聖陵院くん……聖陵院くん……死なないで……死なないでよ……」

千景さんは、ぼくに縋りついて涙を流していた。泣いていた。

ぼくは、君を笑わせたい。

武谷「死な、ないよ」

武谷「約束、したから」

だから、死なないために。

まずは、敵を殺そう。

祈り願う、ぼくの神に。北歐神様に。

これを受け取れば、君はもう戻れない——そう云われた気がした。

それでも、ぼくは帰る。

千景さんを笑わせるんだ。千景さんを幸せにするんだ。

だから、力を下さい。

雷が、降りた。

恵みをもたらす力と祝福の雷が、ぼくへと降り注いだ。

神の力が、今までよりも膨大に、特大に、魂から一体化するほど宿る。

神に感謝を。

千景「聖陵院くん……」

ぼくは立ち上がる。

無くなっていた右腕がいつの間にか存在していた。血だらけの全身も今は傷一つ無

い。

ぼくの装いに変化が生じていた。

黄金のような色を湛えたコートを磨なむかせる。

ぼくはここで、初めてみんなのように変身をしたのだ。

武谷「顕現けんげんせよ——グリームニル!!」

ぼくの手には、ひと振りの剣が握られた。

雷纏う黄金色の西洋剣。神劍しんけんグリームニル。

千景さんを見る、彼女はぼくを見上げていた。

武谷「誰一人、いなくならせはしないから」

武谷「もちろんぼくも、いなくならない」

神劍を携え、ぼくは飛んだ。

そう、跳んだではなく飛んだ。

自身の性質を雷と化し、神速で空を駆ける。

サソリ型バーテックスへ肉薄し、グリームニルを一閃。神の雷が迸る。

芯から雷により焼き尽くされたサソリ型は消滅した。

間髪入れず刹那の間に竜型バーテックスへ至る。

光輝こうきを残した斬撃を揮う。

不死に近い生命力を誇った竜型は、その一撃で神の雷により消滅した。

目の前には大狼型バーテックス。振るわれる鋭い爪、避けた。雷閃。黄金の剣で斬り伏せる。

焼き尽くされ消失する。

霜の光線を、その身を雷と化し避けながら、神速で接近、六つの頭を持つ怪物にグリームニルを突き立てた。

内部から神の雷が全身に奔り抜け、六つの頭は一瞬にして全て爆散した。
消滅する。

最後は。

下半身深淵色の船、上半身白黒骸骨の化け物だ。

放たれた白黒の閃光を避け、船骸骨型パーテックスの頭上へ到達。

雷纏う黄金の剣を振り上げ、一気に地面に降りると共に振り下ろす。

神の雷が溢れ迸り斬閃が光を残した。

地に足が着いた時、船骸骨型は真つ二つに別たれていた。

神成る剣は、かみな全てを切り裂く。

奴の存在概念ごと斬った。

故に、生と死の両方の概念を持ち、完全な不死を体現していた船骸骨型パーテックスは消滅する。

神剣グリームニル。

これは、短時間限定の強力無比な力だ。

そして、今いる全ての敵を斃したことで、この力は役目を終える。

ぼくの短い変身は解けた。

黄金の剣と、黄金のような色を湛えたコートが靡きながら粒子となって消えていく。

北歐神様、ぼくを戦わせてくれてありがとう。

みんなを守らせてくれてありがとう。

そうしてもらえなかったら、ぼくたちはここで死んでいた。

だから、最大限の感謝をする。

変身が、完全に解けた。

同時。

ぼくの全身から血が吹き出た。

体に力が入らなくなつて、倒れた。

感覚が、壊れる。

意識が、無くなる。

千景「つ聖陵院くん……!!」

千景さんの声が聞こえた。

23話 平成最後の戦い

千景「聖陵院くん……」

私は面会謝絶になっている病室の前にある長椅子に膝を抱えて座っている。

戦いが終わって目覚めるまで私を含め五人は数日かかった。

でも、聖陵院くんだけは未だに目を覚まさない。

もうすぐ、あと少しで結界が完成する。そうしたらもう戦闘はしなくていい。

だから、私たちの戦いは終わったのかもしれない。

でも、聖陵院くんはまだ眠ったまま。

聖陵院くんはもう二度と目を覚まさないかもしれないと、大社の人は言っていた。

千景「……………」

みんなも来ていたけれど、今はここにいない。

私は病室を出られるようになってから、ほとんどずっとここにいます。

若葉「千景」

声の方向に視線を向けると乃木さんが立っていた。

乃木さんは全身包帯だらけで病衣姿だった。

私も包帯だらけで病衣姿だけれど。

若葉「みんな休憩所で集まっている。千景も来ないか？」

千景「……ここにいるわ」

若葉「そうか……来たくなったらいつでも来てくれ」

千景「ええ……」

乃木さんは去っていった。

静かで薄暗い廊下が戻ってくる。

千景「聖陵院くん……」

——もちろんぼくも、いなくならない。

いなくならないっていったじゃない。

——うん、いるよ。約束する

いるって約束したじゃない。

千景「……」

友奈「ぐんちゃん」

千景「……高嶋さん」

今度は高嶋さんが立っていた。

高嶋さんも例に漏れず包帯だらけの病衣姿だ。

私の隣に座ってくる。

友奈「そりゃー！」

唐突に抱きついてきた。

千景「た、高嶋さん……!?!」

戸惑っている。

友奈「大丈夫、きつとたけくんは約束を守るよ」

高嶋さんは、そう言った。

千景「……………」

友奈「きつと、絶対、大丈夫」

千景「そんなの、保証がないわ……………」

友奈「そうだね。でも、私は信じるよ。信じないと、始まらないもん」

千景「……………」

千景「……………そう、ね……………」

それから数日経った。

私はずっと、聖陵院くんが眠る病室の前にある長椅子にいる。

今日、結界の完成は間近だという報告が上里さんから聞かされた。

乃木さんが近くにいた。

若葉「なあ千景、今日くらいは、いや、一回だけでも向こうに来ないか？」

千景「いかないわ……」

若葉「……そうか」

乃木さんはそれで立ち去ることなく、私の座る長椅子の隅に腰掛けた。

無言で静寂の時間が過ぎて行く。

いつの間にか、遠くから聞こえてくる足音や人の声すら聞こえなくなつて。

――。

おかしい。

まったくの、無音。

それは、多くの人が存在するこの病院ではありえないはず。

乃木さんを見る、乃木さんも私を見ていた。

若葉「来る、みたいだな」

その一言を皮切りに、視界が光に包まれていった。

樹海化。世界が幻想的に染まっていく。

まだ、終わっていないかったのだ。

結界は完成間近、すぐに完成する。

だから、これが、最後の戦い。

若葉「千景、戦えるか」

千景「愚問ね……当たり前じゃない」

聖陵院くん、私勝つから、だから、戻って来て。

スマホの画面をタップして変身した。

みんなが合流してくる。

杏「まだ怪我が治りきってないのに……」

球子「タマの旋刃盤も完全に直りきってないんだけどな、まあ、しょうがないか」

友奈「大丈夫、みんなで頑張れば、絶対乗り越えられるよ」

全員包帯だらけの姿だ。

壁の先、視界の奥からは人類の敵が襲来する。

その光景は、目を疑いたくなくなった。

無数の節に分かれた長い体を持つパーテックス、四本の角を持つパーテックス、巨大な二つの水泡を従えたパーテックス、魚のように地を泳ぐパーテックス、膨らんだ下腹

部を持つ異形のバーテックス、棒のようなものを周囲に無数に従えたバーテックス。それらは全て火と氷を宿し纏っていた。

そして、以前結界の外で相対した超巨大バーテックス二体。

太陽そのもののような円環に牙を持つバーテックス。

強烈に光り輝き、女神像のような姿をしたバーテックス。

これらが、敵の全戦力だ。

若葉「多いな」

千景「ええ」

杏「すごく強そうですね」

球子「そうだな」

千景「実際以前敵わなかったやつが二体いるわね」

友奈「そうだね」

若葉「だが」

友奈「勝つ！」

球子「ああ！」

千景「ええ！」

杏「これ乗り越えれば、終わりですからね」

若葉「その通り！」

若葉「みんな、行くぞ！」

「「おう!!」」

若葉「降りよ——大天狗!!」

友奈「来い——酒呑童子!!」

千景「宿れ——玉藻前!!」

私の背後に濃紫色の九本の尾が顕現し、勇者装束が着物のような装束に変わり大葉刈が九枚刃の大鎌に成る。高嶋さんの勇者装束が深紅に染まり赤い角と巨大な手甲が現れる。乃木さんの勇者装束が天狗のような意匠いしょうに変化し、漆黒の翼を一对生やして大太刀を構える。

私を含め三大悪妖怪を宿した三人が接近していく。

翼を持ち最速の乃木さんが一番槍と成った。

だけど敵に攻撃できる範囲に行く前に、光り輝くバーテックスの纏う光が瞬いた。

それは変質し、刃へと。

斬。巨大な光の刃が振り下ろされる。

その斬閃は、そのまま神樹様の元まで届きそうなほど長く巨大すぎた。

これを避けたら、神樹様が殺されるか多大なダメージを受けるだろう。

乃木さんもそう判断したのか、瞬時に対応した。大太刀を切り上げ光の刃に真つ向から対抗する。

だがすさまじい勢いで押され地面に足が着いた。その地面が陥没する。

友奈「手を貸すよ若葉ちゃん！」

千景「はあっ！」

押し切ろうとする特大の光の剣に高嶋さんの赤い拳と私の九枚刃の大鎌を振り上げぶつけ加勢した。

重い。

重い、けど、耐えられないほどじゃない。

「「ああああああ!!!」」

三人とも吼え、力を入れ、光をかち上げた。

光の刃は霧散する。

バーテックスに接近しようと動き出したところで、間髪入れずに敵の攻撃はすでに迫っていた。

巨大円環に牙を持つバーテックスが生成した太陽のような巨大な焰の球体が目の前にある。

凄まじい熱さを感じる、この攻撃も前に見た、確か大地が根こそぎ焦土と化し、着弾

した一帯を地獄に変貌させていた。先の攻撃と同じで、避けたら神樹様はただでは済まないはず。

また三人でそれぞれの武器を揮った。

衝突し、押されるが、何とか踏みとどまる。

「「おおおおお!!!」」

眼前の燃え盛る太陽を、大天狗の業火で、酒吞童子の超威力で、玉藻前の呪いで対抗、全力でぶつける。

太陽は消失した。

だけど、二連続で高威力の攻撃を防いだことで、疲労が激しい。

無数の節に分かれたバーテックスが雷撃を発した。それには火と氷が絡まっている。

球子「タマに任せろおお!」

炎を宿し刃を回転させる旋刃盤が雷撃と私たちの間に割り込んできた。

その二つは威力を殺し合い、雷撃は消え、旋刃盤は跳ね返される。

だがその旋刃盤は土居さんの意思でいかようにも動く。飛空し土居さんの元に戻っていった。

膨らんだ下腹部を持つバーテックスの下端にある銃口のような穴から、火と氷を纏った丸いものがいくつも発射される。

杏「凍って！」

伊予島さんが放った猛吹雪に触れた丸いものは、その瞬間に爆発した。

その爆発で吹雪が散らされていくが、爆発の衝撃は吹雪により防がれる。突然。

うまく立ってられないほどの地震が起きた。

四本の角を持つバーテックスが地面に角を突き刺し震動しているのが見える。

あのバーテックスがこの地震を起こしているようだ。

空を飛んでいる乃木さんには効いていないようだけど。

目の前に、水の塊が迫っていた。

巨大な二つの水泡を従えたバーテックスから射出されたものだ。

私と高嶋さんは地震に隙を作られ、避けられなかった。

千景「がぼっ……っ！」

全身が超常の水に包まれる。

この水の中には火と氷が流転るてんしている。息ができないだけでなく体を焼かれ凍らされていく。もがこうにも火と氷に阻まれる。

私と高嶋さんを閉じ込めていた水泡が一瞬にして霧散した。

乃木さんが大天狗の炎を放ち水泡を蒸発させたのだ。

友奈「助かったよ若葉ちゃん」

千景「悪いわね……」

若葉「気にするな、やるぞ」

乃木さんが最も近くにいた水泡を従えるバーテックスに肉薄した。

大太刀を構え突撃し、攻勢に入る。

バーテックスに刀が届かんとした時、その前に板が割り込んだ。

棒のようなものを周囲に無数に従えたバーテックスの棒が展開した白い板が乃木さんの刀を受け止めた。

その板は、乃木さんの一撃を受けても壊れていない。

地中を潜行していた魚のようなバーテックスが地上に飛び出し、火と氷を周囲に渦巻かせ乃木さんに勢いよく突進してきた。

乃木さんは翼をはばたかせ、その機動力で後方に回避する。

攻勢の出鼻は挫かれた。

光が瞬く。光り輝くバーテックスから発せられている光が変質、特大な剣状と化す。

地平線の先まで切り裂く光の剣が振り落とされる。

あれを神樹様に届かせるわけにはいかない。

私は九枚刃の大鎌を先と同じように全力で振り上げた。高嶋さんと乃木さんも同じ

ように光の剣に手甲と太刀を打ちつける。

強い衝撃、しかし押される、圧おされる。

地面が割れる沈む、身体が軋む。

耐えて力を衝突させていると、光の剣はやがて消失する。

千景「くつ……」

三大悪妖怪を身に宿していることによる反動、敵の攻撃を耐えたことによる疲労が襲い来る。それは高嶋さんも乃木さんもだ。

なんとか攻撃を当てなければ。先から敵の攻撃を凌いでいるだけで体力が削られていつている。

敵の猛攻は続く。

無数の節に分かれたバーテックスが火と氷を含んだ雷撃を、膨らんだ下腹部を持つバーテックスが火と氷を纏った爆弾を、四本の角を持つバーテックスが地面に角を突き刺し地震を、二つの水泡を従えたバーテックスが水泡を、射出する。

基本は避けることを意識して、避けられないものは流し、防いだ。

体力は消耗されていく。身に余る力で身体にダメージが蓄積されていく。

それでも攻撃するために敵に近づこうと前に足を踏み出して進む。

円環に牙を持つバーテックスが燃え盛る太陽のような火炎球を発射する。

避けてはいけない。人類を終わらせない為には防ぐしかない。
先までと同じように防いだ。

火炎球を消すことはできた。

しかし、私たちはボロボロだ。

疲労と傷と力の代償が蝕んでいる。

千景「聖陵院くん、私、負けないから、私だって、強いから……！」

友奈「負けるもんかああああ！」

若葉「化け物共に、いつまでも後れを取ってられるか！」

杏「絶対に、生きて帰るんです！」

球子「タマだって、強くなるんだっ！」

けれど敵に攻撃できなければ倒すこともできない。

だから。

刹那の間に、気力と全力と本気を発揮させ、神速、高速で動いた。

すでに敵には接近している、ただ強く跳ぶだけで、武器を届かせることができた。

気合い。決死の反撃。最高の猛攻。猛り叫ぶ。

ボロボロの状態からの高速の動きに、バーテックスたちは対応できなかつた。

九枚刃の大鎌を揮い、刃を突き立て、呪いを送る。白い板——反射板はそれで消滅し

た。そのまま何度も振るい、反射板すべてを呪い殺し、本体に刃を一閃させ、斃した。すかさず地面に大鎌を振り下ろし刃を突き立てた。

呪いを地中に送り、潜行する魚のようなバーテックスに命中させる。

呪いに苦しんで地中から飛び出してきたバーテックスに大鎌を振り抜いた。真つ二つに別れたバーテックスは消滅する。

乃木さんは神速で飛翔し、水泡を従えるバーテックスに肉薄、大太刀を一閃、水泡を従えるバーテックスは焼き尽くされ焼失した。

更に間髪入れず大天狗の炎を四本の角を持つバーテックスに津波のように放ち、炎で包み全身を焼き焼失させた。

高嶋さんは膨らんだ下腹部を持つバーテックスに肉薄、バーテックスの白い巨大な帯で薙ぎ払われる、高嶋さんは右の赤い手甲を握り締め殴りつけた。白い帯は千切れ飛ぶ。そのまま左の拳をストレートに発射し、爆弾を射出していた銃口を砕いた。二度三度本体を殴りつけ壊し倒した。

止まらず跳躍し、無数の節に分かれたバーテックスへと殴り掛かる。殴り粉碎したそばから無数に別れ増殖していくバーテックス。だが殴る、殴る、何度も強力無比の力の権化、酒呑童子の超火力で殴り続ける。直ぐに跡形も無く、増殖したバーテックスは一体も残らず消滅した。

私たちの猛攻の間、土井さんと伊予島さんは自由自在に跳ぶ旋刃盤と吹雪で、敵をかく乱、隙を作り出し、超巨大バーテックス二体への牽制までやってのけた。

残るは、超巨大な二体のみ。

私たちは再度気合を入れ、攻勢に出ようと武器を構え接近する。

光。

光が、迸った。

思わず目を開けていられないほどの光。

目を庇った。

光が治まり、視界がまともになった時には、先程の攻勢で倒したバーテックスが全て存在していた。

千景「……………」

そのバーテックスたちは、ただ元の状態になっているわけではなかった。視覚的にもうわけがわからないことになっていた。火と氷と光が渦を巻き姿の輪郭さえ朧げな怪物と化している。

先の光も、今複数のバーテックスが纏っている光も、光り輝くバーテックスと同じものを感じた。

あいつが、何かをしたんだ。

この程度で、絶望してられない。

今までの戦いだって厳しかった。今さら驚いている場合じゃない。

倒す、それだけ。

私は大鎌を握り締め、光り輝くパーテックスに向けて跳躍接近肉薄する。

乃木さんも高嶋さんもすでに動いていた。

気づいたら、無数の火と氷を螺旋状に纏わせた光の矢が迫っていた。

壁の外から、新たな二体のパーテックスがやってきている。

一体は、巨大な口と、そこから生えた巨大な矢を持つ個体。

もう一体は、黒い。ただ、ただただ黒い存在だった。輪郭は人型の、黒い巨人。黒い

者は右手に太陽のように輝く炎の剣を携たずさえている。

この無数の矢は、巨大な口と矢を持つ大型個体が差し向けたものだろう。

奇襲。不意打ち。そんな言葉が頭を駆け抜けて消えていった。

大鎌を振るい、九本の尻尾で矢を払うが、全てを捌けない。

腕に、足に、刺さり貫かれる。

肉体が焼ける凍る熱い冷たい。

黒い者が、炎の剣を大きく薙ぎ払った。

痛くて、隙が出来て、反応はギリギリしても、力が入らなかった。

大鎌と九本の尾を楯に、衝撃を殺せず叩き飛ばされる。

炎の剣に宿る炎は、私の体を焼いた。

視界に入る高嶋さんも乃木さんも、奴らの攻撃に傷を負っていた。

黒い者が持つ炎の剣が振り下ろされる。

それは伊予島さんを狙っていた。

土居さんが伊予島さんの前に立ち、旋刃盤を楯状にして決死の表情で受け流していた。

楯は瞬時に半壊され、その破片と共に土居さんは吹き飛んでいた。

地面に叩きつけられ転がる。傷を負い、疲労度が高く、玉藻前の力の反動が襲う、身体に力がうまく入らない。

それでもすぐに立たなければ。倒れたままでは、殺してくださいと言っているようなものだ。

でも、流石にすぐには立てなかった。

光。

瞬く光。

天まで届く特大で超巨大な光の剣が、光り輝くバーテックスによって顕現していた。振り下ろされる。

私に。

今、私は防衛行動も回避行動もまともに取れない。

私は、勝つて、聖陵院くんの元に帰る。

そして、聖陵院くんに戻って来てもらう。目覚めると信じる。

だから、絶望もしないで、絶対に諦めない思いを持って全力で抗った。

それでも、敵は強大で。

圧倒的な化け物たちにはそのうえで敵わない。

今ここで無残に、死にかけている。

聖陵院くん、私、一緒にいたい……。

聖陵院くん……聖陵院くん……聖陵院くん……。

破滅の光が、視界を埋め尽くした。

main viewer

地獄の底から這い上がるように、意識が不鮮明ながら、強制的に取り戻された。白い天井がぼんやりと見える。

助けないと——。

みんなが、千景さんたちが危ない。

それがわかった。

世界は樹海化している。幻想的な色合いの世界、病院内を根が張っている。行かなければ。

体に力を入れる。

立てない。

どれだけやつても、まともに動けない。

見ると、右腕がなかった。

それでも立て。

そうしなければ、誰も助けられない。

柔らかい光が視界に入る。

傍らの棚に置いてあった髪飾りが光っていた。

それを呆然と見ていたら、誰かと意識が繋がる感覚が刻まれた。

「ハロー武谷。お久しぶりね」

いつの間にか、ベッドの傍に半透明の体をした少女が立っていた。

肩口までのショートな緑がかった黒髪に、同じ色の瞳、どこかの制服を着ている。

武谷「誰、ですか？」

なんだか、この子を見ていると目の奥が熱くなってくる。

「あ、そういえば覚えていないんだったわね」

「それじゃあ心して聞きなさい。私の名は白鳥歌野、あなたのフレンドよ」

24話 勝とうよフレンド

武谷「フレンド？」

ぼくの友達、味方。記憶にないが、この人がそう言っているのなら友達なのだろう。

歌野「そう、フレンドっ」

につこりと笑う白鳥歌野さん。

……………。

そうだ。突然の出現に意識を取られていたが、今は早くみんなの元に行かなければならないんだ。話している時間などない。どうして半透明なのかとか、どうしてここにいるのかとか、今はそれもどうでもいい。

武谷「……………」

くそ。立てない。座ることすらできない。

「私に任せてください」

声の方を見ると、また別の半透明の女の子がいた。

茶髪のショートで柔らかい顔をしている、神聖な巫女服を着ていた。

武谷「君は」

「初めまして、藤森水都です。諏訪で巫女をやってみました」

武谷「巫女……」

水都「はい。うたのんは——ここにいる白鳥歌野は諏訪の勇者ですよ」

歌野「そして私とみーちゃんもフレンドよ」

武谷「そうか……」

みーちゃんというのは藤森さんのことだろう。

水都「では、今からうたのんと聖陵院さんの魂を同期させます」

よくわからないことをいわれた。

武谷「それをする、どうなるの？」

水都「聖陵院さんは動けるようになって、戦えるようになります」

武谷「なら頼む」

この二人は、信頼も信用もできると思った。感情がそう訴えてくる。

藤森さんはほくに両手のひらを向け目を閉じた。

黄金色の光が、その手のひらから発された。光は広がり、ぼくと白鳥さんを包む。

足りないものが満たされていく感覚がした。白鳥さんを、先よりも更に近くに感じ

る。

やがて光は収まった。

水都「これで、動けるはずですよ」

左腕を支えに体を起こした。起こせた。動ける。

ベッドから下り立つ。左手を開いて閉じて開いて閉じた。

右腕はないけど、動けるのなら戦える。

水都「戸惑っていると思いますから、色々説明させてもらいますね」

武谷「みんなの所に行かないと」

歌野「なら走りながら話しましょう」

病室から出て、走っていく。

動けるようにはなつたが、身体はかなりボロボロだ。

無理矢理壊れた体を縫合ほうごうして正常に見せかけているだけのように思える。

それでも、なんとかふらつきながら走って行く。

歌野「ファイトよ武谷。私がついてるから」

ポンとぼくの背中を叩く仕草をして元気づけてくれる。

半透明だからか、触れられても擦り抜けていたけれど。

歌野「私が諏訪を守れなくて、終わってしまった後の話よ」

白鳥さんたちは話を始めた。

歌野「ぼんやりとした光の世界にいて、ああ、今から神樹様の元に行くんだな、て思ってたから、神樹様とは別の神様が——その時は知らなかったけど味方してくれてる北歐神様ね、私とみーちゃんの力を借りたいて、みーちゃんに伝えてきたのよね」

水都「うん、巫女だから私に神託で伝えてきたんだ」

水都「北歐神様の力で、うたのんと私の魂を、うたのんの勇者装束の髪飾りを通して、聖陵院さんと引き合わせてくれたんです」

歌野「そう、だからずっとみていたの。武谷のこと。武谷の思い。全部ね」

歌野「そして見て見たから、本当はもっと早く助けになりたくて、いつも出て行きたくてうずうずしていたけれど、ようやく今力を貸せるようになったのよ」

水都「北歐神様がうたのんに力を使えるようにするまで時間がかかったんです。戦闘の度に聖陵院さんに与える力もあったから。そもそもうたのんの力は地の神のもので、地の神ではない北歐神様が扱うには難しかったそうです」

水都「聖陵院さんには、もう直接力を授けることは前回の戦いでできなくなりましたよ、それで私たちを通して戦えるようにしましたんです」

水都「私がつたのんと聖陵院さんの魂を同期させるなんてことができたのも、北歐神様の力を授かったからです」

水都「私は巫女といつても、普通は神様の神託を授かるぐらいしかできませんから」
苦笑するように言った。

歌野「ここまでの状況説明で、わからないことある？」

武谷「……いや」

歌野「オーケー。スピード上げるわよ」

武谷「うん」

ぼくはふらつく体により一層の気力を込めて走り出そうとした。

歌野「武谷、ずっと見てて思ったんだけど」

武谷「……？」

歌野「あなたすごく頑張ってるわね、偉いわよ」

感触はないけれど、白鳥さんに頭を撫でられた。

労わるように、優しい手つきと微笑みだった。

武谷「……ありがとう」

別に、誰かに褒められたくて頑張っていたわけではないけれど、思わずそう言った。
今度こそ足を速める。

武谷「ねえ、白鳥さん」

歌野「ワッツ？」

武谷「ぼくも、うたのんって呼んでいい？」

今は、そんな気分だった。覚えていないけれど、この子は信頼できる、もつと仲良くしたいと思つたから。彼女のフレンドリーさもそれに拍車をかけていた。あと、うたのんという語呂が好きだ。

歌野「ええいいわ。ウエルカムよ。今は一心同体だしね。正にソウルメイトだわ」

明るく気持ちのいい笑顔で受け答えてくれた。

そして前を向き。

歌野「さあ武谷、一緒に乃木さんたちを助けましょう」

根が蔓延^{はびこ}る戦場に着くと、今まさに光り輝くバーテックスが天まで届く光の剣を振り下ろそうとしているところだった。

その刃の先には、倒れ伏している千景さん。

武谷「千景さん！」

歌野「武谷、手を出して！」水都「聖陵院さん、手を前に出してください！」

同時に二人の声を聞くと、ぼくは迷わずその通りにした。

その手に、うたのんと藤森さんの手が重なる。

刹那の間に、そこから黄緑と黄金の光が広がった。

光は壁のような形状と化し、千景さんたちを護るように展開される。

光の壁は、超巨大光剣を受け止めた。

拮抗の音を煩く響かせながら、軋む音も交じりながら、かろうじて防いでいる。

水都「この境界は一時的なものです。持ちこたえられる時間は僅かですから、急ぎましょう」

ぼくは千景さんたちの元に走り寄った。

千景「聖陵院くん……」

友奈「たけくん、約束守ったね」

杏「武谷さん……」

球子「ほんと、不死身のヒーローかよ」

若葉「武谷、と、あれは……」

千景「起きたのね……」

千景さんが力無く顔を上げる。

千景「でも、戦えるの……?」

千景「これ以上戦ったら、死んでしまうのではないの……?」

ぼくの無い右腕の場所を見て言う。

千景「なんで……きてしまったの……」

どうしようもないけれど、それでも嫌で悲しい、そんな表情をする笑わせたい人。
武谷「助けたかったから」

即答した。

武谷「ぼくはいなくならないし、死なない」

武谷「千景さんを守るし、約束も守るよ」

千景「せい、りよう、い、ん、くん……」

千景さんの声が震える。

千景「うそは、なしよ……」

武谷「嘘じゃないよ」

千景「……信じられないわ」

武谷「それは困った」

千景「信じられないから……信じさせて」

武谷「——そうかい」

武谷「なら、絶対に信じさせてみせよう」

歌野「ねえ、武谷」

ぼくだけに聞こえるように、うたのんが話しかけてきた。

歌野「今まで見てきたから、今さら訊いても意味ないかもしれないけれど」

歌野「今一度、訊くわ」

真剣な表情。

歌野「自分がどうなっても、守りたい？」

武谷「当然」

歌野「そう……わかったわ、私からはもう何も言わない」

武谷「でも一つ」

歌野「ワッツ？」

武谷「ぼくは千景さんのそばにいる。これだけはどうなろうと果たすよ」

歌野「……オーケー。その意気だわ。ファイトよ男の子！」

うたのんは満面の笑みでぼくの背を叩いた。例の如く感触はなく擦り抜けるけれど。藤森さんもぼくにだけ聞こえるように話した。

水都「では、聖陵院さん、みんなに触れてください。北欧神様の力を全員に送り込みます。直接聖陵院さんに力を授けられなくなつたといつても、他の人なら例外ですから、だからみんなを強くしてこの状況を打破しましょう」

水都「そしてこの代償は、例えば他に与えた力でも、すべて聖陵院さんが負うことになり……」

ぼくは頷いた。

さあ、助けよう。

千景さんに右手で触れた。その手に、藤森さんとうたのんの手が重なる。黄金色の光が千景さんに送られ、包む。

千景さんの傷だらけの体が回復し、綺麗になっていく。

千景「……動けるわ。さつきより、身体も軽い」

千景さんは立ち上がった。

次は友奈さんに触れた。藤森さんとうたのんの手が重なる。

黄金色の光を送り込み包む。

友奈「わあ……すっごい力が漲ってくる！」

杏さんに触れ、力を授ける。

杏「武谷さん……ありがとうございます」

杏さんは、立ち上がりかける。

でも、なぜかその途中で止まった。

武谷「どうしたの？」

杏「あの……」

杏「私……えっと……」

杏さんはうつむいたままただどしく言葉を紡ぐ。

杏「前に一度してくれたときみたいに、頭を撫でてもらえませんか……？」
顔を真っ赤にして、少しだけ顔を上げて上目遣いになりながら杏さん。

杏「だめ、ですか……？」

武谷「だめなんてことはない」

ぼくは杏さんの頭を撫でた。

杏「……………」

杏さんは気持ちよさそうに目を細めていた。

杏「……はい、もう大丈夫です。私はこれで、戦えます」

杏さんが強い光を瞳に宿していったので、ぼくは安心してタマさんの元に向かう。

タマさんに触れ黄金の光を送る。

球子「なあ武谷」

武谷「なんだい」

球子「タマは、強くなるなんて言って、結局勝てなかった……」

気落ちした様子を見せるタマさん。

球子「でも、まだ、誰も守れなかったわけじゃないよな。誰も死んでないもんな」

武谷「ああ、死んでない」

球子「だから、たとえ武谷たちに貰った借り物の力でも、今からタマが勝てば、それ

は強さの証明になる、かな……？ すまない、よくわかんねえや」

タマさんは不安げだが、決意はほとんど固まっている表情をしていた。

ならあととは、ぼくが背を押してあげるだけでいい。

武谷「きつとなるよ。元よりタマさんは強い。そしてさらに強くなった今なら、君が勝てない相手はいない」

球子「——そうか。なら、いつちよ勝ってくるっ！」

タマさんは力強く立ち上がった。

最後に、若葉さんの元へ来た。

若葉「白鳥さん……？」

倒れ伏したまま呆然と半透明のうたのんを見ている若葉さん。

歌野「乃木さん、立てる？」

若葉「……無理そうだ」

歌野「なら、立たせてあげるわ」

ぼくが若葉さんに触れると、その手にうたのんと藤森さんの手が重なる。黄金色の光

は

若葉さんを包んだ。

立ち上がる若葉さん。

若葉「立てる。立てるぞ。ありがとう、白鳥さん、それと二人も」
歌野「フレンドを助けるのは当然のことよ」

うたのんは楽しそうに顔を綻ばせていた。

若葉「白鳥さん、色々聞きたいことは多いが——」

歌野「そうね——もうタイムリミットみたい」

結界の軋む音の中に、致命的な音が混じった、そしてすぐに。

バーテックスたちの様々な攻撃を受けていた結界は、砕け散った。

武谷「勝とう、みんな」

それぞれの返答が、平成最後の戦場に響き渡った。

25話 それぞれの決戦

周りには散開するように強大なバーテックスたちが存在、対峙し、皆で戦い、斃そうと気を引き締めた時。

ぼくたちの頭上、天高くが煌いた。

皆頭上を見上げると、凄まじい速さで光が降りてくる。

皆咄嗟に飛び退き、それを避けた。

ぼくは前に跳ぶ。

大音が轟き、光が地面に激突、固定される。

振り仰ぎ、確認すると、確信する、

これは、結界だ。

見えないほど天高くから光の壁がカーテンのように下り、ぼくたちを分断している。

意趣返しのようにバーテックスが結界を張ったのだ。

光の仕切りに囲まれた世界で、ぼくの前方には超巨大な光り輝く女神像のような姿をしたバーテックスが鎮座していた。

他のバーテックスの姿はない。

それぞれに各個撃破するつもりか。

強くなった勇者に共闘されるよりも、一人だけの方が御しやすぎよいとも思ったのか。

水都「私の役目は終わりかな。うたのん、先にいってるね」

歌野「わかったわみーちゃん——私、今度こそ勝つから」

うたのんのその言葉には、複雑な思いと強い決意が込められているように思えた。

水都「うん、頑張つてねうたのん、諏訪のヒーロー」

歌野「またあとでね、みーちゃん」

水都「聖陵院さん、無事を祈ってます」

武谷「ありがとう」

藤森さんは半透明の体を徐々に薄くして、霧のように消えていった。

歌野「武谷、変身するわよ」

武谷「ああ」

ぼくの体に。黄金色と黄緑色の光が発生する。

無い右腕の部分に光が寄り集まり、腕を形成した。

この前一度した変身のように、コートが現出し翻る。

されどその色は、黄金ではなく黄緑。

形が成った右手には、常外じょうがいの鞭が握られる。

うたのんも黄緑色の勇者装束に変身していた。

半透明な彼女は、背後に浮遊し、動きがぼくと同期する。

対峙し、目に映るは光り輝く超巨大な化け物。

以前敗退した、人を滅ぼすだけの存在。

今から、ぼくが殺す相手だ。

歌野「派手に暴れてやりましょう」

ぼくは、ぼくたちは、地を蹴り前に出た。

友奈 viewer

私の前には、膨らんだ下腹部を持つバーテックス、反射板を従えた蟹のようなバーテックス、そして魚のようなバーテックスがいた。

それらすべてが、火と氷と光が混ざりよくわからないことになっている。

光の壁が降りてきて、みんなとはぐれて、こいつらを倒さないと私はみんなと合流できな

きない。それがわかったら、私はすぐに行動した。

戦う意思を奮起して、前に足を踏み出す。

同時、私の体を黄金色の雷が包んだ。

これが、たけくんたちから受け取った力。

私は雷と成って空を駆ける。

跳ぶではなく飛ぶ。

雷足、神速でバーテックスたちへと接近していく。

膨らんだ下腹部を持つバーテックスが爆弾を射出してきた。

その爆弾だと思われるものは、火と氷と光が混ざり認識がよくわからない。

距離感も掴みにくい。

だけど、避けられないわけじゃない。

カーブを描き移動する。大回りにいけば簡単に避けられる。

そして近づき、膨らんだ下腹部を持つバーテックスに殴り掛かる。

目の前に、火と氷と光の、反射板。

構わず殴った。

一撃で破壊。

連続で拳を放つ。

即座に数枚破壊した。

目の前には、爆弾魔がいる。

魚のようなバーテックスが、突然高速で地面から飛び出てきた。

火と氷と光を渦巻かせた突進は、とても危険だと判断した。

すぐに後ろにさがり避ける。

目の前を通り過ぎていく魚。

再度攻勢に出ようとした時。

膨らんだ下腹部を持つバーテックスが射出した、なにも纏っていないただの楕円形の爆弾は、私に到達しないまま爆発した。すごい大きい音と、強い強い光を一瞬にして閃かせた。

耳がキーンと鳴って聞こえなくなる。目も光で見えなくなった。

なにかで殴り飛ばされた。

地面にバウンドして跳ね飛んだけれど、なんとか姿勢を制御して立って浮遊する。

視界と耳が少しずつ治ってきた。

見ると、私はどうやら火と氷と光を宿した反射板に殴られたみたいだ。

でも、そこまで大きな怪我じゃない。纏っている雷がダメージを軽減してくれたから。

守られていることがわかった。

たけくんに、勇者に。その思いに。

私は独りで戦っているわけじゃない。

複数の爆弾が射出される。なにも纏っていないものと、火と氷と光を纏っているものが入り混じっている。

友奈「ふー」

落ち着いて息を吐く。

小細工はなしにしよう。

今の私は黄金の雷に包まれて、スピードも攻撃の威力も上がっている。

私の、酒呑童子のポテンシャルは力。

その力が底上げされているというのなら！

友奈「うーりやりりやりりやりりやりりやりりやりりやああッ！」

友奈「勇者、超連続。パーーーンチッ！」

爆弾を正面から殴り破壊していく。

分かり難い距離感も、瞬時に次の拳を出すことで無視する。

壊す壊す壊す。

酒呑童子の超威力から更に力が上乘せされているのだ、打ち碎けないものなどない。

爆弾が破裂すると同時に解放される閃光、その隙について飛び込んできた魚のような

バーテックスを粉碎——できなかつた。

閃光で目がくらみ力があまり出なかつた。

弾き飛ばすだけで終わる。

でも私はダメージを負っていないから問題ない。

叩きつけてきた反射板を破壊。

殴る殴る殴る。粉碎粉碎粉碎。

このまま殴り切つてやる！

——風が、吹きつける。

さつきまでいなかったバーテックスが新たに、すぐ近くにいた。

天秤のような姿の、新手のバーテックスだ。

暴風を発生させながら高速回転していた。

振り回された分銅のようなものを叩き込まれる。

もろに喰らつてしまった。

かなり、けつこうな、すごい衝撃。

叩き飛ばされた方には、膨らんだ下腹部を持つバーテックスがいる。そのバーテック

スは、白い帯を持つ。

その懐へ為す術なく入つた。

拳で殴りかかろうとしたけど、素早く白い帯に巻き付かれて、身動きが一時的に取れなく――

超常爆発。

常外爆音。

世界のすべてがわからなくなり、耐える準備さえ出来ず、ただ頭に何もなく起こったことに翻弄された。

そんな中、ただ一つだけ遅れて理解する。

膨らんだ下腹部を持つバーテックスが自爆したと。

若葉 viewer

私の前に立ちはだかるのは、四本の角を持つバーテックス、水泡を従えるバーテックス、無数の節に分かれたバーテックス、巨大な口と矢を持つバーテックス。

若葉「貴様らが私の相手か」

大太刀を構え相對する。

若葉「白鳥さん、共に戦おう」

彼女たちから貰った雷を、その身に纏った。

巨大な口と矢を持つパーテックスから無数の矢が放たれ迫る。

漆黒の翼で羽ばたき、雷と成りて素早く飛翔した。矢を避ける。進む私の後ろを何本もの矢が通り過ぎていく。

黄金の光のおかげで、高速飛翔における体の負担はなくなっていた。

追いかけてくる矢を避けながら接近していると、無数の節に分かれたパーテックスが火と氷と雷と光が混ざった、認識すら覚束ない狂った現象を放ってくる。

それは、広範囲で光景限無く。

どれだけ私が速く飛ぼうと、避ける事の出来ない範囲だ。

呼び起こそうと意識する。

ただそれだけで大天狗の炎は顕現した。

その炎と黄金の雷は螺旋を描き融合する。

全てを焼き尽くす雷炎らいえんと化す。

それを、全力でけしかけた。

雷炎と狂った現象が激突、刹那、その二つの攻撃は、消し飛んだ。

衝撃波が荒れ狂う。

と。

お互いの力が消滅する瞬間、衝撃波に身体が揺らされる間隙を狙って、撃たれた。

球体なのかすら判然としなくなった水泡球体が豪速でこちらへと。

命中し、取り込まれた。

認識。

知覚するすべてが理解不能状態に陥った。

何かをする力を奮起するという意思さえ発生できない狂った渦の中。

けれど痛覚だけはあり、焼かれ、凍らされ、損耗、摩耗、ダメージが蓄積していく。

だが。

だが、まだ微かに視界が見える。よく見ようとすれば、針の穴程は見える。

その認識により、僅かに行動の意思が発生。それを、気力で増大させる。

脱出、しなければ。

ただ前に泳いで抜け出そうと、愚直にひとつの行動だけが頭に浮かびそれを実行する。

四本の角が合体しドリルのような形状と成ったもの、だと思われるものが、この球体内に入り込んできた。

瞬間、震動。

ただでさえ狂った空間が、更に狂わされた。

地震の様なものが球体内で引き起こされている。

今度こそ、なにもかも、認識がすべてわからなくなっていた。
天地変動。

視界混沌。

意識攪拌。かくはん

行動翻弄。

頭が掻き回されるような蹂躪。

死の淵近く。

私、は——

球子 viewer

光の壁が降りてきた時、タマはあんに抱き付いて飛んだ。

だから今、この隔離された場所にはタマとあんにずがいる。

そして、前方、タマたちが倒さなければならぬ敵。

炎の剣を持つ黒い巨人。黒い者。そいつが立っていた。

杏「私たち二人で倒さないといけないんですね」

球子「怖いか？」

杏「うん、でも、戦うよ」

球子「そうか、なら」

球子「あんず、援護は頼んだっ」

杏「うんっ！」

タマは前に跳んで、跳んで。タマが前衛、あんずが後衛のフォーメーションを作り出した。

黒い者が巨大な炎の剣を携え、すでに走り接近してきている。

炎の剣が振り回された。

タマの旋刃盤は、武谷たちから力を受け取った時に綺麗まつさらに完全修復されていた。輸入道の炎も以前通りに宿っている。

そしてタマの全身と旋刃盤は黄金の雷でバチバチいつて滾っていた。

完全復元どころか強化されているんだ。

だから、防げないものなんてないっ。

旋刃盤を楯状に変形させて、炎の剣を受け防ぐ。

何度も振り回される巨大な炎剣、その威力は相当だ。

でも、防ぐ。

何度も楯で防ぐ、防ぐ、防ぐ。

一撃一撃が重い、だがこの楯は壊れる様子がない。

タマの後ろから、雷を伴う吹雪が黒い者めがけて飛んでいく。

タマに攻撃してる最中だった奴の腕に命中すると、その一部が凍った。

よしっ、効いている。

そんなことを思っていたら、黒い者の動きが変わった。

タマたちの力に危険を感じたのか、攻撃の激しさが増す。

さらに。

楯と炎の剣がぶつかった瞬間、爆発。

太陽のような炎の剣から、爆発が発生、その威力と衝撃が周囲に巻き起こる。

楯にかかる負担が増した。楯に守られ切れなかった体も傷ついていく。

炎の剣が爆発を撒き散らしながら幾度も振るわれる。

球子「ぐっ……」

猛攻を爆炎に身体を焼かれながら防いでいく。

防げないほどじゃ、ないっ！

気合いを一段増し、一撃で一つの町を焦土と化すほどの重い一撃を受け止め逸らし続ける。

その間に、あんずは雷を伴った猛吹雪を何度も発射、黒い者を凍らせていく。奴の動

きが少しずつ鈍っていく。

タマが耐えて、あんずがこのまま凍らせていけば、勝てる！

炎の剣が振りかぶられる。

また強力な一撃が来る。

来い！

タマは何度だって防いでやる。

——黒い者は炎の剣を投擲した。

球子「は？」

それはタマの頭上を通り抜けて、凄まじい勢いであんずに飛んでいく。

あんずは、吹雪を撃った直後だ。一瞬後に連射できるわけではない。

今のあんずは、隙だらけだ。

巨大な炎の剣は、もうあんずのすぐそこまで肉薄していて。

間に合わない。

あんずは、タマが守らないといけないのに。

杏「——っ！」

あんずは、横に跳んだ。武谷たちから与えられた力で、スピードも上がっている。

だけど、足りない。あれを完全に避けるには足りなかった。

炎の剣はあんずのすぐ横の地面に突き刺さると共に巨大な爆発を起こした。
球子「あんず!!」

あんずはぼろきれのように簡単に吹き飛んで、転がって止まった。

纏っていた黄金の雷が防具になってくれたからか、致命傷にはならず済んでいるように見える。

でも、かなりの大怪我だ。

あんず……っ。

タマはまた、あんずを守れないのか……っ。

——そんなことは、ない!

それでもあんずの倒れている姿が目には焼き付いて、動揺が消せなかった。

黒い者が新たな炎の剣を生み出す、猛攻が始まる。

何度も振り薙がれ降り払われる太陽のような炎の剣。

何発目かで、楯と剣が触れるインパクトの瞬間、炎の剣が爆散して強烈なエネルギーが発破された。

威力は、絶大。今までで最大の、神级威力。

楯は壊され、大きく吹っ飛び、地に何度も打ちつけられて転がって倒れた先は、あんずの傍だった。

痛い、動け——動けな——動け……。

球子「ぐ……ぐ、あ……」

やばい、これ。

千景 viewer

太陽のような円環に牙のようなものが生えた超巨大な無機物。

それが、視界の奥に鎮座する私が倒すべきバーテックスの姿すがた形だ。

空から降ってきた光の壁は私からバーテックスの方向に行くにつれて広がっている。

つまり私の方は空間の横幅が狭く、奥にいるバーテックスの方はその巨体が収まるほど広い。

巨大な火炎球を太陽のようなバーテックスは生成した。こちらに向けて放たれる。

超常の威力を持つ火炎球、その凄まじい力は以前に見て知っていた。

火炎球が迫る。結界の幅の関係上、私は避けられない。

だから、真正面から迎え撃つ。

大鎌を構えると、黄金の雷が私と九枚刃の大鎌を包んだ。

今、私は独りじゃない。

この力、聖陵院くんと共に在る。

九枚刃の大鎌を振りかぶり、眼前まで来た火炎球に叩きつけた。

玉藻前の呪いを刹那の間に侵食させ、黄金の雷が迸る。

千景「……………っ」

火炎球に炙られながらも、何とか消滅させた。

何度も受けられる攻撃ではない。

私は敵の地の利から抜け出すべく、一刻も早く前に進まなければならぬ。

聖陵院くん、と心の中で思うと、雷が私を飛翔させた。

雷と成りて空を飛び前方に進む。雷速で距離は縮まっていく。

大量の火の玉がバーテックスの周囲に生成された。

一気に無数の火の玉が襲い来る。

雷速で宙を移動し、避けていく。私の横を何度も火の玉が通り過ぎる。

幾つも避けたけど、数が多く避けられないものもあつた。

大鎌と九本の尾で弾き消滅させながら敵の懐を指す。

さらに火炎球は創られる。

私は防ぎながら進む。

これはそんな勝負だ。

私が到達すれば勝ち。

火炎球、太陽、爆発、焼け焦げ、痛み、大鎌薙ぎ、飛ぶ、避ける、尾で弾く、斬り消す、疲労、無視、ただ前へ。

痛み。

攻撃。

対処。

ルーチン。

物量。

耐久はどちらが上か。

相手の方がキャパシティは上か。

太陽の如き火炎球は途切れず襲う。

されど。

ただ自分の勝利だけは疑わずに、聖陵院くんの安心感に包まれながら動く。

あいつの攻撃は強力無比だ。幾ら新しい力を手にしても無傷ではいられない。体には焼け跡が増えていった。

何度も放たれる火炎球。それを何度も凌ぎ、少しずつ近づいていく。

そうして、傷だらけになりながらようやくやり着く。

超が付くほどの巨体、牙だけでも人の何倍あるだろうか。

バーテックスの無機物のような体は、目の前。不気味なほど白い、肌ともいえない肌。この九枚刃の大鎌を突き立てれば。呪い殺すことができる。

——刹那。

周囲の温度が、急速に上がった。

橙色の、太陽のような光で辺りが照らされる。

即座に振り返ると、眩しさに目がやられそうになる。

光の壁の中から、大量の火炎球が飛び出て迫っていた。

それらすべてが、背後から、横から、殺到する。

このバーテックス自身からしか攻撃がないと、私は思っていた。

避けることもできず、防御も間に合わず——爆炎爆発衝撃衝撃衝撃。

人を殺す破壊力の暴流が襲った。

main viewer

武谷・歌野 「はあああああああ!!」

白鳥さんの鞭を揮う。

振り下ろされた特大の光剣を弾き避ける。

ぼくたちから逸れた光の剣は結界に命中するが、それで都合よく結界が壊れてはくれない。

結界に触れた瞬間、光の剣は消えた。奴らが作ったものだ、奴らに都合がいいのは当然だろう。

女神像のような姿をしたパーテックスの周囲に漂う光が変質、特大な質量の光剣が顕現する。

振り下ろされた。

ぼくは空を飛ばず、地面にへばりつく。剣は結界に消えた。敵の攻撃が結界に当たれば消えるというのなら、結界の高さを利用し、回避させてもらった。

再度特大な光の剣が現出され、振り下ろされる。

まだ地面にへばりついて回避す——

光の剣は、伸縮可能だった。

結界に当たらないように、光の剣は収縮、ぼくたちに向けて正確に落ちてくる。

奴らが作ったものだから、奴らに都合がいいのは当然、先に自分が思ったこと通りなようだ。一度目回避させたのは油断させる為だろう。

避けられず、鞭を思い切り振るい、光の剣を逸らす。

真横の地面を光が穿った。

雷と成り、光り輝くバーテックスへ向かって飛翔する。

バーテックスは、周囲の光を幾つもの個に分けた。

その一つ一つが光の剣と化す。

周囲にいるもの全てを破壊し尽くす光剣の嵐、無数の斬撃が襲い来る。

周りに他のバーテックスがいたら確実に巻き込んでいたほどの何の遠慮も配慮もない乱撃。

雷を宿した鞭を縦横無尽に神速、振るう、揮う。

光剣の嵐を弾き、逸らし、防ぎ、打ち伏せる。

巧みな鞭遣いで一つ残らず対処した。

鞭の扱いはうたのんと同期していることで経験も技術も一級。一人で戦い続けた勇者うたのんの力だ。強くないわけがない。

歌野「エクセレント、私たち息ピッタリねっ！」

武谷「魂同期してるからね！」

女神像のようなバーテックスに向けて空を駆け、接近していく。

数本の光の刃が生成され、こちらに放たれる。

鞭を操り捌き、肉薄。

光り輝くバーテックスの間近だと、光の密度が濃く眩しい。

それでも目を瞑ることだけはしまいと視界は確保した。

奴は、纏う光を無数に分けた。先よりも細かい。

その細かい光を、手榴弾のように、小さな剣に瞬時に変えて、拡散爆散、放ってきた。光を細かく分けた分、先までのどの攻撃よりも威力は低いだろうが、この距離なら充分ぼくたちを殺せる威力を持っている。

光の剣軍は、空間を埋め尽くしている。どれだけ速くとも、避けられない。

武谷「うたのん！」

歌野「私たちの力、舐めるんじゃないわよ！」

神速の鞭捌き、鞭が意思を宿しているかのように、正に目にも止まらずを体現、撓り走る。

細かい無数の光を、やり過ぎす。

だが。やはり多すぎた。

全身に傷を負う。

切り傷切り傷切り傷、血が舞い噴き滴る。

痛み、無視。ぼくらは無事だ。

今、この瞬間。光を大量に使用したからか、奴には動きが無く隙が在る。

超巨体を破壊し尽くした。

光。

光が瞬しゅんの時ときで世界に閃く。

巨体の在った場所で、光が瞬いた。

光り輝くバーテックスは、無傷の状態で存在していた。

復活。

武谷「読んでいたよ」

その復活は以前に見ている。

存在を取り戻すと共に放たれた、特大の光閃。

それを回転蹴りをするように避け、光の剣は真横を通り過ぎていく。間髪入れず鞭の

連撃。殺す。

壊し尽くし、殺し尽くした。

——復活。

復活が一度だけではないのも、読んでいた！

即放たれる、光の剣。

また回転しながら避ける。

その流れから鞭の攻勢。

殺す。

——だが、光の瞬き。

まだ復活する。

お前はあと、何度復活できるかな。このまま殺し尽くしてやる。

避け、粉碎、雷速で避け、壊す、雷足で回避、叩き潰す、回転避け、ぶつ壊す。

——。

だけど。

何度やっても、奴は復活し続けた。

歌野「武谷、なんだかアンビリーバボな可能性が頭に浮かんだんだけど」

武谷「奇遇だね、ぼくもだよ」

体力は無尽蔵には続かない。ぼくらは着実に疲弊している。

それでは、” 奴の復活は本当に無尽蔵ではないのか？”

例え無尽蔵ではなくとも、何度復活できる？ 十回？ 百回？ 千回？

何度殺しただろうか、倒せない。復活し続ける。

そしてとうとう。

止まらずに動き回り、避け攻撃し続けていたことで。

疲労が溜まり過ぎた。

限界。

動きが鈍り、隙が――

光の剣が、ぼくの右腕を斬り飛ばした。

26話 ヴイクトリー

友奈 viewer

私を帯に巻き付けて自爆したバーテックスは、消えた。だけど。

友奈「はあ……はあ……」

血がいつぱい滴り落ちる。

私は血だらけの満身創痍だった。

何とか、膝は突かないように立ってはいる、けど。足が震える。

痛い、辛い、怖い。

魚のようなバーテックスが潜っていた地面から飛び出した。

私に止めを刺そうと真正面から突進してくる。

火と氷と光が渦を巻いていて、直撃すれば私の命を奪うのは簡単だと思う。

私は――

痛くて辛くて怖いけど。

気を奮い立たせて、地面を強く踏み締めた。

前を見据える。バーテックスの攻撃を、恐怖を正面から見つめる。

たけくんに慣れていない偉そうな説教をした。あの時は精霊の影響か、いつもとは違う感情に流されて勢いで口にしてしまったことだけど、嘘は吐いてない。

たけくんは死んでほしくないって言った。私は、死なないよ、って言った。

あんなこと言っておいて、私が同じことをできないなんて、口に出したことを守れないなんて、そんな駄目だ！

私も、帰る！ 勝って、みんなと一緒にいる！

バーテックスは、目の前。

拳を振りかぶっている時間はない。

だから、ただ前に拳を出した。

激突。

足腰に力を入れ踏ん張る。

叩き飛ばされず、踏み止まる。火も氷も光も、私を包んでいる黄金の雷が守ってくれて致命傷にはならない。

時間を置かず左の拳を放つ、黄金の雷に寄り添われた酒呑童子の手甲は、魚のよう

なバーテックスを粉碎する。

これで、あと二体。

力を入れたことで身体がさらに悲鳴を上げる。

痛い。

痛い、けど。

天秤のようなバーテックスが回転し、暴風を巻き起こす。

無数の火と氷をそれに乗せて飛ばしてくる。

友奈「私は勇者！ 勇者なんだから、これぐらいでへこたれてちや駄目なんだ！

友奈「みんなを守る、勇ましい者なんだから！

友奈「大好きな人たちを守る！ それが勇者、高嶋友奈なんだあああああああ！！

雷を纏った拳は神速、酒吞童子の拳は超威力。それが合わされば、殴り壊せないもの

なんてない。

たとえばバーテックスの攻撃が速くとも、多くとも、全てに拳を届かせる。

拳で殴る、殴る、殴る。殴る殴る殴る殴る殴る！

友奈「絶対に、諦めない！」

無数の火と氷は、すべて殴り消した。

瞬間、蟹のようなバーテックスの反射板も飛来する。

正面から拳を放って打ち砕いた。

しびれを切らしたのか、天秤のようなバーテックスが、分銅をぶん回しながら突撃してくる。

回転し最も威力の乗った分銅が迫る。

私は、真正面から振りかぶった拳を放ちそれを粉碎した。

その衝撃で回転が止まったバーテックスに向けて足を踏み出す。

腰を落として、力を入れ、胴体に殴りつけ壊した。

あと、一体。

私の体は悲鳴を上げる。

でも、動かす。

最後の一枚の反射板を正面から差し向けられ、粉碎、それで少しの間、前が見えなくなつた。

時。

蟹のようなバーテックスの鋏が、襲い来る。

鋭く開かれた刃は、最硬鉱物でさえ容易く斬るだろう。

このまま前に拳を突き出しても、破壊する前に挟まれ真つ二つになってしまう。
なら。

流転する、狂う世界。

死へと誘う空間。

回る回る廻る廻る攻撃激戦逆痛覚。

乱れ混乱狂う狂う削られる無くなつていく。

薄れゆく、意識の中。

ひなた。

守らなければならぬ人の顔が浮かんだ。

気力が、僅かに戻る。

その僅かささえあれば、十分だった。

ここで勝たねば、勇者ではない！

勇者の力を、舐めるな！

視覚や触覚、痛覚、集中を乱す認識は全て余計だ。

ただ、炎を呼び起こすことだけを考える。

天上を一夜にして灰燼に帰したという大天狗の炎。

顕現させる。

それは、少しの意識さえあれば可能な、簡単なことだ。

大火と、黄金色の雷が力を發揮する。

私を閉じ込めていた色々なものが混ざった水泡を、一瞬にして蒸発させた。狂った空間からの脱出に成功し、いまだに混乱する脳を無視し、前を見る。

私の周囲には炎と雷が漂う。

白鳥さんたちの力が守ってくれている。

心底、心強い。

白鳥さん、私たちの力が揃えば、なんだって打ち倒せる。彼女は戦った、戦い切った立派な勇者だ。その勇者と私が力を合わせれば。

若葉「白鳥さん、行くぞ！」

後ろに死の気配。無数の矢がいつの間にか後ろから迫っていた。

水泡から脱出したばかりで頭の混乱は抜けきらず、ふらついてまともに速く動けない。漂う炎も自らの体を焼いた。けれど。

雷と共に在る炎を出し無数の矢を迎え撃つ。

体が焼ける。だが、どうでもいい。

こいつらを屠り、皆を守れるのなら、どうでもいい。

無数の矢を炎で防いでいると、横合いから無数の節に分かれたバーテックスの火と氷と雷と光の混沌とした現象烈破れっぱが襲う。

炎で矢を防ぎつつ、神速で大太刀を翻し、幾閃も斬線を残し消し飛ばす。

煙が舞い、すぐに晴れる。私は佇む。

若葉「——そうか、この程度か」

若葉「貴様たちは、この程度なのだな」

若葉「即座に、散れ」

大天狗の大火を従え、大太刀を構え、漆黒の大翼で飛ぶ。

最も近くにいた、先に水泡内で地震を引き起こしたバーテックスへ。

矢を放ってくる奴が最も厄介だが、私の今から行う戦法には捨て身の突撃が一番厄介と成る。だから突撃力が一番高そうなバーテックスを最初に狙った。

無数の矢を、混沌とした現象を、自らの身を焼き焦がしながら従えた炎と黄金の雷で防ぎ進む。

すべてを対処することはできずに体に傷は増えていくが、勢いを殺さず止まらず四本の角を持つバーテックスに到達。

大太刀を揮い。

一閃。

切り捨てた。

間髪入れず、私は動き続ける。

次に、地震を引き起こす今しがた倒したバーテックスと連携するため近くにいたの
だろう水泡を従えるバーテックスに向けて飛翔、瞬時に疾風の如く肉薄。

水泡が放たれたが、それは翼の機動力を生かし避け、横を通り過ぎていった。

一閃。

バーテックスを二つに斬った。

その次に無数の節に分かれたバーテックスに向けて空駆ける。

放ってきた混沌現象は、雷炎で対消滅させた。

一閃。

バーテックスは分裂するが、雷炎で焼き尽くした。

最後に、矢を持つバーテックスに真正面から突撃する。

大太刀を鞘に戻し、居合の構え。

射^いつてくる無数の矢は、雷炎を楯とする。

バーテックスが、口から生えた巨大な矢を、射出した。

こちらに、一直線に、刹那の間に到る。

爆発。衝撃波。

だが、空駆ける。

咄嗟に雷炎を正面に多く放ったが、傷は負った。

それでも動けるのなら、何も問題はない。
居合の構えは崩していない。

矢を持つバーテックスへと接近。

すれ違いざまに大太刀を鞘走らせ、閃かせる。
静寂。

ほとんど音のない世界が、この場を支配した。

大太刀を鞘に納める。その音が静寂を破った。

瞬間、矢を持つバーテックスは、真つ二つに割断され焼失した。

……みんな、白鳥さん、ひなた、勝ったぞ。

体は焼ける。焼けている。焼け焦げている。

それでも意識が在る、生きています。

みんなも、勝つだろう。

私は、確信している。

球子 viewer

タマは、倒れている。

あんずの隣で倒れている。

何の感情も持たない化け物相手に、無様にやられて。

敗北、が、頭の中を過ぎった。

――。

でも、その考えはすぐに燃え上がる熱い思いにかき消された。

杏「た、タマたち……先輩……」

死にそんな顔して、実際体は焼け爛れて瀕死状態で、あんずがタマを呼ぶんだ

タマは、あんずを守る。

昔誓った。一つの信念。

それは今、強く輝き、戦う力を呼び起こす。

まだ、立てる。

あんず、絶対、お前を守るからな。

武器はないけど、無くても攻撃する方法くらいある。今のタマなら拳で殴りつけても

少しはダメージを与えられると思う。

迫る黒い者。

奴はタマたちを殺そうと近づいてくる。

あんずを殺そうと、してくる。

そんなことは許さない、だから、立つ。立ち上がるんだ。体を叱咤する。

守るといふ誓いを込めて、あんずの手を握った。そして立ち上がろうとした――
手を強く握ったそのとき、何かタマの中に流れ込んで来た。

あんずを包んでいた黄金色の雷が消えた。そしてタマを包んでいた雷が量を増した。
力が入った時、理解の感覚が広がる。今戦えるタマに、あんずに与えられていた力が
譲渡されたと。

あんずには、生命を怪我や代償から守る淡い光だけが残った。

そうして、武器を失ったタマの手に、

姫を守る騎士剣が顕現する。

黄金色の、雷を宿した剣。

これは、武谷が使っていた剣。その刀身に炎が渦を巻いていた。輸入道の力も宿つて
いるんだ。

これで、あんずを守れる。

立ち上がった。

球子「さあ、タマに任せタマえ」

姫を守る騎士剣を、構えた。

振り下ろされる、黒い巨人が持つ太陽の如き炎の剣。

雷を宿し、炎が螺旋を描く剣——雷炎剣を斬り上げ、迎え撃つ。剣と剣がぶつかり合う瞬間、炎の剣は爆散した。

炎の剣に在るエネルギーが全て発破。

その爆炎は、刹那の間に迸った雷炎にガードされる。

この炎は輪入道のもの、故に、旋刃盤の楯の性質を残している。タマは、あんずの剣であり楯だ。

さつきみたいに無様にやられたりしない。

黒い者は、炎の剣を左手に再度創って、間髪入れず振り下ろしてきた。

タマは、雷炎剣を再び振り翳す。

インパクトの瞬間、爆発爆散する炎の剣。

雷炎が楯と成り、炎から守る。

球子「今のタマはさいきよーだぞ！」

奴は何度も炎の剣を創った。何度もタマに振り下ろし、横に薙ぎ、斬り払い、斬り落とし、斬り上げ、流し斬り、薙ぎ払い、剣撃と斬撃と炎撃を乱舞する。

タマは、その全部を最強の剣を手で正面からぶつ潰した。

ヤケクソのように振るわれる炎の剣。

タマは、その炎の剣を斬り防ぎながら、雷と成って空を走った。

接近。肉薄。

黒い者は、自らの右腕を剣へと変化させた。それは黒い炎で滾り——さしずつめ黒炎剣。

そんな超やばそうな剣を、タマから見て左から横薙ぎに振るう。

雷炎剣で受ける。

先よりも威力が段違いだ。

けど。

雷炎剣を、黒炎剣に滑らせながら突き進む。

左腕も黒炎剣と化し、タマから見て右から襲い来る。

雷炎の楯を、右に全力で展開した。

それで右の黒炎剣を何とか防ぎ抑える。

左右を黒い死の具現に挟まれながら、本丸へと突き進んだ。

奴を倒す為に。

この一直線の道を進み切れば、バーテックスにこの刃が届く。

——黒い者は、その黒い頭でさえも黒炎剣へと変えた。

、こちらにその切っ先が神速で伸びる。

左右は黒炎がタマの命を狙い、防ぐので精一杯。

そして前からは死が迫る。

あれ、これ防げない。

タマは、勢いに乗ったままあっさりと思死んでしまうのでは。

すぐに考え直す。タマは、どんな状況だろうとあんずを守るんだ。

簡単に絶望なんて、してやらない。

でも、どう対処する。どうにかここで死なないようにしないと。

後方から飛来する黄金と水色、レーザー状の雷吹雪が、前から迫る黒炎剣にぶち当たった。

それにより、奴の頭部黒炎剣は、ほんのわずかに軌道をずらす。

あの吹雪は、あんずの。

大怪我してるつてのに。

そうだよな。あんず、あのときも逃げなかったもんな。

サソリ型にやられそうになったとき、どれだけ言ってもあんずは逃げてくれなかった。

そんなやつが、守られるだけのお姫様なわけがないよな。

あんずが作ってくれた機、ここで逃すわけにはいかない。

タマはあんずの剣と成り、パーテックスに刃を届かせよう。

球子「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ
!!」

黒炎剣が僅かに逸れたことで正面から貫かれる致命傷にはなっていない。けれど肩には当たってしまっていた。前に進めば進むほど肩が切り裂かれる。

血がドバドバドバドシャアツ、と噴き出す。

球子「ああああああああああつ!! お前! 肩もみ下手だなあつ!!!」
痛さと痛さと、あと痛さに耐えて。

血が噴水のように舞いながら、黒いパーテックスの懐に到達。

密着するほど近づけば、腕の可動域から逃れる。

つまり、こいつの黒炎剣は今、タマに届かない。

雷炎剣の切っ先を前に向け、振りかぶって構える。

そして、前に突き出す!

パーテックスの中心を、真正面から胸を、騎士の剣で貫いた。

貫通して、勢いそのままにタマはパーテックスの体を通り抜け、背中から出る。

タマの後ろでパーテックスが倒れていく気配。

黒い者は、消滅する。

タマは、勝った。タマは、守れた。タマは――

球子「強いぞおおおおおおおおおおおおお!!」
勝利の雄たけびを上げた。

千景 viewer

爆炎が晴れる。

焼け爛れた体。満身創痍な自分。

息を整えようとして、整えられない。

目が霞む。

ともすればこのまま力が抜けて落ちていきそうなほど。

九枚刃の大鎌を、強く握る。

私は、聖陵院くんと一緒にいる。

だから私は、死なない。死ねない。

聖陵院くんに約束を守ってもらうには、私も死なないことが条件だ。

火炎球が創られ発射される。

パーテックスに近づいたことで、結果が広い。今なら避けることができる。

聖陵院くんたちから与えられたこの雷の力、速さは、圧倒的。

黄金の雷と成って空駆け飛び回る。

火炎球を避けながら、再度肉薄、密着するぐらいに。

超巨体の白い表面に九枚刃の大鎌を突き立てる。

玉藻前の力、呪いを全力で送り込んだ。

巨大過ぎて、直ぐには呪いが回り切らない。

火炎球が大量に周りに生成される。

朱くあか朱く、熱く、焼き尽くす念しか存在しない太陽のような火炎球。

小さな太陽が無数に、ただ一人を殺す為だけに殺到する。

避けてからまた攻撃するか。いや、火炎球で隙間なく囲まれている、避けられない。

一部だけ防ぎながら離脱。これも防ぎながらだとその内に他の火炎球が私に到達するだろう。火炎球は決して遅くないのだから。

この九死から抜け出す為には、どうすればいいか。

一瞬だけ、考えた。

玉藻前の性質は、どこまでも強い呪い。

ならば、どこまでも強くすることができる。

結論。

このまま、斃す。

やがて、完全に消滅する。
身体がふらついた。

痛い、熱い、苦しい、死にそう。

千景「聖陵院くん……私、勝ったわよ……」
だから、あなたも勝つて。

mainviewer

武谷「……っ!!」

歌野「……くうっ」

痛みは堪えた。死線でアドレナリンは大量に分泌されている。

右腕は切り飛ばされ、もう亡^ない。

右手に持っていた鞭も、無い。

放られて、どこかに落ちていつてしまった。

奴は何度も復活し続ける。

倒すには、どうすればいいか。

考えてる間にも光の剣は襲い来る。

細かく分けられた光の剣が、拡散、放たれた。鞭を拾いに行く暇もなく、雷と成って避ける。だが、武器もなく、数が多すぎる上に速い。

全身が斬り刻まれる。

武谷「がっ……はっ……」

鮮血が舞い落ちていく。

力が抜けて落ちていきそうになる。

だが動く。

武谷「うたのん」

歌野「……………」

光の剣。

避けて逃げ回り、避け切れなくて傷ついていく。

武谷「ねえ、うたのん」

歌野「……………」

光の剣。光速襲い。

避ける、肌が裂かれる、血が、血が。

ぼくは戦う。

そろそろ、避けるだけでは、持たなくなってくる。限界が来てしまう。反撃するため
の体力が残っていないければ、何もかも遅いんだ。

武谷「わかつてるんだろ、うたのん」

歌野「——っ」

この黄金の光、雷はグリームニルと同じ性質を持っている。

そして神成る剣は、全てを切り裂く。

ならば、それをさらに強くすることができれば。

いつだって北欧神様は、ぼくに状況を乗り切るための力をくれた。代償さえ払えば。

そう、もうほとんどないと言えるぼくの捧げることができるもの。

根こそぎでも、捧げれば。

しかしこれには、ぼくに直接はもう無理だ。

だから魂を同期しているうたのんの合意が必要。

彼女を経由しなければならぬから。

武谷「なあ、うたのん」

歌野「わかつてるわ。わかつてるけど」

悲痛、苦肉、遣る瀬無い、どうしようもない、悔しい。そんな感情がうたのんから伝

わってきた。

武谷「ここで死ぬより、勝って帰るほうがいい」

歌野「帰れないかもしれないわ」

武谷「奴に負ける方が帰れない」

歌野「……そうね」

歌野「武谷、さっき言ったことは本当よね」

武谷「ああ、本当だよ」

武谷「ぼくは、千景さんのために生きる。彼女を笑わせる」

武谷「だから、絶対に千景さんのそばにいる」

うたのんが、決意を秘めた瞳で、

歌野「——そう、わかったわ」

歌野「なら、私は武谷を応援する。どんな結果になっても、あなたを否定しな

いわ」

笑った。

そして、敵を見据える。

歌野「これより、ラストフォームよ！」

左手に北欧神の力、代償を際限なく負い、集中させる。

ぼくの左手が、黄金色、そして黄緑色に光り煌き輝く。

攻撃力にのみ特化させている。だから右腕が回復したりはしない。すでに宿っていた力も、ほとんどが攻撃力に回されたので、同期しているうたのんの力を借りて、満身創痍の身体を自由に動かす。

——今さらだが。

ぼくは現在、変身している。

そう、超人的な身体能力を有しているんだ。

前までは、ぼくはみんなみたいに変身はできないからと、諦めていた戦い方。

それが、今はできるということ。

光の剣が、無数に発射される。

鍛錬を必死にしていた頃がある。そのときに自分が得意としていた技があった。

多少のブランクはあれど、その身に沁みついている技。

左手を握り込まず、開いて伸ばす。

手刀の形だ。

黄金と黄緑を宿した手刀を、揮う。

払う、斬りつけるように、打ちつけるように、降ろし、薙ぎ、袈裟掛けに振るう。

光の剣を次々と撃ち落としていく。

意味のなかったと思っていたぼくの研鑽、そのすべてをお前にぶつけてやる。

光の剣を手刀で跳ね飛ばし消していく。

そして、光が、途切れる。

雷と成つて飛翔、バーテックスに肉薄。

鍛錬を必死にしていた頃、自分が最も得意とした技があつた。

通常なら、目やみぞおち、弱点を狙う攻撃、化け物相手には一切通用しない武術。けれど、それはただの人の武術であつた場合だ。

四本の指を伸ばし、親指だけ曲げる。

ぼくが最も得意とした武術、貫き手の構え。

——放つ。光り輝くバーテックスの発光する身体に突き刺した。

神の力を宿らせ、一点集中させた威力は絶大。

刹那、奴は瞬時に幾度も光つた。

理解する。今ぼくは、こいつを何十回か殺したと。

武谷「お前の復活が本当に無制限かどうか、見せてもらおうか」

光の特大剣が、薙ぎ払われた。

雷迅らいじんと化し、紙一重で避ける。

貫き手を突き刺す。

奴は何度も死ぬ。

超巨大な光の剣が振り下ろされる。

避け、貫き手を突き込む。

何度も死に、何度も復活。

無数の光の刃。

弾き、払い、斬り飛ばし、貫き手を何度も打ち込む。

その度にバーテックスは幾つもの命を失う。

だが、ぼくの体から血も喪うしなわれていく。

満身創痍なのは変わらない。

されど。

喰らい付く。死に物狂い、決死に命を燃やす。うたのんと共に。

武谷・歌野「うおおおおおおああああああ」

そして、遂に。

光り輝くものは、後方に退き、まるで必死に死を拒むように、光の剣の猛攻を放つてきた。

避け、斬り裂かれ、弾き、突き刺す。

確信。効いている。奴は、着実に死へと近づいている。

武谷「はあ……はあ……はあ……はあ……っ」

歌野「武谷、まだいける？」

武谷「当然」

歌野「愚問だったわね」

貫き手を、魔王を倒す勇者の剣の如く、構える。

光。

眩しく眩く、光が広がって固まって。

形成。

奴は、今まで見せたことのない技を使用した。

超巨大な光の剣が、間断なく、間髪入れず、刹那の間に、二連続で薙ぎ払われる。

一振り目は、先までと同じで、何とか避けられた。

だけど、二振り目は、避けた瞬間に来る光速で奔る剣を、対処することは叶わない。

ぼくの上半身と下半身が別たれる。

鮮血が、命の血が、堤防が崩壊した川のように、勢いよく噴き出し流れ落ち急速に失

われていく。

体の機能が、停止へと向かって――

バーテックスを、貫いた。

光が瞬く瞬く瞬く瞬く。

今までにない量の瞬き、もう瞬きとすら言えないほど、視界は混沌としている。

一撃で、何百回、もしかしたらそれ以上、殺したのだ。

やがて、瞬きは無くなり、バーテックスの動きが止まる。

静謐、静寂だけが空間を席卷した。

バーテックスの体が崩れていく。

微細に、消えていった。

光り輝くバーテックスは、死んだ。

ぼくたちが、倒した。

ぼくたちは、勝った。

歌野「ヴィクトリーーーーーー!!!」

勝利の雄たけびを上げたうたのんを振り返る。

うたのんの半透明の体も、少しずつ粒子となつて消えていた。

歌野「乃木さん、みーちゃん、勝ったわよーーーーー!!!」

うたのんも帰っていくのだろう。

戦いが終われば神樹様の元に帰っていく。

一通り叫ぶと、うたのんはぼくに向き直った。

歌野「誓った通り、君はあの子のそばにいてあげなさい。あなたとってもラブユースキ
れてるわよ」

武谷「うん、まあ、それはよくわかってる」

歌野「武谷は何かと心配だから、できれば一緒にいてあげたいけど、私にも待ってる
人がいるから」

水都さんのことか。僅かに見たただけだけど、二人はとても仲が良さそうだった。

歌野「バーイ武谷、また会う日まで」

武谷「じゃあね」

うたのんは、小さく手を振って帰っていった。

——ぼくの体も、粒子となって消えていく。

代償だ。

ぼくにはもう、ほとんど何も残らないだろう。

からだも、記憶も、意識も、何もかも。

なくなつて、いく。

.....。

ぼくは、約束を守る。

千景さん……………。

—。

そうして。

ぼくという人間は、消えた。

エピソード

千景 viewer

西暦最後の戦いが終わってから、数か月経った。

みんなボロボロの姿で入院していたけど、最近ようやく全員退院できた。

聖陵院くんたちが与えてくれた黄金の光が代償を軽減してくれたみたいで、皆無事に生活できている。

今日は学校のない休日。

私は、適当な道を当てもなく歩いていた。

当てもなく？

違う。

聖陵院くんを、探している。

四国を守る結界はかなり強力になった。結界の外は天の神が地獄のような世界に変えてしまったけれど。

そのうえ、聖陵院くんがいなくなってしまうた事で状況が変わった。結界を強力にした程度では問題は解決しなくなった。

北欧の勇者システムを扱える勇者がいなくなったことで、数十年以上後のバーテックスとの戦いで敗北する可能性が高くなったのだ。

だからすぐに天の神との戦争を終わらせる必要があった。

その方法が天の神との和睦だ。

北欧神様が一柱、自ら犠牲になったらしい。主神のオーデインが死んで、こちら側全ての勇者の力を放棄することで、天の神は和睦を受け入れた。

北欧勇者である聖陵院くんと、北欧神の主神がいなくなることで成立したのだ。

それでも、乃木さんたち、私たち人類は諦めたわけではない。

密かに遙か未来のための反撃の準備が進んでいる。

上里さんが、大社内でも色々動いて頑張っているらしい。

だから私たちの戦いは終わっていないけれど、戦闘は終わった。今はみんな平和に命の危険もなく暮らしている。

——そんなことはどうでもいい。

千景「聖陵院くん……」

彼が、いない。

千景「聖陵院くん、聖陵院くん……」

聖陵院くんと過ごした日々を思い起こす。

最初は、なにこの人、と思った。初対面から名前呼びで馴れ馴れしくて、変な人って。でも、そっけなく対応する私に彼は何度も話しかけてきて、仲良くなりたいたいという気持ちだけが僅かも隠されてなくて、いつも私に目を向けてくれた。

私を価値ある存在だと言ってくれたんだ。

私を何度も助けてくれたんだ。

——ぼくは、千景さんに喜んでほしい、笑っていてほしい。と思っているよ。

——千景さんがどうあろうと、ぼくはあなたを肯定する。ただそこに存在してくれるだけで、ぼくは価値を認めるよ。ぼくは君に生きていてほしい。何もしなくても、何をしても、千景さんはぼくにとって価値のある存在だ。

——何かあった時は、いつでもぼくを頼ってくれ。ぼくは千景さんの絶対的な味方だ。

ん

聖陵院くん、聖陵院くん、聖陵院くん……っ

m a i n v i e w e r

意識は極小。

世界は混濁。

存在希薄。

ここは、どこだ。

どこでもいい。

ぼくは、だれだ。

だれでもいい。

ちかげさん。

ちかげさんって、だれだ。

かわいいおんなのこだ。

そばにいと、やくそくした。

君がいなくなると信仰してくれる信者が一人もいなくなる。それは困る。そんな意思が伝わってきた気がした。

君はもう、人ではない。ましてや精霊でも神でもない。ただ外れた存在だ。

何の力も無い器だけが、今の君にはそれで十分だろう。

その意思を最後に、大きな存在から伝わってくるものは途切れた。

ずっと……そばに……いるんだ……。

——うわあああああああああああああああああああああああああああ。

ちかげさんがいない。いかなきや。

はやく、いかなくては。

ちかげさんのそばにいる。

ぼくにあるのは、その一念だけだった。

他にはなにもなく、ただ彼女のそばにいななければならないと、それだけ思う。

ぼくは歩く。進む。向かう。一直線に、なんとなくわかる目的の人の場所へ。

ただ一つの約束を果たしに。

千景 viewer

武谷「やくそく、だから」

これは、夢……？

とうとう、おかしくなつて、白昼夢を、幻覚を見ているの……？

聖陵院くんが近づいて、私の頭に手を乗せた。

武谷「なかないで。ごめんね」

頭が、撫でられる。

それは確かに、感触があつて。

夢でも幻覚でもなくて。

懐かしい、聖陵院くんの存在が確かに感じられて。

千景「遅い……」

千景「遅いわよ。遅すぎる……」

千景「大っ嫌い」

私の顔は、多分笑つていたのだと思う。

聖陵院くんに思い切りしがみ付いて、抱きついた。

涙は溢れて止まらない。でも私は笑っている。

好き。

好き好き、大好き。

千景 「聖陵院くん……」

千景 「ずっとそばにいて……」

武谷 「うん、ずっとそばにいるよ」

私は、幸せだ。

あなたが、幸せにしてくれたから。

エピソード2

シユツシユツ、と、髪を整える。

寮の自室、ぼくは洗面所で鏡を見ながら身だしなみを鑑^{かん}みる。

あまり自分の容姿とか身綺麗さとか気にしたことになかったような気がする。記憶がほとんどないのでわからないけど。

確か以前若葉さんに寝癖を指摘されたことがあったような、つまりそんな程度の意識だったんだ。

鏡を再度見る。

金髪、黒目、鋭くない目、少し丸っこい。不細工ではない、イケメンでもない。どう思われていたかは記憶がないのでわからない。自分を不細工だと思いたくはないが。

よくわからないのでイケメンだと自分では思っておく。ポジティブに行こう。高身長ではないから、高身長イケメンという最強称号を持つことは不可能だけれど、低くもないから身長普通のイケメンだと思っておこう。

金髪は地毛のはずだ。ぼくが命の危うい戦争中に暢気に髪を染めてでもいなければ。ぼくがなんでこんなことを急に思い立ったかと言えば、今日はみんなと終戦記念の祝勝会をするから。

こんな時くらい、一番いい自分にしたかったのだ。

そしてうどん屋にやって来た、ここが集合場所だ。

球子「武谷めっちゃ光ってるな！」

店内に入って少し歩いたところ、開口一番に言われた。

今のぼくの体は、北欧神様が、オーデイン様がもういないからツール様が創り出した器だ。

そしてこの器は、半透明で常時発光している非常に迷惑極まりない生命体。

大社がその情報を開示しているから、ぼくのこと是一般人に周知されているが。

いや、今は改名して大赦だったか。

それはともかく、だから大騒ぎになつてはいない。精々見られた時に話の種にされる程度だ。

勇者様の光だー、英雄の輝きだー、という具合に。

勇者は正式名称だから呼ばれ慣れてるけど、英雄はむず痒いというか、呼ばれると

しつくりこない。ぼくはそんな器ではないから。

ちなみにこの光は極限まで弱められる。だからそんなに周囲へ迷惑が掛からないようにはできる。今積極的に見ようとしなければ気にならないレベルまで弱めた。

暗い場所では常夜灯よろしく活躍できるかもしれないけれど。

現在はタマさんに杏さん、若葉さんにひなたさんが居る。千景さんと友奈さんはまだ来ていない。

やがて少し雑談に興じていると店の扉がガラガラとスライドされる。

千景さんと友奈さんが来た。

友奈「ごめんくちよつと遅れた」

武谷「やあ」

千景「ん……」

ぼくの隣席に千景さんが最速で座った。

千景さんの隣、ぼくの反対側に友奈さんが座る。

全員揃ったところで、

若葉「では、祝勝会だ！」

我らがリーダーが始まりの言葉を述べた。

店員さんにそれぞれ自分好みのうどんを頼む。ぼくは肉ぶっかけうどんにした。今

は肉が食べたい。肉、肉。やっぱこういう時は肉っしょ。

そしてうどんが届いた。食す。

美味い。

杏「それにしても、みんな生きてて良かったですねえ……」

友奈「こうしてまた何度もうどん食べれるもんね！」

しみじみと言う二人。

若葉「全員息災が一番だな。だが全部終わったわけではない、気を緩め過ぎないように」

ひなた「これからも大変なことはありますが、このひとときがあれば頑張れますね」

球子「まつ。また何かあってもタマに任せたまえ。なんたってタマはさいきよーだからなっ！」

平和だ。平和そのものだ。

肉美味い。うどん美味い。

平和で飯が美味い。

感じる味の質が一段二段上がっている気がする。

若葉「おい武谷、顔が緩み過ぎてるぞ」

武谷「ん？ あ、ああ、ごめん。気をつけるよ。美味い」

若葉「まあ自分で言つといてなんだが気の緩む気持ちも分かるが」

ひなた「こんなときくらい、緩めて心を休めるのもいいと思いますしね」

千景さんはぼくの隣で淡々と食事をしている。距離がかなり近いけど。肩が触れている。密着間近。むしろマジか。うどんを嚼る震動まで伝わってきそう。それは言い過ぎた。

友奈「ねえたけくん、お水もう一杯どう?」

武谷「ん? ああ頂くよ」

コップの水がなくなりかけていたので友奈さんが気を利かせてくれる。

そしてまた食べて飲んで減ってきた。

友奈「ねえたけくん、もう一杯どう?」

武谷「頼むよ」

もう食べ終わるという時。

友奈「もう一杯いつとく?」

武谷「……」

水は半分も入っているしそんなに飲んだらお腹ガボガボになってしまうのだけど。けれどぼくの返事を聞かずに友奈さんは水を入れた。

せっかく入れてもらったので飲まないのも悪いと思い全部飲み干した。

ぶるつと体が震える。当然の如くトイレに行きたくなつた。席を立つ。

トイレに行く。

男子トイレに入り用を足し手を洗いトイレから出る。

目の前に友奈さんが居た。

武谷「ん？　ここは男子トイレだよ？」

友奈「知ってるよ。たけくんを待つてたんだ」

武谷「ぼくを？」

友奈「たけくん、やっぱり気づいてない？」

武谷「なにを？」

友奈「ん〜」

友奈さん困つた表情。

ぼくは困られるようなことをしたのか。一体何をしてしまったんだ。

友奈「えつと、気づきそうにないからもう私が言っちゃうけど、本当はたけくんが気づかなきやいけないことなんだからね？」

武谷「うん、わかつた。だから教えてくれ。ぼくはどんな罪を犯してしまったんだ？」

友奈「罪つて程じゃないけど、ぐんちゃんね、今日たけくんに見てもらおう為におめか

ししてきたんだよ」

武谷「え、マジ？」

友奈「マジだよ」

みんなが食べている方を壁の陰から覗き込む。

確かによく見ればいつもより千景さんの髪につやがあるような。髪留めも見たことないものなような、前に一緒にシヨッピングモールに行った時のように可愛い服装なような。

そういえばぼくも出掛ける前身だしなみを整えた。なぜ相手もそうだという考えに至らなかったのか。なまじ女の子なら言わずもがな。

不覚。

友奈「だから気づいてあげてほしかったんだけど、ぐんちゃんのおめかしについて何か言つてあげてほしいな」

武谷「わかったよ」

千景さんを幸せにするのがぼくの目的なのだから。

もしかしてここで話す為にぼくのコップへ執拗に水を注いだのかな。

みんなと食べていたテーブルに戻る。

話していたことが千景さんにバレないように友奈さんはトイレに入り時間差で戻る計算だ。

武谷「あれ、千景さん」

ぼくは改めて見て自分で気づいた風を装った。

武谷「いつもかわいいいけど、今日の恰好かわいいいね。髪留めも新しいのだし、服かわいいいし」

千景さんはぼくに超速で振り向き、頬を染めていた。

千景「ん、ありがとう……」

ぴとっ、がしっ、ぎゅっ。

そんなオノマトペが付きそうな一連の動作。千景さんが抱き付いてくる過程。

おうふ。

杏「すごいですね」

そんな小並感。目をキラキラさせるんじゃない。

球子「マジか」

ひなた「大胆ですね」

若葉「人とはここまで変わるものなのか」

千景「失礼ね……」

千景さんが抱き付いたまま若葉さんを見て言う。

若葉「あ、私に対しては変わらないんだな」

千景「当然よ」

若葉「当然なのか」

友奈「よかつたね、ぐんちゃん」

いつの間にか戻って来ていた友奈さんが満面の笑みでそう言った。

祝勝会が終わり夜。

ぼくは寮の自室でのんびりしていた。

ゲームしたり、これからについて少し考えたり、色々と。

コンコン。ノックされる音。

立ち上がって玄関を開けると、そこには千景さん。

武谷「わっ」

千景さんが突然タツクルするように抱き付いてきた。

千景「聖陵院くん、もふもふね。暖かいわ」

武谷「……………」

……………。

このままでもいいかな。

とりあえず誰にも見られないようにドアは閉めておく。ボタン。千景さんに抱きしめられたままなので閉めにくかった。

千景「一緒にお風呂入りましょう」

武谷「え」

千景「一緒に寝ましょう」

武谷「え」

武谷「そういうのは、ちょっと、まだダメなんじゃないかって、思うんだけど」

千景「私たちは、恋人よね……？」

武谷「それは、まあ、うん、千景さんがそう言うなら、そうなんじゃないかと愚考する」

千景「恋人なら、いいのではないの……」

武谷「ほら、ぼくたちまだ若いし」

千景「若いからこそではないのかしら」

武谷「ぼくはプラトニックな方がいいかなって、大切にしたいんだ」

千景「……………」

千景さんは至近距離でぼくの顔を見ている。

千景「まあ、いいわ……」

武谷「そうかい……」

千景「でも今は、しばらくこのままでいさせて。帰ってくるのが遅かった罰よ」

武谷「うん、それは、いいけど」

泣かせてしまったし。

ぼくは、記憶がない。でもみんなが、千景さんが大切だ。

この女の子がとても愛しく思えるんだ。

今までは、ただ守りたかった。幸せにしたかった、その気持ちしかなかったはずだし、それしか考えていなかった、だけど。

ぼくも抱きしめ返す。

ああ、多分、きつと、ぼくも好きなんだ。

千景「もう、いなくなつては駄目よ……」

武谷「うん。約束する」

千景「聖陵院くん、一緒にいて……」

武谷「一緒にいるよ」

千景「それ、これから何度でも言つて……」

武谷「何度でも言うよ」

ぼくのこの体は、トール様が滅びない限り消えないだろう。多分年も取らない。でもだからこそ、千景さんの元に最後まで居ることが出来る。

その後は歴史を記憶して代弁人にでもなるのかな。大赦に今までのことを、これからこのことを伝えていく感じで、みんなと守ったこの世界の行く末を見守ろう。

次代の勇者に協力するのもいいだろう。

今のぼくには、もう戦う力なんて無いけど。

それでも何かしら出来ることはあるだろう。

とにかく、今は千景さんと共に過ごそう。後は適当にやるさ。

これから先も、なんとかなるだろう。

みんながいるのだから。

みんなが守った世界が、人々がいるのだから。

ふと、窓の外をおもむろに見上げる。

鎌のような三日月が、いい色をしている。

まるでぼくたち人類の、未来を照らすように。